

# WEB「京都大学新聞」抜粋 第一回（1920年代）～第七回（1970年代）

## 【連載第一回】京大新聞の百年 「京大にも新聞を」きっかけは東大とのスポーツ交流

2023.10.01



京大新聞の卒業生が「京大新聞史編集委員会」を組織し、関係各氏から原稿を集めて出版（草思社／1990年4月／1600円）

京大新聞は2025年4月に創刊100周年を迎える。節目に向け、その歴史を振り返る特集を今号から十数回にわたり連載する。時系列で振り返る「通史」は、1990年に出版された書籍『権力にアカンベエ！ 京都大学新聞の六五年』から大部分を転載して再構成する。このほか、実際の紙面から編集体制や紙面内容の変遷を書きとめ、コラムで視点を補う。各時代にどういう背景のもと何を大切にしてきたのかを見出すことで、今後の紙面づくりに活かすとともに、報道、出版、文芸、教育、学生運動など各方面の歴史を考える際の一助となることを期待する。連載初回は、1925

年の創刊から29年ごろまでを取り上げる。（編集部）

### 目次

通史：創刊～新聞部事件（1925～1929）

拾い読み：「運動記事がのさばりすぎ」との声も

コラム① 銀行や一般紙も出稿 創刊当初の広告

コラム② 研究から自治組織へ 他大学の創刊事情

コラム③ 「事件」の底流の回想 創刊当初の編集風景

通史：創刊～新聞部事件（1925～1929）

### 全国で7番目の大学新聞

京都帝国大学新聞は1925年4月に創刊された。大学創設から28年後のことである。

日本の大学新聞は、大正の半ばから相次いで誕生した。1917年5月の慶應義塾大学『三田新聞』を皮切りに、東京帝国大、日本大、早稲田大、明治大、大谷大で次々と創刊され、京都帝国大は7番目にあたる。

創刊のきっかけは、京大と東大のスポーツ交流をめぐる報道だった。両大学の間では、柔道、剣道、陸上競技など学友会の各運動部が毎年交互に訪問し、一週間ほど対抗戦を繰り広げる「運動週間」が恒例となっていた。東大を京都に迎える年だった1924年、東大の帝国大学新聞が運動週間中に部員を派遣して京都の印刷所から新聞を発行するといううわさが伝わった。前年の東京での運動週間で帝国大学新聞の活躍を目の当たりにしていた学友会の学生委員はこの話に驚き、「京大にも新聞を」と学生監（現

在の学生担当理事にあたる)の花田大五郎に働きかけた。朝日新聞や読売新聞で勤務経験のあった花田は、各部の要請に応じ、さっそく新聞を発行することにした。当時、寄宿舍にいる各学部学生で構成されていた学友会雑誌部の部員を編集委員とした。こうして、秋の運動週間中、京都日日新聞(現京都新聞)の工場を借りて印刷された4面の新聞が連日発行された。競技の予定や結果、予想や感想を掲載している。東大側は結局、京都での発行を断念したという。

雑誌部から新聞部へ

1924年の学友会の役員会では、運動週間の新聞発行で自信をつけた学生の要望をふまえ、雑誌部の廃止と新聞部の設置を決議した。▽1925年4月から学友会の機関紙を発行する▽新聞に関する責任は学生監がとる▽月2回、年20回程度発行する▽学生や教官には無料配布する、などを決めた。

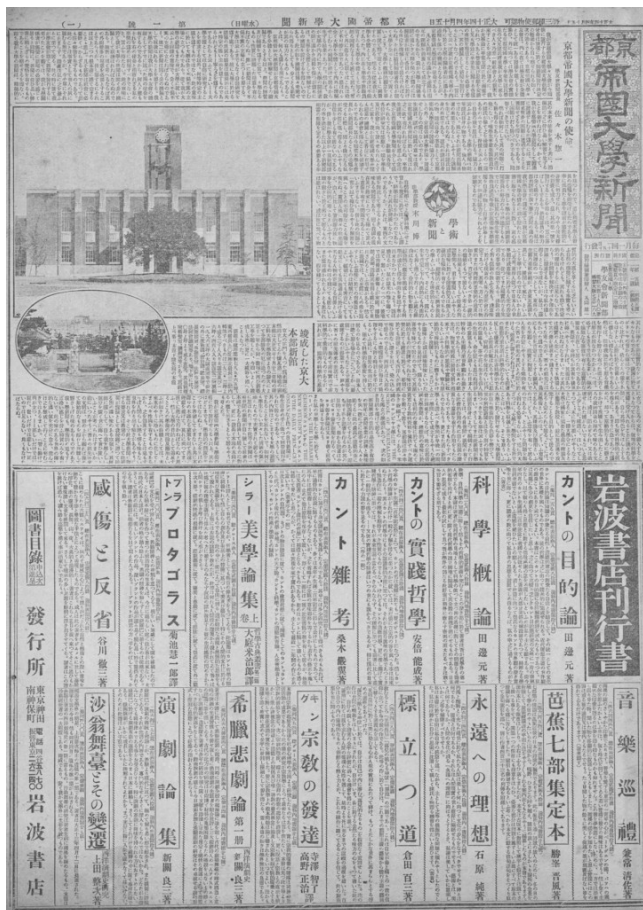
なお、雑誌部のはじまりは1909年にさかのぼる。この年に開かれた学生茶話会が盛況で、永続的な開催を目指して親睦団体「以文会」が創設された。ここに親和部と雑誌部が置かれ、『以文会誌』(のちの『学友会誌』)を創刊した。毎年12月に発行し、寄宿舍や各分科大学に関する記事を通して「学生生活の概況を報告」した。この以文会が、1898年に結成された運動会と1913年に連合し、学友会となった。学生代表だけでなく各学部2人の教授も役員として参加したほか、会長として総長、幹事として学生監が指導にあたった。

また、花田の読売新聞時代の後輩の入山雄一が事務担当者として東京から招かれた。入山は「新聞を一生の仕事として選んだが、まさか大学新聞とは夢にも思っていなかった」と回想している。その後、約半世紀にわたり、入山は京大新聞とともに歩むことになる。

学友会の旧雑誌部員と新たに選ばれた学生が編集部を構成し、1925年4月、創刊に至った。部長には法学部長の佐々木惣一が就任し、入山雄一が発行人となった。当時、新聞紙法などの制約があり、一般紙のたいていの発行人にはそれらの法令違反の前科があった。そのリスクを学生監や学生が負うわけにはいかないという判断から、入山に白羽の矢が立った。



佐々木部長(京都大学大学文書館所蔵)



創刊号（1925年4月15日号）の1面

「不偏不党」「温かき連絡保つ」

創刊号の1面には、佐々木部長の《京都帝国大学新聞の使命》をトップに掲げ、末川博・法学部教授の《学術と新聞》と題する論文や、完成したばかりの本部時計台の写真を載せている。

佐々木の説く大学新聞の使命とは、「京都帝国大学の内外において大学の関係者間に温かき連絡を保つの機関なる」ことで、「第一に、新聞は全く不偏不党の立場に立つことを要する」と述べている。

2面にはスポーツや学友会からの告知、3・4面には3月の卒業生と4月の新入生の氏名一覧、5・6面には学内の諸教官のエッセーや雑報を掲げている。大正デモクラシーという言葉に象徴される雰囲気の中で産声をあげた新聞とあって、大学生活の明るい側面を活写した記事が目立った。東大の帝国大学新聞と違って

て学生編集員の意見を述べる欄がなく、政治的な色彩の話題を取り上げない紙面だった。原稿は、学外へ依頼せず京大の学生・教官から得ていたという。

初年度は月2回発行で、年間予算は約1万円だった（参考：当時の公務員初任給は約70円）。予算のうち3割弱は学友会から補助を得ていた。翌年から月3回発行に増やしたが、大学生活は週単位で進むということで、1929年からは週刊を実現する。ときに印刷所の都合や内部事情で月2回に逆戻りすることもあった。

## 時代の転換点で誕生

第一次大戦後の日本社会は、1920年の戦後恐慌によって不況の慢性化に直面した。労働運動が深刻化し、日本共産党や日本農民組合が結成されたほか、23年9月1日には関東大震災が発生した。こうした情勢で第二次護憲運動が起こり、25年3月、25歳以上の男子に選挙権を与える衆議院議員普通選挙法が成立した。同時に、のちに基本的人権を脅かすことになる治安維持法も成立した。京都帝国大学新聞は、大正デモクラシー運動の結実とその反動の下地形成という時代の転換期に誕生したのである。

学内に目を向けると、自由な研究を志向する学風のもと、法学部には刑法の滝川幸辰、立憲主義学派の憲法学者として知られた佐々木惣一、文学部には京都学派の西田幾多郎や和辻哲郎、経済学部にはマルクス主義経済学者の河上肇らがいた。こうしたリベラルで思索的とされた京大の学問の系譜は、国家によって次第に規制されていく。その一例が次にみる「京都学連事件」であり、紙面にも時代の暗部を感

じさせる記事が増えはじめる。

## 京都学連事件で報道規制も

軍部の台頭やロシア革命などをみた学生らにより、全国の大学・高専で社会科学研究会や社会主義研究会が生まれ、そのたびに学校当局から解散命令が出された。京大では 1923 年に社会科学研究会（京大社研）がつくられ、全国の社研の中心的存在になった。「プロレタリア社会科学の研究ならびに普及」などを掲げて活動し、25 年 7 月に京大で全国学生社会科学研究会連合会大会を開いた。この年の 12 月には、軍事教育反対運動のビラ掲示を機に警察が京大および全国の大学で計 33 人を検挙した（十二月事件）。翌年 1 月には同様に 37 人が検挙された（一月事件）。この一連の「京都学連事件」は、施行されたばかりの治安維持法がはじめて適用された事件となった。

事件に際して京都帝国大学新聞は、特高が監視していた 7 月の連合会大会の報道を大学当局から抑えられた。一方、十二月事件では 12 月 15 日号で経過を報じた。ニュース面のトップに、《わけのわからぬ本学学生不当検束事件》という見出しを掲げ、紙面の 3 分の 1 をさいている。創刊以来、政治的事件をほとんど扱わず、学生編集員の意見を紹介する欄もなかったが、この記事では終わりに〈大学の使命は〉〈何の為の検束〉という小見出しをつけて「主張」を掲載。「約四千を数える学生の中に偶々その百分の一にも足らぬ学生がかなり進んだ社会科学の研究をしているからとて別に驚くにも足らぬことと思ふ」と記し、大学の自治や研究の自由の侵害を指摘し抗議している。

翌年の一月事件については、事件後 8 か月が経過した 1926 年 9 月 21 日号で本格的に扱っている。報道が差し止められていたためだが、これは一般の新聞も同様であった。

この年の 3 月には岡田良平文相が高校等の生徒に「左傾思想研究禁止」の内訓を出し、そのなかで学生新聞を事前検閲するよう求めた。それまでも諸法令の制約が大学新聞に課されており、京都帝国大学新聞では新聞部長が紙面をチェックしていた。一方、京都学連事件に際しては、紙面を通して思想の自由を訴えている。たとえば、法学部や経済学部の教授から、家宅捜索での寄宿舎立ち入りなどをめぐって「手続きは不法」、「教育や研究の自由を脅かす」との抗議の声が上がっており、これらの声明を掲載した。10 月 11 日号では佐々木新聞部長みずから捜査の違法性を論じた講演の内容を載せている。





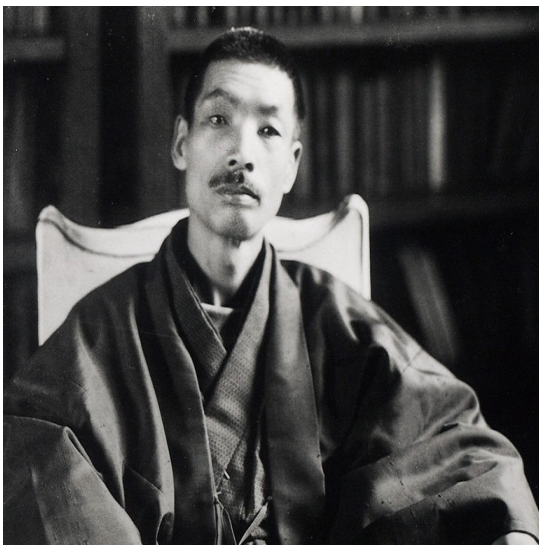
1927 年ごろの編集風景（京都大学大学文書館所蔵）

### 河上肇 教壇を追われる

大学当局は京都学連事件後、社研の指導教授に経済学部の河上肇をあてた。2 年後の 1928 年、共産党などの関係者千数百名が治安維持法違反の容疑で検挙された（三・一五事件）。こうしたなか、文部省から「左翼教授追放」の要求が出て、荒木寅三郎・京大総長は、経済学部教授会の同意を得たとして同年 4 月、河上に辞職勧告を出した。理由は、社研から治安を乱す者が出ており、その責任を問うというものであった。河上は「納得できない」としながらも、教授会が同意している以上、大学の自治を守るためにその意向に従うとして辞職した。

4 月 21 日号では、1 面のほとんどをこのニュースにあて、《大学を辞するに臨みて》という河上の長文の原稿を載せている。辞任に反対する経済学部の学生による集会がたびたび中止を命じられたことや、社会科学研究会が解散させられたニュースが並ぶほか、〈河上博士は学者的信念に厚い人である〉という旨の佐々木の手記も載っている。

河上の追放をめぐり佐々木は、荒木総長が経済学部にはからず辞職勧告しようとしたと聞きつけて、教授会の意向を問うよう申し入れるなど精力的に動いた。その佐々木が新聞部長を辞任したことに端を發し、創刊以来の事件が起こる。



### 新聞部長の辞任

1926 年 11 月ごろから、学生の自治権拡大を図る学友会の改革運動が断続的に起こるなか、新聞部は学友会補助金の増額を訴えたものの成功しなかった。しかし、広告収入の増加をあてにして、1929 年 4 月 15 日号から月 3 回発行を週刊へ切り替えた。同年 4 月 29 日号で創刊百号を迎えた。

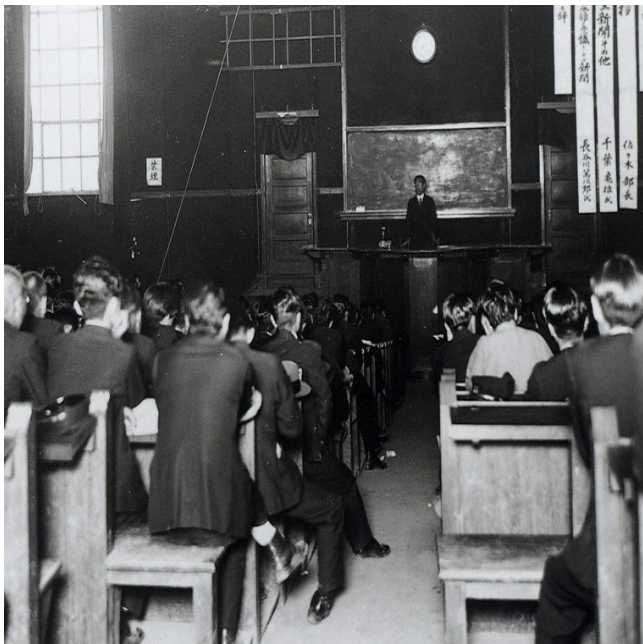
当時の紙面は通常が 4 頁、ときに 6 頁となり、編集部の意見を記す欄もあった。学内外のできごとを短く批評する《風車》、ゴシップを紹介するコラム《茶のけむり》、学生らに論じさ

せる《自由論談》、投書欄の《反響》など、毎号活気にみちていた。

河上肇（1928 年、京都大学大学文書館所蔵）

こうした意気盛んな体制は、佐々木部長の退陣によって一挙に暗転する。辞任の理由は定かではない。退任後の 11 月の学友会役員会で、学生が「学校の圧力のために辞職したといわれる」と発言したところ、新城総長はこれを否定した。一方、以前から「思想問題に関する記事において学内外に兎角の批判が起こり、原稿検閲の煩雑から」辞意を表明していたという。

全国の学生新聞も厳しい冬の時代に入った。1929 年 3 月 5 日号では、同志社大学で理事会から警戒されていた学生新聞の団体が「単なる御用新聞は使命ではない」と抗議の解散をしたことを伝えている。「先に早大新聞を失ひ、北大また発行停止の運命にあり、今更に同大新聞を失う、学生よ、諸君は何処に行かんとする」と、悲愴な叫びを記している。



百号記念の新聞部主催講演会（1929 年 4 月 29 日／法経第一教室）（京都大学大学文書館所蔵）

### 部員の大量首切り

佐々木の辞任後、後任のなり手がなかった。新聞部長をすると文部省のブラックリストに載るといううわさもあったという。さしあたり大学当局は、学友会事務幹事だった大野熊雄を 9 月 14 日付で部長事務取扱いとした。大野は就任早々、厳しい措置をとった。▽発行回数を週刊から月 2 回に減らす▽部員が多すぎるため、上級生の委員 7 人（※）を残して下級生の部員 21 人は全員やめさせる、という内容であった。

大野は委員を集めてこの案を示し、7 人のうち出席し

た 4 人の賛成が得られたとして、10 月から実行に移した。

### ※入部後 1 年で部員から委員に昇格するしくみ

首を切られた部員たちは抗議し、講演部など他の部員もこれを応援して、学内にビラをまいたり一般の各新聞社へ知らせたりした。しかし、11 月 1 日の学友会臨時役員会で大野の説明が了承され、学生たちの抗議も次第に下火になった。大野は、「新聞部は部長を失って休刊されんとしたので引き受けた」、「彼らの決議は全学生の意志とは思われない」と述べ、抗議する学生を批判した。

「新聞部事件」以降の紙面は、学生の短評《風車》や《自由論壇》、投書欄まで影をひそめて、すっかり生彩を失った。予定どおり発行されたのは 8 月 12 日号までで、部長辞任を扱った 9 月 16 日号は 2 頁のみとなっている。《当分、本紙は月 2 回発行》との経過説明をはじめて掲載した 10 月 5 日号には、大野の《京大新聞の歴史と使命》と題する文章が載っている。それによると、▽創刊の際に佐々木新聞

創刊～1929 年末までの 5 年間の 115 号を見返し、記述を抜粋して紙面の特徴や運営状況、学内の様子を概観する。紙面での表記を保持しつつ、仮名づかいなどを適宜改めた。

| 1929                                                                                                                                                                                                                        | 1928                                                                          | 1927                                     | 1926                                                                             | 1925                                                          | 1924                                                                                                        | 1923     | 1922                              | 1921                           | 1920                           | 1917                     | その他                                                                                                     |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|-----------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 10 学生大会、部員退部に<br>反対決議<br><br>9 大野熊雄・学生主事が<br>部長事務取扱に就任<br>↓<br>週刊制廃止や部<br>員の退陣を断行<br><br>5 佐々木部長辞任<br><br>4 創刊100号迎える<br>↓<br>記念講演会開催<br><br>4 「独力」で週刊化<br><br>3 週刊化のための予算増<br>額要求が拒否される<br><br>4 創刊100号迎える<br>↓<br>記念講演会開催 | 4 河上肇教授辞職<br><br>京大社研に解散命令<br><br>3 週刊化のための予算増<br>額要求が拒否される<br><br>4 「独力」で週刊化 | 4 初めて論文審査で編集<br>員を採用<br><br>10 東大新聞部と懇親会 | 1 一月事件（学生検挙）<br><br>4 半月刊から旬刊制へ<br><br>5 岡田文省、学生の思想<br>取締の内訓<br><br>10 東大新聞部と懇親会 | 7 第2回学連大会<br>↓<br>報道を規制される<br><br>12 十二月事件（学生検挙）<br>↓<br>報道解禁 | 12 学友会臨時役員会で雑<br>誌部の新聞部への改組<br>を決定<br><br>10 学友会雑誌部、東大と<br>の運動週間で特集新聞<br>を発行<br><br>7 時計台完成<br><br>5 京大社研結成 | 大谷大学新聞創刊 | 11 早稲田大学新聞創刊<br><br>10 明治大学駿台新報創刊 | 10 日本大学新聞創刊<br><br>12 帝国大学新聞創刊 | 12 帝国大学新聞創刊<br><br>10 日本大学新聞創刊 | 7 三田新聞創刊<br><br>新聞部・大学関連 | 10 明治大学駿台新報創刊<br><br>11 早稲田大学新聞創刊<br><br>10 日本大学新聞創刊<br><br>12 帝国大学新聞創刊<br><br>7 三田新聞創刊<br><br>新聞部・大学関連 |

※『京都大学新聞縮刷版』（全10巻）出版）などをもとに作成

## 【紙面内容】

▼創刊号のトップは佐々木部長の《京都帝国新聞の使命》。「不偏不党」を宣言▼スポーツ各部の結果を写真つきで、ときには複数面にわたり掲載▼学内の教員の寄稿が多い▼身体検査の告知や教員の辞令、演奏会の告知など、創刊号で掲げた「連絡を保つ機関」としての機能がうかがえる▼東大との運動週間は臨時特集号で5頁にわたり詳報。一方、別の号では当該行事に「若干の疑問を抱く」者の私見を掲載。文化部など参加者の拡張を提案した▼震災義援金募集の告知を掲載。被災地域の学校からの反響も記事化▼学友会各部の紹介・近況報告や短歌・俳句、旅行部の紀行、高校だよりなど

## 【記事拾い読み】

▼本学学生不当検束事件：同志社の学生が「極めて不穏な印刷物」（スターリンの書籍の一節を含む資料）を所持していたとして、警察が家宅搜索。花田学生監は連絡なしで寄宿舍へ立ち入ったとして抗議▼希望者に限り軍事教練実施：学生監、他大学の実施状況を見て「教練の実施を急いだ」▼附属病院、診察料徴収開始▼農学部で栽培したトマトとナス出荷▼京大社会学科研究会：その精神と事業▼ドイツの大学事情



端艇写真や電車広告も 1925 年 4 月 15 日号

1926 年

## 【日程・料金】

月 2 回→月 3 回へ／1 部 5 銭・年 1 円

## 【運営】

▼4 月から旬刊（月 3 回）▼部員募集：1 回生から若干名、編集その他を「手伝っていただく」▼「本学関係者限定」で投書や「学内文芸に関する読み物」を募る▼運動週間のみ新聞配布場所を追加：競技場入口、表門裏門、新聞部室（普段は所属学部事務室で配布）▼コラムによると運動週間中の新聞部員は「外勤と編集」に分かれ、編集担当は「6 日間殺風景な部屋に座りっきりだった」

## 【紙面内容】

▼内務省から京大への映画筋書の募集を掲載。「学内一般に周知せしめるやう通牒があった」と記しており、広報誌の役割を期待されていたことがうかがえる▼「明後日は宣誓式」といった記述や、11 日号に 15 日締切の情報などがあり、発行後すぐに頒布していたとみられる▼4 頁強で学友会主催の競技大会を詳報▼教授の寄稿（海外大学の様子や教育論、就職状況、学生への要望など）▼演劇や書籍、映画に関する雑感など



## 【記事拾い読み】

▼学友会予算：寄附や会費で収入は約3万円。中央部が約1万円、新聞部補助が2700円、他の運動部支出がそれぞれ200円～2千円程度▼学友会改善運動本格化▼学友会代議員選挙：新聞部より4名が当選▼東西十大学に跨る社会学科研究会事件終結す：2面にわたり報じる▼滝川幸辰：学生事件の感想▼帝大新聞国際版：東大新聞部が「英語国の学界に名乗りを上げる機を得た」▼軍隊通信：入隊した京大生の手記▼農学部がニワトリを飼いはじめた▼学内郵便物に所属を書くよう呼びかけ▼武者小路実篤の文芸講演会▼森戸辰男講演▼教授約40名の夏の過ごし方一覧▼東西両帝国大美術製作品展覧会▼

「感ずるところあり学友会新聞を脱退する」3名の氏名

▼投書「新聞を見て甚だ不愉快」

時計台夜景や農場風景 1926年2月15日号

1927年

【日程・料金】

月3回／1部5銭・年1円

【運営】

▼部員募集：なるべく1回生より十余名▼原稿応募：文芸、演劇、映画、音楽、美術、新歓批評／学生以外も対象

【紙面内容】

▼「対東大戦グラフィック」1頁ぎっしりスポーツ写真▼卒業生消息欄を新設：数名の名前・居住地・職業▼教授寄稿（昆虫の習性、法律改革など）文学部の卒論題目▼教官の引越先や電話番号▼学校通信（東大・龍大・一

高など）

## 【記事拾い読み】

▼東大側の都合で運動週間ついに廃止▼「学友会廃止論」農学部教授：日本に於ける学友会はどれも官製。学友会は時代錯誤▼学友会への花田の私見：会費を納めざる「会員」が存在▼附属病院火事▼学友会会費保留運動▼学友会規則に関する調査委員会成る▼新聞部部員の卒業コラム▼従来の学生監室を学生課と改修す▼学生が普選に立候補▼法学部教授が京都市長に▼社会科学事件5月30日判決▼社会科学研究会、臨時総会▼図書館の利用者：一日の平均閲覧者95人▼学生の最高年齢は文学部の56歳▼日本移民の寄生虫調査で藤浪博士ブラジルへ▼理学部新事業：天文台花山移転、物理学教室の新築、阿蘇の火山研究所▼理学部一部移転▼工学部規程変更▼木材試験室成る▼運動場拡張▼馬術部に新馬来る▼オリンピック大会に於ける本学諸選手の活躍▼スポーツ今昔物語▼年越スキー旅行紀▼京大劇

研究会生る▼投書：偽大学生徘徊す▼工学部生の満州見学▼痔を治すの記：入湯、灸、炭酸水、無花果の木を煮して飲む▼坂口博士、浜口雄幸から牛肉をおごられる▼最近の画界における問題



対東大戦グラフィック 1927年10月21日号

1928年

【日程・料金】

月3回／1部5銭・年1円

【運営】

▼部員募集：1、2年生から若干名の部員を募る▼  
新採用法で部員の選考：四十余名の応募者があり、  
選考会が開かれた。佐々木部長は①選考会の模様の  
記事②入部志望の動機③入部後専心働きのうるか  
④他の部との関係があるかの4点を書かせて現委員  
と選考した▼会計係より「振り込みのない方には  
送付を停止」▼創立記念の祝賀会で号外発行▼  
「全学の新聞であり、大学生活の如実なる鏡であ  
らねばならぬ」として、紙面への「忌憚なき赤裸々  
の批判、感想、希望」を募り、15件集まった：週  
刊化せよ／論文が少ない／運動記事がのさばりす

ぎる／社会の新聞に模倣追従する必要はない／社説欄がほしい／学生生活の内面的思索的方面の表現  
がなさすぎる／レポーター以上のものであってほしい／学友の創作を連載せよ／頁を増やせ／意気  
洩瀾たらしめよ／主義主張の議場たらしめよ／不平も不満もたまには討論も載せたらいいだろう／論  
評がほしい／東大に比するもあまりに貧弱／生活にもっと接近したものにしたい／現文壇の新思想を  
一つも反映していない▼第二回論文募集：テーマは「大学生の見たる思想困難」／審査員は滝川幸辰教授  
ら

【紙面内容】

▼教授寄稿（議会政治、動物の帰家本能、フランスの芝居など）▼7頁にわたりスポーツ詳報▼詩歌、  
俳句、短歌、劇評、映画評、書評▼試験日程▼文学部卒論題目▼卒業生・新入生名簿

【記事拾い読み】

▼工学部長「もう少し打ち解けた調子のいい全学の集会が欲しい」▼学友会、学部新設と調査委員会  
再設は否決▼突如学友会解散説伝わる：有志驚いて請願書を提出▼学生数5千を超ゆ▼初夏の総長室：  
総長がフランス政府から勲章を受けた▼六帝大学生監会議：思想取締で賑わう▼「秩父宮殿下、本学へ  
御成り」▼総長から天皇への挨拶文▼兵役願期日▼河上肇辞職▼西田幾多郎退職▼ヘーゲルとマルクス

に関する講演▼欧米の動物学者、続々見学に▼市電大学線開通▼昨春卒業生の就職しらべ▼世知辛くなった大学生活▼笠ヶ峰にヒュッテ建設▼盛んになりし全医学部庭球大会▼柔道旅行私記▼読書事情：下火になった社会科学もの、雑誌では『改造』や『経済往来』▼投書：大学の歌が欲しい



河上教授辞職を伝える 1928 年 4 月 21 日号

1929 年

【日程・料金】

月 3 回→週刊へ／1 部 5 銭・年 1 円→1 円 50 銭へ

【運営】

▼毎月 1 の日から 5 の日発行に変更、さらに週刊へ移行  
▼新刊批評、映画と演劇評、短歌、俳句を募集▼募集論文は 26 本集まった→4 名に賞、講評「なんとなくものたりなかった」▼百号記念講演会を新装した法経第一教室で実施▼新聞部見学旅行で大阪毎日新聞社へ

【紙面内容】

▼学園消息（同大・東大など）▼教授寄稿（高等試験令、中国情勢、イギリス選挙、宇宙物理など）▼反響（投書）▼コラム（風車・茶の煙）▼自由論談▼卒業生消息▼映画・

劇評▼今週の催し▼スポーツ記事が減少

【記事拾い読み】

▼法経第一教室に拡声器設置：教官の声が届かないため「我が国最初の試み」▼文部省、従来の学生課を廃し思想取締を行う学生部新設へ：京大の谷内学生主事談「ちつとも知らぬ」▼試験の最中に試験廃止運動起る▼激烈なる就職戦▼企業の就職担当者のコメント一覧▼台湾遠征記▼レーニン主義の理論と実践▼アメリカの大学のジャーナリズム研究の概略▼ワシントン大学のマーティン博士来学▼入学難は医工学部、法経は今年も無試験か▼創立記念の園遊会での排酒めぐり教授が署名運動▼不法検束について：瀧川幸辰▼マルクス主義流行の鎖国性：慶応の教授が寄稿▼ドイツの賠償金で購入したマイヤー文庫来る▼図書館で調査：館外貸出総冊数は 610▼名野球部長引退▼開講日近き動植物学新講座▼天文台完成▼京都学士会館落成式▼校友会臨時役員会：新聞部事件が中心▼佐々木博士、新聞部長を離任「新聞多端の折から哀惜が甚だしい。これからは研究に全力を傾注」▼投書：「大学新聞が良くなった」としつつ、「全然知らない人の書いたような」記事もあると苦言／書籍の広告を増やすよう要求▼理事会の圧迫で同志社新聞解散す→別の新聞が出されるようになったとの続報も▼大阪時事新報編集局長寄稿：三田新聞創刊の頃▼大阪朝日新聞記者寄稿：新聞の天職と意義▼三・一五事件で入獄した学生の手記▼「本学は 420 万円の計上予算と 85 万円の臨時予算を得」た▼世は緊縮時代：本学予算にも 24



万円の大ナタ▼緊縮予算が海外留学に祟るか▼科学研究の奨励費：今年から精神科学にも▼学内売品値下げ要求の同盟生▼値下同盟の成果著々実現す：廉くなる地下食堂▼和進会食堂は何故高いのか▼共済部で炭を配給▼学生利益の徹底に共済部報を頒つ：第一回発行へ忙殺中▼芝蘭会で雑誌発行▼『経済史研究』発刊さる▼文芸雑誌発刊の企て▼民俗学研究会成る▼雑誌「改造」購入禁止に医学部学生らが抗議→禁止撤回▼京大映画研究会成る▼トーキー論序説：アメリカ発の映像・音声同期した作品が京都でも上映▼映画年間ベストテン▼本学初の女性講師▼文学部卒論：近代作家の評論が多い



部長辞任を伝える 1929 年 9 月 16 日号

コラム① 銀行や一般紙も出稿 創刊当初の広告

創刊当初の広告を見ると、書籍、衣服、酒、薬、飲食店、床屋、タクシーといった雑多な広告がある。印刷製本や木炭などの広告で「京都帝国大学御用達」という宣伝文句がみられる。大学周辺の店にとどまらず、《本紙愛読諸賢の御便宜のために各地に於て左記の旅館を選定仕り候》と記して別府や箱根など各地の旅館の名前を並べているほか、鉄道（新区間開通）、銀行、建築、生命保険、百貨店、劇場などの広告もある。大阪毎日、大阪朝日、大阪時事新報など報道各社も出稿しており、新聞社が実施する懸賞論文の募集広告も載っている。

1637 年創業の酒造メーカー・月桂冠、1907 年創業の洋菓子店・

村上開新堂、1927 年の創刊当初の岩波文庫など、現在まで続く名前も数多く見つかるほか、結婚相手の身元調査、尺八教室、制帽、白衣専門店などもある。

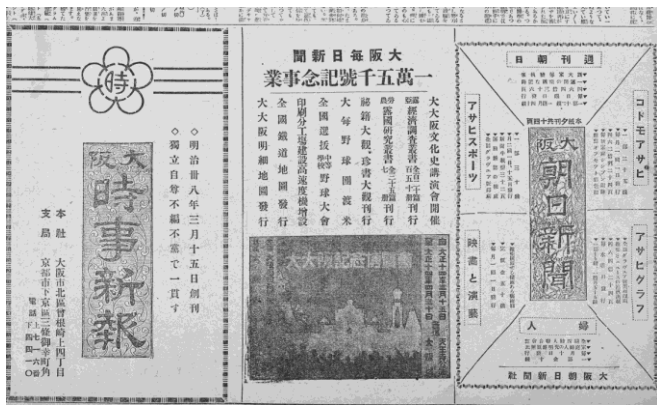
表記に着目すると、当初は横書きを右→左の向きで読むものが混在しており、1927 年ごろには左→右が多くなっている。

広告掲載費用は、紙面の題字の下に記している。1 行で 60 銭、記事の間に挟む場合は 2 倍、掲載頁指定は 2 割増となっている。1 面指定が数多く集まったのか、読者が最初に目にする 1 面をすべて広告で埋めている号が散見される。

創刊からの 5 年間で、それぞれの広告がやや小さくなったものの、数は各号 20～50 個ほどで推移し、にぎわっている。



新聞部入口前での記念撮影（京都大学大学文書館所蔵）



創刊号に寄せられた新聞各社の広告



1927年8月1日号の広告

## コラム② 研究から自治組織へ 他大学の創刊事情

「各大学の連中が親しく」

「東洋創始の学生新聞」とされる三田新聞が生まれた慶應義塾は、作文を募集して褒賞を与えるなど、元来、学生への文筆の奨励に努めてきた。1898年には学生有志が運動会の様子を収めた印刷物を販売し、「羽の飛ぶ如く」売れたという。

これらを背景として、1900年から施行された大学部学則に新聞記者を養成する旨が盛り込まれ、1913年には新聞科が設置された。記者志望者を募集し、試験のうえ数名の授業料を免除するなどした。しかし、出身者が新聞界に進まない状況が続き、数年で開講されなくなった。これに代わって1917年に学生自治団体「三田新聞会」が組織された。補助金を与えられて政治科学長の指導のもとで新聞研究に取り組む一方、同年7月から実習の一環として新聞の発行をはじめた。創刊号では、「本塾を中心とする各般の事項」を報じて「趣味と実益」に寄与する旨を宣言している。

学科から出発という点では、全国で3番目となる『日本大学新聞』も似ている。1918年、社会科に自由聴講の新聞学講座を置き、「実地研究に資するべく」新聞の発行をはじめた。慶應から転学してきた三田新聞の元会員もいたという。継続的な機関新聞を求める学生と大学当局との交渉を経て、1921年秋に日本大学新聞会の設置が決まった。大学から2千円を支出し、会長は教授から選ぶこととした。なお、日大新聞の一部の部員は、後に続いた明治大学の新聞発行に際してたびたび指導に出向いたという。

続いて早稲田で学生新聞が発足し、五大学新聞連盟ができるなど、「各大学の連中が親しく」していたという。早稲田の新聞は、東北地方出身の学生を中心とした「啄木を慕ふ会」の会員らが大学当局と複数回にわたって交渉し、創刊にこぎつけた。

#### ボート対抗レースから

東大の帝国大学新聞は、運動部との関係からはじまる。1919年、早稲田大とボート対抗レースを実施した。これに先立ち全学の応援団が結成され、恒常的な組織設立の気運が高まった。結局この時点では組織されなかったが、その流れで学生による新聞創刊が実現した。

はじめは学外に事務所を構え、関係者から資金を募って発行していたが、卒業生ら5千人に迫る購読者を得るなど実績を積み、1922年に教授や学生を評議員とする東京帝国大学新聞会を設立した。その後、翌年5月にできた全学組織「学友会」が経営するべきとの判断で、新聞会の解散が決定した。1928年には美濃部達吉らを理事とする法人「帝国大学新聞社」が発足した。当時の紙面は、社説や寄稿が多く「新聞というよりは雑誌に近かった」という。



1925年の帝国大学新聞(東京大学文書館 F0004/A/08/45)

#### コラム③ 「事件」の底流の回想 創刊当初の編集風景

1929年に筆記テストを経て入部した田中文蔵氏が『アカンベエ!』に寄せたコラムから、創刊当初の編集風景をみる。

##### ●弁当がタダに

大学本部の地下食堂「あづまや」で新聞部員だと名乗れば、35銭の弁当を無料で食べることができたという。

##### ●イヤ気がさした?

田中は佐々木部長の辞任について、自由な学問研究を志向する部長と、「無産者新聞の京大版」をつくりたい一部の編集員との間で「基本的相違」があったと指摘。新聞部の会議に出て「積極的に主張討論」する佐々木部長と編集員とで議論がかみあわず、「イヤ気がさしたのではないか」とまとめている。

##### ●投書に肝を冷やす

1928年11月、治安維持法による規制下で、昭和天皇の即位の礼を「日本支配階級の不条理な乱費」と批判する学生の投書を掲載したところ、法学部の教官から、発行人の入山が不敬罪に問われるおそれがあるとの指摘が出た。新聞紙法の罰則では、不敬罪の場合は体刑を免れえず、入山は肝を冷やしたが、特高に気がつかれなかったのか、何事もなく終わったという。

一方、田中はこの一件が新聞部に対する大学当局の不信感を増大させ、大野による部員首切りなどの措置「新聞部事件」につながったとみている。

## お詫びと訂正

連載第一回（10月1日号）通史で、〈岡田良平文相が各大学に「左傾思想研究禁止」の内訓を出し〉と記していますが、内訓の通知先は「各大学」ではなく「（高校等の）生徒」です。学生課事務嘱託（京大新聞では入山氏）に検閲の旨が伝えられていたとされています。また、年表中の「文省」は「文相」の誤りです。お詫びして訂正いたします。

### 【連載第二回】京大新聞の百年 報道規制に抗議で全員退部 「弾圧」下で執筆模索

2023.11.16



入山（左から3番目）の呼びかけでファシズムに「アカンベエ」をする編集員。『権力にアカンベエ！』の表紙にも使われている（1935年ごろ）

京大新聞は2025年4月に創刊100周年を迎える。節目に向け、その歴史を振り返る特集を今号から十数回にわたり連載する。時系列で振り返る「通史」は、1990年に出版された書籍『権力にアカンベエ！京都大学新聞の六五年』から大部分を転載して再構成する。このほか、実際の紙面から編集体制や紙面内容の変遷

を書きとめ、コラムで視点を補う。各時代にどういう背景のもと何を大切にしてきたのかを見出すことで、今後の紙面づくりに活かすとともに、報道、出版、文芸、教育、学生運動など各方面の歴史を考える際の一助となることを期待する。連載第二回は、1930年ごろからの約10年間を振り返る。（編集部）

## 目次

通史：滝川事件と退部騒動（1930～1939）

拾い読み：事件報道にあらわれる濃淡 号外や部員の声明も

論考① 西田直二郎と京大新聞 入山洋子 同志社大学人文科学研究所嘱託研究員（社外）

コラム④ 一般紙記者との関わり 部室に来訪、突撃取材も

コラム⑤ 「学生の雑誌」創刊 退部組の奮闘

通史：滝川事件と退部騒動（1930～1939）

### 「大学は出たけれど」

学生の社会主義研究が規制され、学生運動の多くが非合法とされるなか、創刊から5年を経た京都帝国大学新聞の紙面は、学会などの行事のほか、校舎の新築、就職動向、スポーツ大会といったニュースで埋まった。1930年には、2月から5月にかけての学生共産党事件で京大生ら数十名が検挙された。時代は暗くなる一方だった。国内では27年の金融恐慌以来、不況が続いていた。さらに、29年10月のニューヨークの株式市場暴落に端を発する世界恐慌が日本を襲う。生産制限による首切りや倒産で失



業者が激増。大学卒業生の多くも職を得られず、「大学は出たけれど」という言葉がはやった。31年には、柳条湖事件をきっかけに関東軍が軍事行動を拡大し、戦時態勢に入った。これが満洲事変の発端となり、以後15年間にわたる大戦へ突入する。日本は33年3月に国際連盟を脱退し、華北、北京へと軍靴の音を響かせていく。共産党や社会主義の取り締まりが日増しに厳しくなるなか、言論統制の矛先が大学の教官にも向けられ、同年5月、「滝川事件」が起こる。

### 滝川思想の「取り締まり」

1932年末に始まった国会で、「赤化教授」の罷免を求める声上がり、鳩山一郎文相が「出来るだけ取り締まる」と答弁した。このとき、滝川幸辰・京大教授が同年5月に執筆した『刑法読本』が引き合いに出された。滝川は同年10月に実施した講演で、犯罪の原因に通ずる社会の欠陥を十分に踏査すべきとの考えのもと、「刑罰や保安処分はほとんど空論」と述べた。こうした考えが無政府主義を助長するとして司法当局から危険視された。

文部省は34年4月、滝川へ休職を命じるよう小西重直総長に求めた。総長はこれを拒否し、法学部教授会も抗議したが、文部省は休職処分に踏み切った。文官任用に関する勅令では、「官庁事務の都合」で休職を命じることができるとの規定があるものの、京大の教授人事に関する勅令では進退決定に総長の具状を必要とする旨が定められていた。さらに、1913年に起きた「沢柳事件」以降の合意として、教授の任免の際は教授会に諮って決める慣例が定着していた。こうした背景から、文部省による休職強行に対し、学問の自由や大学の自治への重大な侵害であるとして教官や学生らが猛反発した。抗議の波は他大学にも広がったが、最終的に滝川を含む7人の法学部教授が辞職し、さらには京大の新聞部員全員が退部する事態となる。

滝川の『刑法読本』の中で批判の対象となったのは、内乱罪と姦通罪、教育刑の説明だった。

内乱罪については、「幸福な社会の建設を目標として現実の社会の破壊を企てる」行為だとし、「もし内乱が成功すれば、行為者が支配者の地位にとって代る」ことから、「動機・行動が悪いから罰せられるだけ」と説明した。これらの記述が問題視され、のちに伏字となった。姦通罪は当時、妻のみ犯罪とされ、夫は不問だった。滝川は、夫妻平等にもとづいて姦通罪の廃止を主張したところ、「我国の良習を破る」との追及を受けた。教育刑については、現実社会と異なる監獄で教育された者は「社会復帰しようとしても駄目」との説明だった。滝川の著書『激流』によれば、鳩山文相が〈監獄が理想社会〉という趣旨だと「思いちがい」をしていたという。

こうして、当時の学説からして必ずしも特異とは言えない主張が、追放の理由となった。

滝川攻撃の先頭に立ったのが、蓑田胸喜・慶應大学予科教授らだった。蓑田は事件に先立つ1929年6月、京大講演部に招かれて講演した。そのなかで、京大社会科学研究会の元指導教授である河上肇の研究態度を「全く学術的ではない」と批判したところ、聴衆の学生が痛烈なヤジを浴びせて控室まで追いかけるなどしたという。滝川は自著で、「講演部部長である私が学生をおだてて蓑田氏の講演を妨害させたと思いこんだらしい」と振り返り、のちの自身の休職問題に「蓑田氏が一役を買っていた」と述べ



A black and white portrait of a young man with dark hair, wearing round-rimmed glasses, a light-colored shirt, a dark tie, and a pinstriped suit jacket. He is looking slightly to his right. The background is dark and out of focus, with some vertical lines visible on the left side.

京都帝国大学新聞の紙面に沿って事件の詳細を見ると、滝川への辞職要求直後の 33 年 5 月 21 日号に鳩山文相の一問一答記事が載っている。文相の乗る神戸行き列車に学生編集員が乗り込んで直撃したという。処分について文相は「時勢の力だ。止むを得ぬ」と回答した。同号では 1 面を割いて事件の経過を報道し、「研究の自由を唱へ、わが学園守り堅し」と記している。

「学園の神聖、講学の自由」に関わる「全学園の死活」の問題だと指摘し、「京都帝国大学総長の決意を支持せんとする」と訴えた。

[illegible]

## 法・教官一同、辞職願

滝川の休職が閣議決定された5月26日の動向を報じる号外も出している。この日、総長が急きょ部長会議を開き、「会議場の総長室の外は守衛がバリケードを築き、それを取りまいて各社の記者、写真班が灰色の沈黙でひかえる」など緊張が高まっていた。号外ではその後の様子を次のように描写している。

「赤自転車に乗った電報配達が本学正門に飛び込んだのは二十六日午後三時四十分、別項の通り滝川教授休職仰せつけられる旨の電報である。（中略）宮本法学部長はかねて手許に出揃っていた教授、助教授、講師、副手の辞表四十通と法学部大学院学生の退学届け六十九通を紫のふくさに包み、蒼白な顔を緊張させて総長室への階段を一步一步ふみしめて登った」

この日の夕方、法経第一教室に多くの学生がつめかけ、満場の拍手のなか、法学部全教官が姿をみせた。宮本部長が辞表の提出を報告し、文部省による措置を「甚しく不当」と批判する旨の教授一同名義の声明書を読み上げた。号外にはその全文が収められている。学生に向け宮本部長は、「光輝ある京都帝大の学生としてもっとも適当と信ずるところに従って善処してくれたまえ」と呼びかけた。

教官団が去ったあと、学生大会が行われた。大学院学生代表や経済学部代表、各出身高校別の代表が演説し、文部省への休職撤回要求と総退学を辞さないとの決意表明を法学部学生一同の名でまとめた。

### 「吹きすさぶ弾圧の嵐」

小西総長は学内の抗議を背景に文部省と交渉したが、合意に至らなかった。鳩山文相との間で妥協案を練ったものの、滝川の休職を前提としていたことから法学部教授会がこれを拒絶。ついに小西総長は辞職し、後任に松井元興氏が選ばれた。紙面では松井を「学問の自由については強い愛を持っている」、「果敢の人」などと報じている。

松井総長は教官一同の辞表を申達したが、文部省は元新聞部長の佐々木ら6名分のみ受理して発令した。後に復帰する1名を除く5名と、追加で受理された2名の計7名が京大を去った。文部省は残りの教官団の慰留に努め、松井総長との間で「解決案」をまとめた。滝川の処分について「非常特別」との認識を示し、以降は「多年の先例に示す通り」総長の具状や教授会の意向を尊重して対応するとの旨を確認した。これを受け、「法学部の主張は認められた」として7教授が残留した一方、「非常特別」とみなせばいつでも総長や教授会の意向を無視できると指摘して反発した教授2名、助教授ら12名が辞職した。紙面では、双方の声明を載せつつ、「姦策的解決案」との見出しを打ち、大学の自由に関する教授の論考を複数載せるなど、退官組と同じ論調もみられた。

残留組からなる法学部教授会は、「問題は解決した」との認識のもと、7月に学生代表者会議の解散を命じた。また、法や文の学部当局が学生とその保護者に対し、「以後運動がましいことをして処分等の遺憾の処置なきように」との文書を送りつけた。さらには、文部当局への抗議を続けていた一部の学生が検挙された。京大新聞は「吹きすさぶ弾圧の嵐」、「法、文学生におどし文句」との見出しでこれら

を報じている。



辞表提出を報じる号外（33 年 5 月 27 日）

### 学生編集員、抗議の総退部

「弾圧」は京大新聞にも及んだ。9 月に入り、新聞部長の西田直二郎が滝川事件に関する報道を控えるよう指示し、8 人の学生編集員が抗議のため総退部した。この件は一般紙でも報道され、朝日新聞では、西田部長の談話として、〈不服として学生委員が辞任するのなら新聞が一時出なくなってもやむを得ない。これに対し自分が非難を受けてもそれは大学の最高方針だから甘受する〉との見解が示された。新聞部には、発行人の入山雄一だけが残った。入山は後に「西田さんは学生の左傾に対してはあまりに厳しい態度をとった」と振り返っている。新しく編集員が募られて新聞発行は続いたが、活気のない紙面になった。総退部の後はじめて出した 9 月 21 日号では、1 面トップに〈秋開く學術諸大会〉を置き、滝川事件関係の記事は、1 面全体で報じた前号と打って変わって高代会議の〈前教授諸氏の復帰を懇望す〉などを小さく載せるにとどまった。

文部省は滝川事件を「非常特別」と例外視する認識を示していたが、これ以降、東大で教授の追放が相次いだ。2 年後の 1935 年に美濃部達吉の天皇機関説が攻撃的となり、1937 年には矢内原忠雄が教壇を追われた。1938 年には大内兵衛らが検挙される人民戦線事件が起こり、翌年には河合栄治郎も東大を去った。



1933 年、滝川事件のころの入山（中央）と編集員  
自由な表現の場を求めて

新たに加わった学生編集員のもとで命脈が保たれた新聞部は、1935 年に創刊十周年を迎え、1929 年の退部騒動から月 2 回に減っていた発行を月 3 回へ増やしたほか、同窓組織を結成した。他方、編集部内には、以前の澆涸とした新聞に戻りたいという考えがふくれあがってお

り、滝川事件で京大を去った佐々木惣一の論考が35年4月16日号に載るなど、その意向が紙面に反映されつつあった。こうしたなか、35年5月に第2回滝川事件記念講演会が行われ、その報道を試みたが、西田部長により差し止められた。編集部を中心に担っていた5人の2回生がこれに抗議して一斉に退部する事態に発展した。

記念講演会には、佐々木のほか末川、滝川ら退官組の諸教授が参加し、約300名の学生が詰めかけた。これを1行も記事にできず、5人が抗議声明を出して退部した。調停もまとまらず、残った編集員によって発行が続けられた。

脱退組はしばらく「無聯の日々」を過ごしていたという。それを知った入山が、毎日新聞にいた元新聞部の記者に相談したところ、京都版で週1回、学生が執筆するコーナーを設けてもらえることになった。京都支局の応接室を臨時編集室とし、退部組が毎週1頁10段の紙面をつくった。実現に一役買った支局長は、時折顔を出して「今晚は子供新聞の編集か」と冗談を飛ばしつつ、編集内容には干渉しなかったという。脱退組はこの「カレッジ・セクション」を編集しながら、大学新聞が批判精神を失うことを危惧し、代わりの媒体の発行を模索した。そして1936年5月、月刊誌『学生評論』の創刊にこぎつけた。

「書きたくないことを書かない」

1936年の「二・二六事件」以降、国内でファシズムの色が濃くなっていく。翌年には北京郊外で日本軍と中国軍の衝突が起こり、日中戦争が始まった。戦争に積極的協力を行わない者への圧力が強まり、37年6月には『学生評論』が停刊に追い込まれる。

同年末から翌年にかけて、前述のとおり「左翼」とされた東大の教官らが次々と検挙された。1939年1月には東大の平賀総長が、経済学部内で二派を成して対立していた教授2名の休職を独断で文部相に上申した。これに抗議した教授ら13名も辞表を出す事態となった。一連の「平賀肅学」は京大でも関心を持たれ、京都帝国大学新聞では前年10月から5回にわたって報じた。

39年9月、英仏両国がドイツに宣戦布告し、第二次世界大戦の開戦となった。38年4月には国家総動員法が公布され、学園での軍事教練が必修となるなど、戦時体制の整備が学内にも及んだ。新聞部では滝川事件以降、入山が発行人としてたびたび特高警察に呼ばれてくぎを刺され、編集会議で学生の提案に「それはいけない」と言うようになったほか、一部の部員が軍部の思想に同調することもあったという。一方、「書けない」内容が増えるなかで「書きたくないことを書かない」というかわし方で抵抗したり、比較的リベラルとされていた教官の原稿を載せたりして、難局での発行を続けた。

拾い読み：事件報道にあらわれる濃淡 号外や部員の声明も

初回に引き続き、実際の紙面を見ていく。ただし、通史で取り上げた1939年までの10年間のうち、今回は1930～34年を対象とし、それ以降は別回に掲載する。この5年間は、1部5銭・年1円の購読料および月2回の発行頻度を維持した。

内容としては、就職状況、創立記念行事、東大との交流戦などのスポーツ、学会情報、学友会委員の選



挙や予算、政府からの科学研究費の内訳、卒業・入学者の名簿などが恒例で載っている。そのうえで、通史で見たとおり様々な事件が起きるなか、編集部の見解を紙面で表明することもあれば、「当たり障りない」記事に終始する時期もあり、濃淡が出ている。満洲にまつわる話題など、徐々に「時局」の影響がにじむ記事が増える一方、スポーツや文化の記事が継続して載っている。学内のできごとにとどまらず、国内外の政治・経済の状況を現在以上に扱っている点も指摘できる。

広告は、創刊当初の10年と比べて、それぞれの大きさこそ小さくなっているものの、毎号数十個程度載っており、内容也多岐にわたる。よく載っているものを挙げると、書籍、文具、病院、鉄道、酒、飲食店、衣服、百貨店などがある。

以下、5年間の計102号（うち号外5回）から記述を抜粋する。紙面での表記を保持しつつ、仮名づかいなどを適宜改めた。

| 「京都大学新聞刷版」<br>（不出版をもとに作成） | 1934        | 1933         |                                                 |          |                           |                 | 1932   |                                    |                           | 31        | 1930      | 年<br>（できごと） |                 |                             |                 |          |        |                        |                      |
|---------------------------|-------------|--------------|-------------------------------------------------|----------|---------------------------|-----------------|--------|------------------------------------|---------------------------|-----------|-----------|-------------|-----------------|-----------------------------|-----------------|----------|--------|------------------------|----------------------|
|                           | 6 文部省に思想局設置 | 4 司法省思想検事を置く | 9 西田部長、滝川事件の報道<br>自肅を要請、部員が抗議の総退部<br>↓新編集員を募り発行 | 7 松井総長就任 | 6 総長と文相が「解決案」作成<br>↓法教授拒否 | 5 法・学生大会、他学部生賛同 | 5 号外発行 | 5 高等文官分限委で滝川休職を正式発令<br>↓法学部全教員辞表提出 | 4 文部省、滝川教授の罷免要求<br>↓総長が拒否 | 4 滝川著書発表禁 | 3 日本、国連脱退 | 3 小西総長辞意    | 1 国会で「赤化」教授問題議論 | 12 文部省、京大当局に滝川教授の講演内容の報告を要求 | 10 滝川、中央大で刑法学講演 | 5 五・一五事件 | 9 満洲事変 | 12 東阪15新聞社、言論圧迫に共同抗議声明 | 2 京都学生共産党事件で多数の学生が検挙 |

## 1930 年

新聞部▼学生課の移動で部室を厚生課あとへ移転▼懸賞映画小説を募集→「各氏の選考の結果、傑作は遺憾ながら見出すことを得なかった」▼本紙主催・旅の座談会▼投稿歓迎：題は不景気の影響（薄謝進呈） 時事▼外交界展望▼陸軍を改革縮小せよ▼米買政策と農家経済との矛盾▼テロリズムの政治的意義▼卒業生の職業紹介 教育研究▼農・初の博士号授与▼イタリア語が文学部副科目に▼工文理農の学生にも「学生票」（学生証）公布▼新聞学講義始まる▼ドイツ学生交換の計画成立▼ハワイ大学生と交流▼文部省の留学生、今年は中止：緊縮財政の影響▼退官軍人向け社会教育講習会始まる▼中将の講演運営▼完全な設備を誇る学内電話、加入者400に及ぶ（構築は1920年）▼学生課の陣容成る▼京大、節約宣誓の標語募集▼帝大学生主事会議▼政府の歳入減は本学予算にも影響▼学生健康相談所、実費診療に▼法学部で2室を打ち抜き500名を容れる▼経済研究所設置計画▼東方文化学院完成▼中央実験所の機能を民間に開放▼考古学教室に珍品届く▼図書館にフィンランドの学術書 学生▼バレー部誕生▼テニス部満洲遠征▼本学主催の高専諸大会▼緊縮で運動会中止▼学友会費未納2100名▼学友会代議員候補者の所信を本紙で発表：財政行き詰まりで学友会の意義が問われるなかで「進んで学生大衆に訴えよ」 文化▼最近のソビエト映画▼文壇動向▼明治期の暗殺物語▼「支那文学」研究手法▼『大学風景』創刊へ

## 1931 年

新聞部▼主催座談会：欧米から帰ってきた教官を招いて 時事▼国民経済の難関と活路▼欧米の財界▼最近ソビエトの真相▼無産政党の一年▼社会民主主義の行方▼憂国の至情に燃えて聴衆は常に溢れる：満洲問題講演会▼就職問題座談会 教育研究▼法学部の規程改正：植民政策、会計学は廃止▼西田幾多郎博士の講演▼清野博士「北海紀聞」▼講演：日本人と西洋人の体質上の優劣▼メキシコ学生団来

る▼フランス政府の負債で留学生 6 名を派遣▼経済学会の創立と雑誌発刊▼緊縮で夏休みの実験中止  
▼ある日の名誉教授「散歩が毎日の仕事」 運営▼5 銭の学生食堂開業▼「定食には汁をつけ」：うどん  
そば値下げ▼大繁盛の共済部食堂▼3 千人を賄う大食堂ができる：設計既に成り近く工事に着手▼節  
約標語決定「無駄遣いお断り」▼妙齡の婦人が又も学生課へ 120 円：苦学生のため寄附▼大野学生主  
事が結婚の周旋：続々申し込みあり▼園遊会復活▼創立記念の学内一部開放に押し寄せた人の群れ「グ  
ロ味たっぷり医学部の諸陳列」▼決議書を総長に提出して学生消費組合の公認を要求▼共済部の内職紹  
介：昨年より良好▼炭は共済部へ：恒例の廉売▼臨海研究所の水族館完成す▼健康相談所を新築 学生  
▼教練査閲実施▼「麻雀付属品一切おわけ致します」▼規則改正と新予算案を審議し学友会は更生せん  
▼再生の学友会へ新入生の過半数が入会：この分では赤字問題も起るまい▼京大短歌会詠草▼新組織第  
一回の音楽部大演奏会▼下宿選び助言：衛生学教授談 文化▼プロレタリア文化戦線素描▼ソビエト映  
画の進出とトーキー芸術の進歩▼『芸文』遂に廃刊

## 1932 年

新聞部▼次号は歳末帰省の便宜を計り、繰り上げて印刷する▼満洲國写真展覧会を主催：視察に同行し  
た大佐から資料提供があり一般観覧を実施 時事▼国際連盟の将来：「日本は大変好境遇」「脱退は馬  
鹿をみる」▼日本にとっての満洲国の価値：まだ正式に認められていないが事実として成立しており、  
日本人が支持している。日本の一部とする考えがあるが、賛成しない。独立国として日本が指導者とな  
るべき▼ムソリーニは語る：黒シャツ宰相会見記▼インフレーションは大学にどう響く？ 会計課長と  
一問一答 教育研究▼日本初の外国女性の理学博士誕生▼試験制度是非：大学の試験「甚だ漠然として  
いる」▼和辻哲郎教授の学位論文、教授会を通過す▼珍魚「山の神」から新寄生虫発見▼作り物かと疑  
われるほど珍しい昆虫を発見▼金本位制の研究▼瀧川幸辰教授の「刑法読本」を紹介す：佐伯千仞▼学  
術協会第 8 回講演会、電波にのって全国津々浦々に▼満州より帰りて：大野久磨夫メキシコ学生 4 人、  
本学農学部へ入学▼学生が満洲視察へ▼満洲国で地球の重力と磁気を測定▼教授と記者に欧米の現状  
を聞く：「学生新聞が学外で読まれているか」との問いに「そんなことはない」「日本では学生は特権  
階級だが、外国では社会的地位が低い 運営▼物価高を尻目に学生食堂頑張る▼病院にも不景気の風寒  
し▼健康相談所の患者増える▼新装成れる法経学生控所▼化学企業社長が出資して貧困学生を救済▼  
制服と制帽の値段決まる▼胸襟を開け！ ノーネクタイ・白シャツ運動：瀧川幸辰諸教授も賛同▼連載  
「ミス大学」：電話交換嬢など 学生▼愛国運動者を招く満洲国！ われこそと思ふ人々はすぐ大野主  
事へ申し込み：自治訓練所学生の追加募集▼ビラ撒き左翼学生の処分決定▼下宿・食堂・プリント屋か  
ら覗いた試験間近の学生の様子▼〈コラム・風車〉：「ワツシヨワツシヨと押しかけてもフアツシヨで  
なくては満洲へ行けぬ」▼「満洲問題」をかかげ活躍する国連京大学生支部▼京大満洲会成る：関心を  
持つ学生が講演、座談会、研究会を開催▼ない袖は振れぬ：学友会は前年度予算を踏襲か▼学友会代議  
員の改選：多少の番狂わせ▼大学の歌募集開始：一等賞金 50 円 文化▼「日本文化史序説」執筆事情：  
西田直二郎▼チャップリンについて▼詩「明るい空」「居留地風景」▼京の紅葉案内記▼琉球だより

## 広告▼『現代独裁政治史総説』

1933 年

新聞部▼愛読者へ：今までは遅く登校したり発行日に休んだりすると手に入らなかったが、次号からは方式を改めて誰でも勝手に取れないようにする。学友会員には会費納入と同時に引換券を渡す 時事▼満洲国中央銀行から 10 名の求人：月収 200 円▼日本銀行京都支店の庶務課長の採用に関する談話▼ますます言論の貧困化が進んでいる。大隈内閣は山縣に毒殺され、民主主義的な加藤内閣が退けられて軍人政治家寺内が内閣を横取りした▼「内外時事」：満洲国をめぐる諸問題→日本は国連理事会でみじめな失敗をした。アジア諸国においても味方がいない▼「大学で軍教を受けねば幹部候補生になれぬ」：改正された制度の要旨を配属将校に聞く▼フランスにおけるファシスト運動▼連載「ヒトラーは何をする」▼アメリカの金融恐慌と為替対策▼フランス前文相講演 教育研究▼1 頁割いて滝川事件を報道▼列車中での鳩山文相の一問一答▼自由自治の確認は瀧川教授復職による：具体的目標を明確にして抗争はますます高まる「奸索的解決案一蹴」▼社会科学に於ての常識の危険性▼大学の自由▼秋開く学術諸大会▼仏像に表現された日本人種の特徴▼織田信長について：西田直二郎 運営▼小西新総長の顔：スポーツは剣道、好物はニシン、教科書も買えぬ逆境に育つ▼職員録に載らぬ総長、事件解決に腐心して在任 100 日：本紙を通じて学生諸君に送る挨拶▼製本業の直営：理学部事務室の地階で▼寄附でできる動物学研究室▼ヒュッテ修繕▼附属病院、屍体室新築▼苦学生へ福音：新しく給費生をつのる 学生▼生計調査速報：愛読雑誌は改造と中央公論、新聞では大阪毎日▼古本の交換会の案内▼吉田神社のご利益で賑わった節分大学▼校内を通る学生にインタビュー▼学友会で募集した「大学の歌」発表▼天然痘の患者 5 名発生▼結束を固め毎日の情勢を知らせるべく、法・経・文の各学部で「ガリ版ニュース」が発行されている▼学の生命線確保に戦線全帝大へ拡大▼事件をよそに高専大会決行▼京大学生運動新聞、既に 2 回発行：「全学中央部新聞班」が機関紙を出していた▼学生運動に俄然、解散を命令：残留教授会から▼活動を始めた京大満蒙研究会：入会者相次ぐ▼京大劇研の初ラジオ放送で童話劇▼文学部学友会旅行 文化▼ロシア戯曲と日本の新劇運動▼論壇月評：小林多喜二の死▼文化の不安、芸術の不安▼今年見たトーキーで最も傑れたもの▼京の秋（イラスト）

1934 年

新聞部▼室戸台風罹災に伴う義援金・物資の募集：新聞部室受付／毎月学生課と協議して最善の措置をなす→600 円を突破▼投稿募集：題は「収穫を語る」▼座談会主催「帝展を語る」 時事▼議会に何を望むか、諸家の意見：選挙法を徹底的に改正せよ！ ▼日露不侵略条約について▼満洲土産話「満洲は運命線」「日満経済統制を」▼インフレの波に乗り工学部は朗らか、中にも恵まれた機械・工化のほほんで卒論執筆中▼国家試験委員に聞く受験の注意 教育研究▼今年の文学部の卒業論文に現れた時代相は？ 史学「国史殊に時代精神の再批判が多い」▼哲学を減らして史学を増やす：文学部の募集定員変更▼大学構内で相次ぐ発掘：考古学研究の新資料▼吾が國最初の完全なる乾漆製寝棺：本学地震研究室敷地内で発見▼豊臣秀吉自筆の書状を寄託される▼珍しいタコブネの化石を発見す▼結核の撲滅へ

医学部学生乗り出す▼遺伝学の材料としての日本人▼夏期講演盛況▼演習林の木炭売り出し▼農場の売り上げ、風害甚大▼皆既日食観測の一行、南洋へ▼ドイツ大学における心理学の再認運動▼大野熊雄の満鮮遠征 運営▼学部卒業生が2万円を寄附▼続々実現する京大学士クラブの地方部：香川、大阪、広島、神戸、京都に▼内職軒旋は84%の好績▼わが図書館の蔵書、100万を突破す：東洋一の大文庫▼落成した耳鼻咽喉科▼最新の設備を誇る医学部薬物学教室完成▼教授自宅電話開通：数名のリスト▼天災被害者に授業料免除の恩典 学生▼学友会役員会、会費値上げを決議→増収約4600円：これを財源に学友会やテニスコートの移転、合宿所と弓道場の修理へ▼学生道場の建設へ▼勇躍、征途へ！ 極東大会へ出場の三君：陸上部、サッカー部から日本代表選手が出た▼陸上部員が三段跳び世界記録▼サッカー部関西リーグ3連覇▼野球部遂に優勝▼学友会が懸賞で応募した「大学風景」の写真当選決定▼混声合唱団発表会 文化▼中世ドイツ演劇史▼京の桜▼映画の黎明▼雑誌『数学』発刊▼学友が寄せた便りと称して紀行文を1頁使って掲載▼『公法雑誌』と『民商法雑誌』創刊▼軍事査閲：全学生は農大運動場に整列すべし 広告▼立命館出版部▼丸善：海外新聞雑誌予約期▼改造社の創業50年記念セールの全面広告▼講義プリント謄写印刷

論考① 西田直二郎と京大新聞 入山洋子 同志社大学人文科学研究所嘱託研究員（社外）

新聞部部長として滝川事件の報道差し止めを指示するなど、強硬姿勢の感もある西田直二郎。その腹にはいかなる思いを抱えていたのか。入山洋子氏に解説してもらった。

報道制止の一方、部員とピクニックも

新史料の発見

1929年のいわゆる「新聞部事件」は、一般に次のように説明される。

この年5月に新聞部部長の辞意を固めた佐々木惣一法学部教授は、自ら後任を探すが果たせず、学友会会長(新城新蔵総長)も数人の教授に交渉を試みたが、時事性を強める新聞部との関わりが敬遠され、引き受け手が見つからないまま、9月14日に佐々木は辞任。後任が見つかるまで大野熊雄学生主事が代行、部内に見え始めた左翼色の一掃を図った。そして、週刊から月2回発行への縮小や大多数の部員の退部を迫った。これに反発した部員らが全学的な抗議行動を展開するも、次第に下火に。11月の学友会臨時役員会で大野の方針が承認され、後任部長に文学部教授の西田直二郎が就任した、というものである。

つまるところ、西田の部長就任のいきさつは、長らく不明であった。その間の事情や、就任後の西田と新聞部との関係をうかがうことのできる史料が、このほど見つかった。

部長就任前夜

1929年の9月前半と思われる西田の手書きメモがある。ポケットタイプの手帳見開き4頁に、鉛筆で構想が書き留められている。主なものを見てみよう。（漢字や仮名づかいは適宜改めた）。

「学生課に話すこと」として、「部員はやめること〔中略〕部長更迭と共に一新すること、形式的方面としてよし〔中略〕新部員は新部長の名にて公募すること」と記す。「新聞発行に関する件」には、「1



第一回九月十六日の件休刊やむなきか。Supplement を出すこと困難か。2 九月二十三日は是非出すこと」とある。「佐々木博士に話す件」は、「新聞部のため尽して頂きたる主義、努力の要点を話し願いたきこと」、「旧部員はいたずらに排除する意なきこと〔中略〕反動的運動にてなきことの諒解を得たきこと〔中略〕留任を願うことの許されないことと御迷惑とを察したこと」をあげた。

要するに、佐々木退任の9月14日以前に、すでに西田は新部長として俎上にあがり、自ら方針を立て新たな体制づくりに取りかかっているのである。佐々木への敬意を表し（一応慰留の意思を示し）、「反動的運動」ではない、つまりこれまでの新聞部を否定する意はないことに、理解を求めている。その上で、部員はすべて一旦退部させ、新たに新部長の方針に賛同する者を公募する、との方針を立てた。新聞発行については、9月16日に「第一回」、すなわち新体制のもとでの最初の発行ができるかどうかを憂慮し、せめて簡易の別刷のようなものを出すことを模索している。（実際に発行された9月16日付『京都帝国大学新聞』第110号は2頁の簡易版であった。）

この構想をもとに、佐々木の退任までに、新城総長や佐々木、大野学生主事と会合を行ったと思われる。ただ、西田が正式に部長に就任するのは11月20日付である。このタイムラグの事情まで明らかにすることはできないが、部長不在の宙ぶらりんな状態は、部員たちに部存続の危機感を募らせるのに十分であっただろう。

#### 新聞部との関わり

ともあれ新部長となった西田は、周知の通り1933年の滝川事件、さらに滝川事件二周年の35年に報道規制を敷き、これに抗議した主要部員が総退部するという事態を招いた。35年の西田の日記には、「新聞部少しく騒ぐ」、「村井〔満次〕委員罷めさせること決定」などの記載が見える。

一方で、しばしば編集会議に顔を出し、よく面倒をみた。ときには部員たちと、ピクニックや大阪名物カキ船料理屋での会食、有馬温泉への慰安旅行など、親交を深める様子も記される。1934年9月に京阪神地方を襲った室戸台風の罹災学生に対して新聞部が義援金を募集した際には、これを難じる教授もいたが、「目下悩める人々のため〔中略〕菩薩の行」として行うものだ、との思いから、理解を求める場面もあった。

9年ほど部長をつとめ、公務多端となった1939年初めごろに退任したようである。

1920年代後半から30年代にかけて、社会状況は大きく変化した。身近に迫る強権的な圧力と、学内外のすぐ足下で起こる騒擾の中で、事なかれ主義に徹する教授陣も少なくなかった。大学教員として使命感を持ち、現実的に取り得る対応を重ねた、というのが、西田新聞部長の姿勢ではなかろうか。文化統制の元凶と評されてきた西田であるが、今後はより丁寧に検証していくことが求められる。

参考「西田直二郎関係資料」II-26、II-38、II-45（京都大学大学文書館）／『京都帝国大学新聞』第111号1929・10・5／京大新聞史編集委員会『権力にアカンベエ！』草思社、1990年／京都大学百年史編集委員会『京都大学百年史総説編』1998年／入山洋子「資料紹介 西田直二郎日記（3）」（『京都大学大学文書館研究紀要』20号、2022年）

## コラム④ 一般紙記者との関わり 部室に来訪、突撃取材も

1937 年卒の関原利夫氏と寫信正氏、35 年卒の堀川直義氏が『権力にアカンベエ』に寄せたコラムには、一般紙記者との関わりが記されている。

### ●「ハコ乗り」でとる「車中談」

堀川によると、当時、「時の人が列車で旅行するとき、『ハコ乗り』といって、新聞記者が同乗し、いわゆる『車中談』をとることが一般的に行われていた」。通史でふれた鳩山文相への直撃取材は、堀川が一般紙記者と並んで敢行したという。

### ●一般紙記者が毎日部室に

京大には当時から、一般紙の記者が常駐する記者クラブがあった。関原によると、「一般紙の京大記者クラブのメンバーたちは、毎日一度は新聞部に顔を見せ、入山さんや、ときにはわれわれにも学内ニュースを取材することが多かった」という。親交を深めた記者は、滝川事件 2 周年記念講演会をめぐる退部騒動の際、「好意的な記事を書いてくれた」という。こうした縁から新聞社に就職する新聞部員も一定数みられた。

### ●「評判がよかった」学生版

通史でふれた「カレッジセクション」について寫は、「自由と文化の擁護を基調とした紙面づくりは当時京都の学生層の人気と関心を集めて評判がよかった」と述べている。

## コラム⑤ 「学生の雑誌」創刊 退部組の奮闘

1936 年 5 月創刊の『学生評論』は、前年の滝川事件 2 周年記念講演会をめぐる報道差し止めに抗議して新聞部を退部した学生が立ち上げた雑誌である。創刊の経緯やその後の状況について、関係者が『アカンベエ』などに手記を寄せている。

それによれば、脱退騒動後、旧新聞部員は学内の出身高校別学生代表会議の委員らと話し合った。「大学新聞が学校当局の御用機関となり、学生大衆の声を反映しなくなった」との結論に至り、「学生自身による学生雑誌」の創刊に向けた準備委員会を組織したという。

編集方針について会議を重ねつつ、新聞部の入山の協力を得て、印刷所の選定や資金調達、編集発行人の確保などの見通しを立てることができた。このほか、同窓会や研究会に根回ししたり、滝川事件で京大を去った教授らを訪ねて寄稿を集めたりと準備を進め、脱退から 1 年、ようやく創刊にこぎつけた。数百部刷り、頼んで回った書店に数冊ずつ置いてもらった。

「学問・思想の自由を擁護し、滔々たるファシズムの浸透をくい止めようとする」ことを主目的とした。警察から目をつけられ、編集会議をしていた個人宅に警官が来たこともあったという。また、京大のみにとどまらず、「全関西、全日本の学生の自主的総合雑誌」を志向した。創刊号では大学の垣根を越えた学生の座談会を載せたほか、立命館や同志社、関西大などの学生からニュースを投稿してもらっていたという。

結局、財政難などにより 37 年 6 月で停刊した。再刊を図ったが、発行人や学生数人が検挙され、挫折

したという。

中心となって創刊に携わった畠信正氏（1937 年卒）は、「時代的苦悩のなかで、牙をむいて押し寄せてくるファシズムの波に抗する特異な学生運動雑誌」と振り返る。

お詫びと訂正

連載第二回（11 月 16 日号）通史で、「38 年 9 月、英仏両国がドイツに宣戦布告」とありますが、正しくは 39 年 9 月です。次の文の「同年 4 月」は「38 年 4 月」の誤りです。お詫びして訂正いたします。

【連載第三回】京大新聞の百年 濃くなる時局色、使命を模索「戦線と学園を結ぶ」

2023.12.01



動員体制確立へ 1943 年 7 月 5 日号

2025 年 4 月の本紙創刊 100 周年に向け、歴史を振り返る連載を 10 月から始めた。時系列で振り返る「通史」は前回で 1940 年に到達した。連載第 3 回となる今回は、実際の紙面の記事を書き留める「拾い読み」のみで構成する。紙幅の都合で前回掲載を見送った 35～40 年までと、次回の一部先取りとなる 44 年までを一挙に載せる。連載を通して各時代の社会背景や編集部の理念を振り返ることで、今後の紙面に活かしつつ、各方面の歴史を考える際の一助となることを期待する。（編集部）

拾い読み③ 戦時下「記事増加の一天張り」 学生の営み、にじむ生活苦

1935 年から 44 年 3 月の休刊までを見ていく。10 周年を機に発行回数と頁数を増やし、原則月 3 回・4 面での発行を続け、40 年には 1 頁の記事段数を増量した。統制下で「書けない」ことが増えるなか、戦時体制の構築を意気込む記述も散見される。執筆者には他大教官や市職員・新聞記者も名を連ねるほか、他大学の情報も載る。以下、約 9 年間の計 166 号から記述を抜粋する。紙面での表記を保持しつつ仮名づかいを適宜改めた。

1935

新聞部▼学友会費既納の在学生に 1 年分の新聞引換券を渡す▼月 2 回から 3 回へ／週刊化や 4 から 8 頁へ増量も計画／▼投稿募集：新刊批評、映画評、郷里の正月行事 時事▼企業の入社試験の問題集：大阪朝日、JO トーキー▼銀行から続々求人申込▼就職担当主事「学生は自力開拓する覚悟で」▼世界恐慌の所感▼国家統制下のロシア新聞：記者は共産黨員／都合の悪いことは掲載しない▼300 万部を誇

る英国の日曜新聞▼いかに選挙を粛清するか「各方面の人々」に問い、約 100 件回答を得た 教育研究  
▼大学の使命：佐々木惣一▼滝川幸辰：「東大の落武者」を京大へ無条件入学させるのは不満▼貧困の  
北陸農村を調査▼諸権威総出で医学大講習会▼文学部 30 年祝賀に大忙し▼航空学講座開設へ 運営▼  
卒業生に教練補講▼防火演習▼新法令で印刷会社による講義プリント発行を停止へ→継続に狂奔▼教  
授が困窮学生へ千円寄付 学生▼学友会役員会→揉めた美術部新設／文化・運動両部対立：「運動部偏  
重」指摘も→社説：傍聴席閑散「どうかと思う」／新聞部予算 1700 円（部で 5 番目）▼学友会が募っ  
た「京大の歌」レコードに：70 銭で配布▼ベルリン五輪に 3 学生出場▼京都学生駅伝▼剣道部、連盟  
脱退▼カメラ同好会誕生▼50 名渡米し日米学生会議へ▼太秦映画撮影所に満支学生を招待▼投稿  
「壁」：北正門道路の改修と構内電話の設置求む 文化▼小豆島旅行記▼洛西の松茸狩り▼『転生』・  
『聖餐』9 月創刊▼脚本の貧困：上方芝居の将来 広告▼電気・ガス節約標語募集▼麻雀荘▼日出新聞  
▼タイプライター引受▼映写機販売▼音楽独習講座▼海外新聞雑誌予約

1936

新聞部▼原稿募集：学友会改革へ意見／京の印象（1 回生）→稿料 3～10 円 時事▼軍縮会議決裂後の  
日英米▼ナチスドイツ財政▼植民地政策の見直し▼人民戦線と無産党▼今後の日露関係▼第三種所得  
税の改正 教育研究▼天文台職員、日食観測で北海道へ▼青年期の精神病▼京都の地名▼経済、点数主  
義に変更か 運営▼松井総長の俳句▼附属病院の寮名と寮歌募る▼動植物学教室新築▼化学繊維研設立  
▼西部に学生会館▼図書館閲覧室を焼失▼食堂 5 周年：売上 450 円／日▼健康問題を憂う本紙記事  
を見た病院が「一定数の病学生を無料で引き受け」申し出 学生▼節分の吉田神社で学生が甘酒屋▼学園  
歌制定▼籠球部員も五輪へ▼京大と立命館、京都五大学野球連盟を脱退▼ラグビー部員就職先▼北大と  
合同で書の展覧会▼志賀にヒュッテ建設へ：資金募集に映画会▼旅行部ヒマラヤ登攀決行か▼待望の艇  
庫建つ▼『京大短歌』創刊 文化▼信越～山陰スキー場めぐり▼金色夜叉の再検討▼雑誌『課題』創刊  
▼日本初の満洲語辞典▼春の洋画 広告▼高島屋▼松竹座▼進々堂▼大阪毎日新聞▼立命館出版部▼帝  
大受験夏期講習▼蚊取りせん香▼ビリヤード▼蓄音器▼家庭織機▼湯たんぽ▼レコード▼ストーブ

1937

新聞部▼原稿募集：職場第一報、京の春、旅先からの通信、学生生活を描く コントや俳句▼学生評壇：  
「個人的批判にわたらざる真面目なもの」を募集 時事▼就職戦線、土木建築が不況▼会社法解説▼学  
生と政治：現在ほど学生が政治に無関心な時代はない▼新日本のホープ近衛公登場：本学出身初の首相  
▼近衛廣田外交批判▼内的反省と北支工作▼洋書禁輸問題▼全体主義論の批判▼政治と作家：中野重  
治 教育研究▼コンクリート舗装の研究▼夏期講習盛況▼石橋湛山講演：経済の職能 運営▼予算削減の  
危機：宙に浮いた図書館の復旧▼「本学が嚆矢を切って」実施予定の執銃教練に遅れ▼浜田総長就任「学  
問の自由は尊重」→学園の粛清進む：京都府総務部長を起用▼応召学生は授業料減免▼共済部の内職幹  
旋を阪神に拡大→防空演習の手伝いも▼学生食堂、値上げ／すき焼き始める▼前線へ送る慰問文庫を募  
る→殺到▼南京陥落祝賀式▼薬学科新設▼中央学生控所落成▼防虫化学研、寄附で設置▼原子核物理研

研究室竣工▼東方文化学院研、本学へ移管▼南紀に植物園▼図書館目録完成 学生▼号外：総務部新設めぐる学友会選挙▼本学生の現地通信：グニャグニャの握り飯にかぶりつく／砲弾の破片で右頬を負傷▼授業料の滞納者激増▼楽友会館、無料で映画上映▼言論復活へ講演部大会▼我が国で珍しい京都学生祭▼国際学生クラブ誕生▼レコードコンサート開催▼復活の京大劇研、公開朗読 文化▼準戦時代と文学精神▼現代学生の思想：大正デモクラシーと比べ思想に衰え▼時局下の教育と宗教▼座談会：映画のどん底／西田直二郎ら 広告▼嵐電▼アサヒビール▼京大 40 周年への商店の祝辞▼孵卵器

1938

新聞部▼他大高生から原稿募集：われらの町／休暇中の体験▼部員募集：真正ジャーナリズムを思う方▼〈佛國政府、京大に図書寄贈〉の記事を、関西日佛学館が訳付きで同国外務省などに送付へ 時事▼戦時立法の諸問題：すべての力をあげて対抗へ▼漢口攻略後の問題：芦田均▼独裁政治の合法化 教育研究▼モルモット価格高騰：医・理に悲鳴▼大陸の文化開発へ本学科学陣出発▼無生物界起源説の再検討▼独文科の機関紙休刊▼雨の学窓に日独交歓▼河合 4 著発禁 運営▼文部省、校友会誌へ制限▼定員届かぬ文理農は二次募集／法経は無試験入学▼法、試験科目増▼授業料、滞納鑑み月納制開始▼支那留学生激減▼フィリピン大統領、本学見学▼ペルー前首相講演▼英霊に捧ぐ学内の黙祷▼国民精神総動員中央連盟、論文を募集▼漢口陥落記念式→学生教職員 3 千人が時計台前で万歳▼学生義勇軍募集▼京大将校会誕生▼立命館の新陣容：京大事件後に退任相次ぎ教授招聘▼東大経済学部で静穏の春 学生▼生活調査：娯楽は映画が多数▼浦和、佐賀など全国の高校文化部動静▼青春むしばむ近視と虫歯：検査結果▼文芸部が新聞発行▼傷病兵招待演奏会▼学友会懸賞当選論文：大学を論ず 文化▼統制後の文化映画▼書店売れ行き▼戦争小説論▼模倣から国民音楽の建設へ▼日本芸術の特質▼富山、事変で演劇中止 広告▼来たれ独逸に：独逸国有鉄道中央観光局日本支部▼記憶力強力短期増進剤▼大阪商船「台湾へ」▼京阪電車案内所▼八ツ橋

1938 年 2 月 5 号 1 面「大学新聞の本質」

- ・4 月以降は各学部、学友会各部に通信員制度の実施、学生記者の公募によるニュース網の完璧を期す。→その前提として「内外識者の意見」を集めた。
- ・営業のために紙面を卑俗化する必要はない。
- ・大学の代弁ではなく大学のアカデミズム批判の機能を。
- ・学友会の一機関を越え大学全体の文化機関に。
- ・大学の「文化的進取的諸機能」は大学新聞の「輝かしい啓蒙的役割」で補ってきた。
- ・大学人との間に最も密接に連関を保持する点こそが、本質的な特色→一部で取り沙汰される学友会機関紙化は「本質的機能の剥奪」である。

▼本紙への批判と希望：読者より

沈滞期から脱して活気ある発展をなしつつある／真理の探究に役立ち、大学生活を意義あらしめる一助となるのが存在理由／国内外の問題に正確な認識を／書評欄の充実を／他大高校の動きも報道を／



自然科学の記事に重きを／京都の色を／風当たりが強くなっても「真理の燈」を出来るだけ保護してほしい

1939

新聞部▼原稿募集：今夏の経験と収穫▼部員募集：全学部新生で熱心な関心を寄せる方→作文で選考▼婦人事務員募集▼京大や東大などの新聞部員を満洲に招聘→学生記者として発信へ▼「本紙愛読者に注文を聞く会」開催▼学友会役員会、新聞購読料 50 銭の徴収可決へ：「学友会の大衆化」に鑑み反対も 時事▼職業通信：新聞記者の寄稿▼総動員法の発動と国民経済の将来▼宣戦の意義▼対独包囲網の成否▼ウクライナ独立問題▼婦人運動の現状：生活的結合欠落の不満▼兵役改正法実施、修学中断▼小作料抑制の問題▼用紙制限：新聞界も戦時気分濃厚に／息詰まる窮屈さ 教育研究▼源氏物語の復興▼移民問題の本質▼癌治療に新方法▼医、学生指導制を採用▼高校教科書の恋愛もの抹殺論▼時局色豊かに夏期講習会復活▼思索の秋、講演賑わう 運営▼学校教練が必須に▼「休むのではない」心身鍛錬へ 文部省、夏休みの指針発す▼聖旨を奉載し大学の使命を達成：本学の実践方策成る▼皇軍慰問の葉書を発送へ▼文部省の懸賞論文募集告知：「皇国の使命と青年学徒」▼巣立つ高校生へ「新東亜建設の情熱を」：経済学部長談▼物価高騰で食堂再値上げ▼付近の食堂「学生さんの大事な体を預かっている。損益考えない」▼学生読書館落成▼構内でまた火：医院食堂焼く▼本学に人文科学研、学園挙げて要望：鉱産研も▼名帝大開校▼ソルボンヌ大学閉鎖：空襲下パリ逃れ▼学生の風尚刷新へ文相、各私大総長と懇談 学生▼講演部と文芸部対立▼学友会も慰問品を発送→京大新聞も▼世紀の若人は空へ：九十式水上機に乗って▼日米学生会議中止か▼時局下スポーツ豪華版▼端艇部、琵琶湖一周の催し▼白浜の家から楽しい便り▼法友会、法律相談所設立 文化▼比叡山の小鳥▼最近の日本画▼文楽の芸術性と新作浄瑠璃▼映画と文学の相違 広告▼スケート場

1940

新聞部▼原稿募集：旅行記や随筆▼購読料問題、紛糾し臨時役員会で再審議→徴収取り消し 時事▼欧州に漂う和平の機運▼近東方向に伸びるソ連の手▼我が国の切符制度▼消費統制の意義▼大陸で活躍する京大人素描：満洲、北京など 教育研究▼法、工、理、医に講座新設▼成人教育講座、少ない女性聴講者▼アダム・スミ特集▼学生と結核▼眼科教室 6 年がかりの調査報告▼日本人の遺伝と優生問題▼湯川秀樹講演：極微の世界▼学生の科学勤労隊、北中支班新設▼イタリア学生団と祝電交換 運営▼経済、学年制施行へ▼当局、紀元 2600 年事業検討▼深朱の学旗制定、学歌も▼学振前期補助決定：本学関係は 15 件、人文はわずか 1 件▼総長満洲へ▼本学生初の戦死者、無言の凱旋▼思想普及へ軍事講習▼物価の鰻上りで学生食堂また値上げ▼投書箱新設「学生一般の声を」▼学史編纂開始：「輝かしい歴史を背負う本学はあらゆる分野に際たる不滅の業績」▼大学の方針は一貫、科学精神強化に：帝大総長懇談会 学生▼学友会改組へ準備委員会→同学会へ改称▼聖戦の花と散る大学生小隊長▼関西学生対抗陸上：苦節 10 年、本学輝く優勝▼六大学野球第 2 位 文化▼世界のお正月▼ドイツ文学史▼日本詩歌の形態的思考▼戦争と音楽 広告▼東宝「海軍爆撃隊」

1940 年 10 月 20 号 1 面社告：段数増、広告縮小

・春に 15 段へ増やしたが、戦時体制の具体化で「記事増加の一天張り（ママ）」

→1・3 面を 2 段、2・4 面を 1 段増やす。

→広告は狭めるが、「広告もまた報道なり」。

→各広告主と協議し「適當の措置」をとる。

→紙面の 4 割以上を広告に割けば三種郵便物と認められるが、営利を目的としないため、元来 3 分の 1 を目安としてきた。以後は約 4 分の 1 とする。

## 1941

新聞部▼卒業生の寄稿募集：後に続く者へ▼部員募集：熱心なる関心の新入生▼論文募集：応召を控えて／現代に処す人生観▼編集室より：真の学生新聞の道を進んできた我々も各方面と連絡を取り頑張る 時事▼欧州大戦の方向を決する 3 要素▼米国の英ソ援助▼教授寄稿：時局と大学→編集部「時代は我々に何を求めているのかを聞いた」▼海軍少将講演▼京都放送局では「試験期の学生のためにラジオの音を高くせぬよう」と放送 教育研究▼精神、自然両方面の研究に奨励金▼医学部生の満洲医療報告▼有意義な公開講演：共栄圏と海洋資源▼聖徳太子と日本仏教▼日華碩学の交流▼イタリア文学講座：両国交流へ▼洋書輸入緩和の朗報▼米から交換図書 37 冊▼新聞雑誌室誕生▼佐々木惣一「学問的態度に徹し国難に処してその勇を揮え」 運営▼文相、大学教授に教学一体の訓令▼教練は学部別に▼本学報国隊成る：全学臨戦体制へ「決意堅し」→在学の短縮や徴兵検査も▼戦死者 18 柱、尊攘堂で慰霊祭▼詔書拝読式：国民的情熱は灼熱せる坩堝と化した▼法・医・工・経は定員超過▼制服にも切符制▼苦学生に優先権：共済部の就職紹介▼年末帰省の割当：乗車券共同購入へ▼学生食堂、登録制に▼繊維化学科を新設▼本学に結核研究所▼中央実験所を拡大→工学研究所に▼太陽観測所完成▼生駒の天文台完成 学生▼医療特技隊日記▼召される日ぞ近し：学徒未曾有の緊張▼強豪相手にラグビー部善戦▼京大満洲留学生クラブ：宿願かなって創設▼旅行部推薦 5 コース 文化▼詩壇の動向▼出版インフレと文学の反省▼日本の建築めぐり 広告▼ムッソリーニ全集

## 1942

新聞部▼例年通り 8 月号に原稿募集：額に汗した尊い体験▼部員募集：熱意と興味持つ方 時事▼ドイツ留学随想：全欧州を呑む気魄→ドイツでは学生の知識が戦争に生きる▼大東亜戦争の展望：勝敗の鍵は強靱な生活力▼空襲に備え鉄桶の構え▼求人申込盛況▼大東亜建設へ支那問題の重要性▼戦時刑事法の変貌▼トルコの動向：芦田均▼保護園特集：やがて銃を握る学徒は社会の影に目を向けよ 教育研究▼大学の使命「有能な指導的人材を社会に」▼定年講義創設▼南方研究会・日伊学術振興会誕生▼古き町バダヴィア：西田直二郎▼日本人の体質：足立文太郎▼熱帯樹をパルプ化▼原子核研究▼東亜とユダヤ問題▼東洋の兵器工場インド▼現代新聞批判：小野秀雄 運営▼採鉄科の学生に特典：喫緊の急務▼法、学年制を採用▼工、航空工学科を設置▼経、受験要件緩和▼卒業生総数 29661 人▼初の 10 月入学式、学生課長「諸君は大東亜共栄圏の頭脳」▼「心から祝う満洲建国」10 周年式典▼報国隊、実戦

即応の防空演習▼学史編纂進まず▼古物交換わずか 44 点▼一人 4 冊ノート配給▼炭の入手困難：厚生部「去年は演習林から回したが今年は足りず、不正流用の懸念も」▼厚生部主催の映画と講演 学生▼学友会議決：将兵に感謝し、銃後の我々は防寒具を最小に▼懇親運動会▼対東大戦、本学優勢▼銃剣道・排球部誕生▼端艇建造に基金▼共栄圏色豊かに農学祭▼学生貯蓄組合誕生 文化▼国民演劇の課題▼伝統から見た能楽▼南蛮文学の性格▼梶井基次郎考▼義太夫物の非文学性▼銀閣の秋 広告▼京洛映画劇場で大相撲公開▼皇国百人一首▼陸軍省推薦映画

1943・44

新聞部▼378 号で「次回発行は 4 月 20 日」→結局休刊 時事▼イタリアの宿命▼米英霸道主義勢力の駆逐▼インド飢饉 教育研究▼外国文学書の減少、宗教書の増加▼燃料節約に太陽熱活用へ▼文部省と共催で成人講座：統制経済、食糧増産、遺伝、電気兵器 運営▼シンガポール陥落記念大会：一億民草が世紀の感激に血をたぎらせた▼国防第一線へ学徒動員体制成る：決戦にふさわしい教育の切換▼学割停止：輸送力増強へ▼体育要項刷新、戦技に全力▼戦時非常措置成る：文化系を整理統合▼海軍予備隊、志願殺到▼9 月の報国隊 7 千名動員→貯水や草刈▼待避所計画、防空壕も続々▼出征学生へ教授の激励文▼出陣学徒壮行式▼文相、大学統合に示唆：九州阪神の法文系大を京都へ集めるのが理想▼医工理と農の一部は入営延期▼空襲に備え血液型検査▼経済、志願者減少▼新大学院確立へ特別研究生創設▼大日本育英団創設：3600 名へ▼3 年経て学史成る▼付近の休業で学生食堂の登録者激増「燃料が追いつかない」 学生▼我が従軍記：ただ不名誉への恐怖▼秋瓦（編集部）：学園は興奮の中にも冷静／戦う意欲が深く根ざす／近頃、新入生が軍人勅諭の暗唱を練習／大学新聞は戦線と学園を結ぶ▼卒業生名簿：「戦場での再会期して」▼同学会、入営者に会費免除▼医、学生隣組を強化 文化▼現代作家の想像力衰退▼松下村塾の今昔▼映画の色▼報国美術観▼京阪の動物園▼室町時代の芸能 広告▼休刊前最終号に空欄

1943 年 2 月 5 号 1 面「大学新聞の動向」 沈滞、消極の色濃厚 望まれる精彩

- ・紙面に自然科学系の論文が少ない。
- 理由は学者の怠慢や疲弊。
- 間に合わせの原稿しか来ない。
- ・東大新聞：大学新聞の王者／行政の記事が迅速で豊富／全国高校に読者／各高校にいた通信員は禁令で去った／時事は最近低調／論説の人材は他大学の追従を許さぬ／紙面の広さに苦しむ感
- ・三田新聞：ほとんど読むところがない／かつての鮮やかな紙面は失われた
- ・早稲田大学新聞：伝統のジャーナリズム精神が生き、大学新聞の文芸雑感化の傾向に雄々しく立ちはいだかる／テーマ固定しがち
- ・一橋、法政、神商、九大なども批評。

1935年～1944年3月の年表

| できごと                                       | 年    |
|--------------------------------------------|------|
| 3 創刊10周年を記念して<br>同窓組織インテル会発足               | 1935 |
| 4 旬刊(月3回)に戻す                               |      |
| 6 滝川事件2周年集会の<br>報道差し止め<br>→編集員5名抗議の退部      |      |
| 2 二・二六事件                                   | 36   |
| 5 退部組『学生評論』創刊                              |      |
| 6『学生評論』停刊                                  | 37   |
| 12 矢内原忠雄、東大を辞す                             |      |
| 2 人民戦線事件で東大教授<br>ら検挙                       | 1938 |
| 4 国家総動員法公布                                 |      |
| 1 東大「平賀肅学」                                 | 1939 |
| 3 軍事教練必修に                                  |      |
| 9 第二次大戦開戦                                  |      |
| 10 大政翼賛会発足                                 | 40   |
| 10 記事増加で段数増やす                              |      |
| 4 新聞部員を含む京大の<br>非合法グループ検挙                  | 1941 |
| 4 学友会を同学会に改組                               |      |
| 6 用紙の割当配給開始                                |      |
| 8 コントが原因で発禁処分<br>→入山が発行人を辞任<br>→後任に西田一郎が就く |      |
| 9 京大報告隊結成                                  |      |
| 10 大学修業年限短縮                                |      |
| 12 真珠湾攻撃                                   |      |
| 1 学生の勤労働員開始                                | 1942 |
| 4『決戦下学生に与ふ』出版                              |      |
| 10 用紙不足で2頁発行へ                              |      |
| 9 文科学士の徴兵延期停止                              | 43   |
| 12 第一回学徒出陣                                 |      |
| 3 用紙配給止まり休刊へ<br>(翌月帝大新聞も)                  | 44   |

『京都大学新聞縮刷版』をもとに作成

## 【連載第四回】京大新聞の百年 紙不足で休刊、東大と合併、戦後「関西一円」掲げ復活

2023.12.16



1940 年ごろ、海軍機で体験飛行した際の新聞部員ら  
2025 年 4 月の創刊 100 周年に向け、京大新聞の歴史を振り返る連載の第四回。時系列で振り返る「通史」は、今回 1940 年から 49 年までを扱う。なお、内容は 1990 年に出版された書籍『権力にアカンベエ！京都大学新聞の六五年』から大部分を転載して再構成する。このほか、実際の紙面から記事を書き留める「拾い読み」は、前回の先取り範囲を除く 44 年から 49 年までを掲載する。また、各氏の論考やコラムで視点を補う。連載を通して社会背景や編集部の理念を顧みることによって今後の紙面づくりに活かしつつ、各方面

の歴史を考える際の一助となることを期待する。（編集部）

### 目次

通史③ 休刊から復刊へ（1940～1949）

拾い読み④ 時局に応じて変わる「使命」「全国一本建」から「関西一円」へ

通史③ 休刊から復刊へ（1940～1949）

#### コラムが原因で発禁に

1940 年に日独伊三国同盟が結ばれ、大政翼賛会が発足。翌年には太平洋戦争が始まった。思想統制下でも学生運動が途絶えることはなく、41 年 4 月、京大の非合法グループの 28 名が検挙された。少なくとも 2 名の新聞部員も含まれていたという。

こうしたなか、京大新聞は発禁処分を受けることになる。

39 年に西田直二郎が新聞部長を退き、八木芳之助教授が後任に就いた。報道差し止めも辞さない前任者とは異なり、八木は編集に口出ししなかったという。部員が増えたこともあり、35 年の総退部騒動から閉塞感のあった紙面に活性化の兆しが見えつつあった。

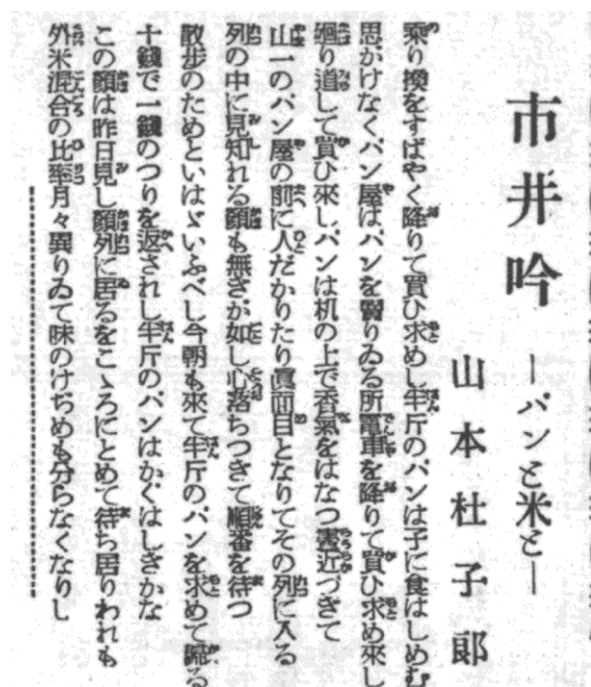
しかし、41 年 8 月 5 日号に掲載した新聞部卒業生のコラムが京都特高警察から問題視され、発売禁止処分を受けた。その責任をとり、入山雄一が創刊以来務めてきた発行人を退き、代わって新聞部出身の西田一郎が就任した。入山の戦前・戦後 50 年にわたる大学新聞生活で、発禁はこのときが唯一である。戦時中は発行前に京都府庁の特高課で検閲を受けることになっており、事後的な発禁処分は例がなかった。

発禁とされた号は、学生編集員の帰省に伴い大部分を入山一人で編集したものだった。のちに入山は「学生記者に何の迷惑もかかっていないのが、せめてもの慰め」と語っている。発禁処分時点で購読者への



発送を終えており、事務室に残る数百部の押収で済んだ。入山が自ら発行人を退いた背景には、文部省の介入が強まることを危惧し、先手を打つ狙いもあったという。ただし、退任後も毎日、部室に顔を出し、学生の相談に乗った。

入山は発禁に合点がいかず、特高課長を訪ねたところ、コラム〈S 夫人行状記〉と短歌〈市井吟ーパンと米とー〉が問題であるとの説明を受けた。前者は新聞部出身の新聞記者が寄せたもの。「S 夫人」がデパートへ出かけるも、米や服などがことごとく売り切れているという内容で、配給制に伴う「新体制」として定着した買物行列を描いている。後者は外米混じりの米を「味のけじめも分からなくなり」と嘆いている。入山は現実の描写であると抗議したが、敵国のスパイに物資不足の窮状を知られうるとの理由で認められなかった。



特高が問題視した詩歌

用紙不足で休刊へ

戦線を拡大する日本は、東南アジア諸島を次々と占領下におさめたが、42年6月のミッドウェー島海戦での敗北を境に戦局が逆転した。このころには、新聞部出身者の戦死の悲報が届くことも珍しくなくなった。

43年9月、文科系学生の徴兵延期が停止され、現役編集員も召集を受けるようになった。人手が減りながらも発行を続けていたが、戦時下の経済の破綻は新聞用紙にも及び、44年3月、第378号で休刊した。東大では、38年の「新聞用紙供給制限令」などにみられる統制以降、帝大新聞の頁数を12→8→6→4と減らしており、割り当てが止まった

た44年5月、こちらも休刊に至った。一方、命脈をつなごうとする動きが並行して進んでいた。



出陣学徒の壮行式（1943年11月20日）

『大學新聞』へ東西統一

44年4月末、入山は帝国大学新聞に呼ばれて上京した。東京帝大の新聞部長・戸田貞三教授らの働きかけで、内閣情報局次長を通じて用紙の配給を受けることになったという。ただし、全国の大学に分けられる量はなく、合併して一紙を発行するという事で相談がまとまった。

同年7月に大學新聞社が発足。これを本社とし、京都帝国大学新聞を関西支社に据え、当時全国唯一となる学生新聞『大學新聞』が創刊された。

7月1日から月3回の発行を始めた。出陣・動員学徒以外からは個人の直接購読を受け付けず、京大2

千部、神戸大 600 部、大阪大 200 部など各大学に配布した。

事務所や役員構成は旧帝大新聞のままで、編集・印刷を東京で実施した。京都からは記事を送るのみで、入山によって新たに採用された学生 2 名が、これを担当した。2 名とも召集後の体格検査で即日帰郷となり、やることを探していたという。東大側も徴兵で人手が足りず、助手や女性職員の力を借りた。のちに復員学生も加わったほか、若手研究者からなる「青年文化会議」の構成員も原稿を寄せた。大学新聞は、「戦争を鼓舞する」という名目で用紙配給を受けており、その紙面には、出陣学徒の手記や青年将校座談会、文部省の「決戦教育措置」を説明する記事など、戦時下の色があらわれている。一方、研究論文を載せて学術要素をとどめるほか、文部当局の授業停止措置を「ドサクサ仕事」と指摘するなど批判的視点の記事もあった。当時の部員は、「指導的な発言と、新生への胎動的発言が入り混じっている状態」と回想している。

終戦後、「過渡期を支えて来た『大學新聞』は充分その使命を果たした」として、46 年 4 月 21 日の 58 号をもって終刊する。57 号には、『帝大新聞』再刊の予告が載っている。そこには、『大學新聞』の定期購読者を引き継ぐ旨も記されている。終刊に先立つ 46 年 4 月 1 日、京都では入山を中心に『学園新聞』の発刊を迎える。

『大學新聞』の創刊号

『学園新聞』として復刊

戦後の食糧難と物価高の嵐が国内を襲う一方、GHQ（連合国軍最高司令部）の指揮のもとで軍国主義者の追放をはじめとする社会構造の変革が進み、日本社会は平和主義、民主主義へ衣替えしていった。大学にもその波が及ぶ。46 年春には、戦時中に国家主義的な教育を推進したとされた教官が大学を去り、入れ替わって滝川事件の関係者ら免官組が大学に復帰した。



学生運動が盛んになり、学園民主化や「反戦・平和」が叫ばれた。ただし、後年に比べると政治的色彩は薄く、学生大会では「生活危機突破」をスローガンに「学生食堂の値上げ反対」などが決議された。46 年 11 月には、同学会が大学当局との交渉を経て改組。それまで加わっていた教官らを排して学生だけの自治組織となった。

こうした情勢を背景に、『学園新聞』が生まれる。45 年 9 月以降、軍から学生が戻り、同年秋からは赤旗や中央公論、改造、文藝春秋など雑誌の創復刊が相次ぐなか、戦時中に『大學新聞』の関西支社で活動した部員が、「新時代にふさわしい学生新聞を」と動き出す。発刊へ向けた課題は多く、ここでも入山が奔走した。卒業生から資金を調達したほか、朝日新聞大阪本社に印刷依頼の手はずをつけた。用紙の入手も一筋縄にはいかない。内閣の新聞用紙割当委員会に対し、45 年 10 月、戦前の京大新聞の復活を図る趣旨で配給を申請したところ、京大の特別扱いは認めないとの理由で拒まれた。そこで、申

請理由を「関西一円の学生が求めている」と書き換えたところ、用紙割当が認められたという。当時、全国の大学で用紙を得たのは東大と京大だけだった。そのため、配給の条件として、東大は全国を対象とする『大學新聞』の実績を維持し、京大は「関西一円の大学・高校を対象にした学生新聞」という制約がついた。

こうした事情から、題号は「学園新聞」に決まった。次の問題は発行母体である。戦前は同学会新聞部から発行されたため、機関紙の側面が拭えなかった。経済的にも同学会や大学当局に依存しており、部内では束縛のない独立採算制への志向が強かった。こうして、将来的な法人化も視野に 46 年春、「京都大学新聞社」が発足した。「学園新聞社」とする案も出たが、「京都の大学新聞社」という意味を込めた。47 年 10 月に京都帝国大学が国立京都大学へ改称したことで、「京都大学の新聞社」という意味合いが強まった。

46 年 4 月 1 日、2 頁 30 銭で『学園新聞』の発行が始まった。その直前、部室を訪ねてきた卒業生・伊達得夫が、入山の依頼を受けて初代編集長に就任した。

のちに詩誌『ユリイカ』を創刊する編集者・伊達のもと、紙面には大学に関するニュースや関西各校の報告、研究者による評論のほか、文学や美術に関するコラム・随想もみられ、総合雑誌的な雰囲気も漂っていた。「関西一円」を掲げるなか、学外では京阪神の女子専門学校の学生によく読まれ、毎号数百部行き渡らせていたという。各校に置かれた通信員がニュースを送る体制もできていた。

47 年 4 月、男女共学が始まり、京大にも 17 人の女子学生が入学した。49 年には旧制三高が京大に吸収されて教養部となった。さらに、戦時下で設けられた航空医学や日本精神史などの講座が廃止され、応用物理学、農薬化学といった講座が新設された。食料科学研究所や人文科学研究所、教育学部も新たに置かれるなど、新局面への下地整備が図られた時代だった。



## 『学園新聞』の創刊号 拠点と過去紙面を焼失

『学園新聞』発刊に尽力した星野輝男が 46 年 9 月に編集長となった後も、紙面づくりの方向性は維持された。学外では農地解放や財閥解体、極東国際軍事裁判、新憲法草案討議など、戦後史の方向を決定づける重要事項が次々と生起していたほか、各大学で軍国主義者を追放するべく教員の適格審査が続いていた。しかし、当時の学園新聞ではこれらの話題が紙面を埋めることは

はなかった。政治や経済といったテーマから距離を置く傾向があったという。

それでも、用紙不足で出版物が少ないという追い風に乗る、学園新聞はよく売れた。広告収入が伸び、独立採算制は上々の滑り出しとなった。47 年 6 月 11 日号からは週刊に移行した。

そんな矢先、事件が起こる。12月8日19時過ぎ、西部構内の学生食堂炊事場から出火。朝から吹き荒れていた季節風に乗って燃え広がり、学生食堂を挟む2棟をたちまち焼き尽くした。京都大学新聞社の部室は燃えた南棟の西端にあり、1925年の創刊以来の紙面や写真などが灰となった。部員や入山が駆けつけたが、建物を呑んで燃え続ける紅蓮の炎を前に、呆然と立ち尽くすしかなかった。

しかし、一度たりとも発行を休まないという部員らの思いで、翌日には本部構内の建物の一角に部室が構えられるに至った。工学部所管の実験室の空き部屋で、移転前より狭い。大学から借りた机とイスを置いて電話を取りつただけの急場しのぎだったが、予定どおりの発行にこぎつけ、当面はここを拠点に活動した。

48年4月、入山が市長に請われて京都（現・国立）博物館館長に就任し、部室を訪れる回数が減った。それでも、部員は入山の知恵を借りるべくしばしば東山七条の博物館を訪ねたという。

このころから、紙面は社会問題重視の傾向を強めていった。ヨーロッパではベルリン封鎖、アジアでは中国の国共内戦激化や朝鮮半島の南北分断など、東西緊張がいよいよ高まってきた。国内では公務員のスト禁止や大学の管理統制を強化する「大学法」の制定準備など「右旋回」の様相がみられた。

ルポ記事から警察導入騒動に

49年、学園新聞のルポ記事が波紋を広げる。

医学部の看護師養成機関「厚生女学部」の学生が病院実習の名目のもと無給でこき使われているという旨の記事が3月21日号に載った。

これに反応した共産党が生徒たちをけしかけてストライキを起こし、医学部長らとの団体交渉に発展した。病院側は対抗手段として、騒動に関わったとされる卒業予定者6名を不採用とした。これを受け各学部自治会が生徒の支援を表明。同調ストを打ち出す事態になった。5月18日には病院長室を数百人の学生が取り囲んだ。にらみ合いが続くなか、約400名の警官隊が突入。3名の学生が逮捕された。京大が戦後初めて警官隊を導入した。大学の自治の侵害であるとの反発を呼び、抗議運動に拍車をかけることになった。

さらに、このころ全学連（全国学生自治会総連合）が国立学校設置法案などに反対して全国的なストを指令していた。6月3日には、京大本部時計台前でルポ記事に端を発した「闘争」の支援を兼ねた「全国学生大会」を強行した。これが深夜に及び、数百人の学生が総長室を取り囲む事態となった。大学側は収拾を図って2度目となる警官隊の導入に踏み切った。

学園新聞は一連の騒動を2度の号外などで報じた。ところが、当時学内で影響力を強めていた滝川幸辰法学部長から、その報道姿勢が偏っていると牽制された。もともと滝川氏は、学部紹介記事の内容に不満を抱いて編集員を呼び出すなど釘を刺す動きを見せていた。さらに、京都大学新聞社について、同学会の組織でも大学が認めた団体でもなく、大学の施設を不法占拠していると指摘し、解体論をちらつかせることもあったという。

一方、同学会では1949年秋ごろまで運動部を中心としたいいわゆる「右派」が執行部の大勢を占めるな

ど、学生側にも学園新聞と対立する勢力があった。

こうした情勢で、新聞社の学外移転も考え、入山に相談した。入山は「大学の中にあつてこそ、その伝統と格が維持できる」と述べ、独立採算制にもとづく新聞の自由を守りつつ大学と折り合う方途を考えるよう助言した。入山の激励を受けた部員たちは、滝川の恩師であり戦前に新聞部長を務めた佐々木惣一名誉教授、学園新聞発足時の顧問だった静田均経済学部長らに協力を依頼しつつ、学生課長を窓口として大学からの新聞社公認を得るべく交渉を進めた。49年9月から始まった話し合いは、管理権を持ちたい大学側と編集権の侵害を懸念する学園新聞側との間で簡単にはまとまらなかった。最終的に、教官らで構成する顧問団を置くことを条件に、鳥養総長と編集長の名義で交換協定文を作成し、50年1月23日、公認の調印に至った。



警察突入を報じる『学園新聞』（1949年5月23日号）

拾い読み④ 時局に応じて変わる「使命」「全国一本建」から「関西一円」へ

| 年<br>できごと | 1949                                        | 1948                                                          | 1947                                                                     | 1946                                                                                                                                         | 1945                                                                                             | 1944                                                   |
|-----------|---------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
|           | 6 合否電報開始<br>5 関西学生新聞<br>5 看護学校事件<br>連盟結成・参加 | 4 印刷所を高速<br>印刷(毎日新聞<br>の子会社)へ<br>11 独立機関たる<br>旨、同学会と<br>覚書を交換 | 12 西部の火事で<br>事務所や過去の<br>の紙面を焼失<br>9 京都帝国大学<br>を京都大学に<br>改める<br>6 旬刊から週刊へ | 12 全関西学生文<br>化祭を催す<br>12 当用漢字新か<br>なづかいを採<br>用・ルビ廃止<br>京都大学新聞社<br>設立<br>滝川、高坂、<br>静田教授が理<br>事、入山氏が専<br>務理事に／独<br>立採算制・旬刊<br>へ移行／第三種<br>郵便物認可 | 1 軍国主義者<br>追放始まる<br>10 関西支社の部<br>員が復刊模索<br>9 連合国軍統治<br>開始、プレス<br>コード発令<br>8 ボンナム宣言<br>4 『大学新聞』終刊 | 11 本土空襲激化<br>10 満17歳以上を<br>兵役に編入<br>6 『大学新聞』の<br>関西支社に |

1944年

▽4月～（大学新聞）

新聞社▼一般購読は受け付けず各大学へ割当配給／「読了後は前線の戦友に送って」▼原稿募集：出動学徒の手記／短歌・俳句も可時事▼ナチスの接近と差異▼緊迫する世界戦局の動向▼教授の激励：学徒の総力発揮を望む→諸君こそ国の柱▼全面生産体制へ：授業時間も撤廃▼学徒動員、量質共に全能を傾注▼虚弱学徒も動員：事務作業に参加▼米国の学徒動員：朝日新聞特派員寄稿▼満17歳以上の学徒は全て軍人に▼妙味含む最高戦争指導 教育研究▼国民食糧供給確保の課題▼宣伝政策と映画▼アジアの大学との提携のすすめ▼鉱山・溶接学科新設▼「清風荘」寄贈で表彰▼決戦下の刑▼学者と責任感▼西洋的思考の反省▼動物と戦争▼哲学史的事実の開明▼研究随想：敢闘の精神▼白色人種の皮膚と毛▼兵器論▼戦時細菌学の課題▼戦争と学問と死：海軍大尉の寄稿 運営▼各大学の勤労出動：京大、九大など▼各大学入試、ほとんど定員超過▼文科系定員を縮減▼戦時研究に殉じた助教授の学部葬▼「学徒勤労援護会」設立▼北大結核研究所落成▼新潟高校、小林教授ほか9君を校葬：勤労働員中チフス罹患▼教授団、前線で講義：美大、音大は閉鎖▼京都医大、初の式なし卒業：証書は出勤先へ郵送▼良書



入手難に救ひ：京大、出勤中の学徒にも巡回文庫▼滅敵の誓いも堅し：軍服姿も混ざる全大学3万の卒業式▼近く医学徒も出勤▼北大で掘る鉤脈二筋道▼出陣壮行式一年→攻勢転移の神機遂に至る▼仮卒業の戦病死学徒に卒業証書▼千葉医、奉仕隊結成▼各大学供出：北大は白金 学生▼夏休み返上で生産に邁進▼講義に飢える学徒▼出陣学徒手記→信濃そばに内地偲ぶ／生まれた甥へ（陸海軍報道部検閲済み） 文化▼詩「兵隊さん」「茄子紫なり」▼非常時の演劇界▼風刺小説と経済▼陣中で作られた楽譜▼ドイツ文化の祝祭▼書評：『支那統治史』▼映画評『かくて神風は吹く』→「もっと堂々と勝利の論理を」▼「戦時特別美展」評 広告▼ほぼ出版社▼東宝▼痔の薬▼米英撃滅の歌



出陣壮行式1周年 44年10月21日号

『大學新聞』創刊号

▽社説「祖国の要請に即応して学徒総決起の推進指導機関となり」「緊密一体化を促進」、「全学園の指導紙たることこそ新たななる学徒新聞の使命」

▽創刊の辞「全国一本建の学徒新聞として文部省のご支援を得て発足」、「皇国教学の本義に則り」「祖国の運命を担う若き学徒へ送らん」

1945年

▽終戦まで（大學新聞）

新聞社▼空襲で一時第三種郵便物の停止→回復後、一括送付時事▼陸軍関係者や東大学生課長ら座談会（陸軍報道部検閲済み）：陸軍中尉「学問は戦闘のためであった」▼生命以上の尊さ：悔ひなからんがためには、自己の命にも優れる尊さを求めなければ→それは輝ける歴史を有する皇国を愛護すること▼石炭増産の経路▼米国戦争経済の動揺：朝日新聞記者▼民族の優秀さ：東文理大教授→特攻隊は生きながら神の姿をもつ／聖敵完遂へ取闘を▼社説：一切を航空機生産へ 教育研究▼熱帯菌に挑戦▼国際法の価値▼大国民的資質の錬成運営▼在郷軍人分会結成▼出陣学徒に餅を送る▼動員学徒援護会発足へ予算150万円▼東大勤労部を新設▼京大、学生食堂で菜園経営▼京大、檄文を発送：学生代表「持てる一切を捧げ祖国に殉じ神州護持の礎石たらん」▼東大、チフス予防注射 学生▼出陣学徒手記：（残留学徒へ）我々は諸君を羨まない。次代の明るき自由なる青春を迎えられんことを▼角帽異変：不用品は譲って→新入生が帝大生の象徴たる角帽を手に入れられない▼投稿〈突撃路〉：技術指導者を十分錬成せよ 文化▼東大教授作「学徒神風の賦」：必死必殺、日本万歳▼随想：書物疎開広告▼ドイツ語通信講座▼大日本言論報国会▼慶大米英批判講座▼動員学徒叢書『皇国人の真姿』

▽終戦後（大學新聞）

新聞社▼懸賞小説：老若男女の佳編62作集まる時事▼文相、学徒に告ぐ：使命を自覚し明日の皇国に生きん：終戦の詔書も▼文教刷新の機運濃化：休職教授ら復職か 教育研究▼アメリカ民主主義の本質▼森戸辰夫：生誕を待つ新無産政党▼治安法廃止の必然性▼人民の手による憲法改正▼日本財閥の発達

と功罪▼日刊新聞評▼鈴木茂三郎：戦争責任の所在をつく 運営▼玉音拝し血涙：東大講堂で厳粛な誓い▼京大、殉職した原爆調査班の学生の大学葬挙行▼阪大、人文科学部を設置▼京大、軍学徒入学に反対 学生▼復員学徒は思う「悲壮と感ずるほかない」▼社説：空疎な学生運動文化▼新文化への胎動：日本映画様式論 広告▼古書買入



トップに終戦の詔書 45 年 8 月 21 日号

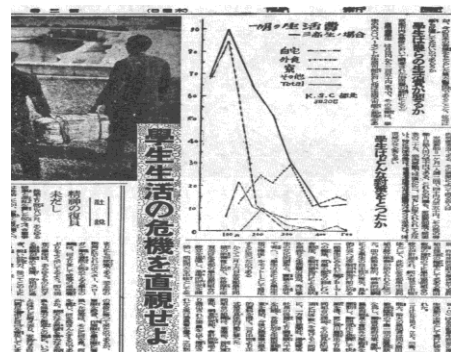
1946 年

▽4 月（大学新聞）

時事▼英国労働党内閣の政策の解剖教育研究▼両立し得る余地ありや：民主主義と天皇制 運営▼帝大総長会議：男女共学推進へ▼学園に帰る英霊 142 柱：東大で慰霊祭▼社説：学生に訴ふ「民主革命への反動勢力に対して戦争を開始せよ」「終刊に際し切に訴える」▼東大、校内外食券食堂開く 学生▼食糧難で休退学者増加 文化▼ナチス強圧下のフランス文学 広告▼5 政党代表政策発表演説会

▽（4 月～）学園新聞

新聞社▼直接購読受付▼各学園の通信員募集▼教職員追放への意見募集▼19 号より値上げ：2 頁 40 銭▼23 号より常用漢字と新かな使用・ルビ全廃 時事▼憲法改正案を学生は如何に批判したか 教育研究▼プロレタリア独裁と民主主義▼考古学の使命運営▼苦境受け講義続行か休講か→続行へ▼女子帝大生・医軍人帝大制を困む座談会▼世紀の教育裁判→教員適格審査：愛国団体参与者などを追放へ 運営▼図書館、貸出中の書籍多し→本を買えない学生多い▼引揚学生に転入試験▼阪大に 2 学部新設学生▼黒板（コラム）：真摯な学生は学問への意欲をどこへぶちまけたらいいのか▼生活難の打開に全京都学生協同組合成る▼京大同学会改組へ▼学生の生態：食を与えろと怒号▼東京ルポ：喫茶店が大繁盛▼法経にも研究室制を：学生と総長が意見交換▼オーケストラ演奏会▼インターハイ復活▼六大学野球、戦後初シーズン▼言論の自由なき立命大新聞：印刷所に総務部長が訪れ、学生部に関する記事削除を命令→掲載できず→学生側、会則改正案を提出へ 文化▼松竹の支援で学生演劇統一▼京都学生映画連盟、映画人気調査▼全関西美連の展覧会



生活費のグラフ 46 年 4 月 11 日号

『大学新聞』終刊の辞

- ・「使命を終わりとる」
- ・戦時の压力下で「唯一の学生文化新聞」／「文化的精神の培養体」として発行
- ・「微力にして時に圧力に屈し」「自責に耐えざる」→「自己批判に立って終刊」

・「学生運動の旺盛なる展開」をふまえ、「57号を以て決別」

※58号では終刊に言及なし

『学園新聞』創刊号より

▽京大や大阪商大、立命館大の各学長ら寄稿 休刊を淋しく思っていた／新しい立場から関西一円の大学高専の学生を対象に／社会人にも高い指導性を持て／一般紙を模倣せず学園の方向を示せ

▽社説 関西の学生運動を指導する任務／共通課題を提示することで同一方向へ／特定学校の新聞でも運動の機関紙でもない／一つの主張を押し付けるものでもない／学生が緊密な連絡を／全関西学生の世論を反映せしめんとする新聞社側とそれを認識する読者側が相互に密接な関連を持って初めて恥じからぬ実質を備える

『学園新聞』7号より ▽学生論争：大学新聞の在り方 一般的新聞と雑誌の中間／学校の掲示板的作用／学生生活の批判も

1947年

新聞社▼懸賞論文当選3作全文→編集部講評：募集課題2つのうち「恋愛観」の応募多数→「思想」へ反響なく「さみしい」▼各学園の通信員募集、謝礼あり▼寄稿募集：最近内容の空虚なるもの多く残念／より充実せる寄稿の多きを望む▼資材騰貴で50銭に値上げ（3月）→紙・印刷代高騰で1円へ（6月）→2円へ（10月）▼発足した関西学生救済委員会の求人申込受付 時事▼社説：府議の失言ふまえ「男女共学には社会的基盤を早急に築かねば」▼4大政党、文化政策展望▼神戸市長に聞く政治と学問▼高橋文相入洛談：左翼学生は勉強不十分 教育研究▼物理学の現段階：湯川秀樹▼自由研究体制へ京大科学陣乗り出す▼現代哲学諸問題▼電子顕微鏡を探って▼ギリシャ女性観 運営▼急げ教育民主化：米国教育視察団の報告▼17校が女子大昇格か▼再び食糧危機：休講か続講か悩む学校当局▼帝大の名称廃止決まる：全国総長会議▼育英資金増額へ▼授業料未納者多し▼内職案内一覧：ラジオ組立、サイダー製造▼京大で東洋一の図書館着工▼50周年祭へ物資不足呈出▼また授業料値上げ▼完成近い大体育場▼京大西部構内全焼▼立命館、夜間大設置へ学生▼東西対抗ラグビー10年ぶり制覇▼震える学生：燃料不足でストーブない▼仏教学生連盟発足▼京大学生協議会発足▼京都地区学校寄宿舍連盟発足▼市議選で2学生当選、批判も▼学生思想傾向調査▼全国官立大学学生会議▼日米学生会議：対等に討論▼政治経済を語る学生座談会▼文学部学友会世論調査、相変わらず無関心主義▼社説：女子学生を「特権階級意識のしみこんだお嬢さま」と批判▼学園に放送局の街頭録音▼学生服地の配給▼ソ連映画上映会▼自治の混乱：立命館大で暴力沙汰 文化▼井上靖の散文詩▼新短歌の方向▼学生映画をつくる会▼音楽大学の誕生 広告▼高級カメラ▼スポーツ用品▼ビタミン注射液▼PHP新雑誌



アルバイトルポ 47年7月16日号

1948年

新聞社▼年間購読を100円に値上げ▼1部4円に値上げ▼誤植訂正：「厚生」は「原生」の誤り→活版ならではの誤字か▼部員募集：京大の1回生▼取引高税法上日刊紙扱いに（10月）▼本社で盗難：発送名簿や社印 時事▼各国農業生産機構▼日本学術会議設置へ▼イタリア総選挙後に来るもの▼米大統領選挙迫る▼社説：今や民主主義の危機▼学生政治活動に制限、文部省正式に態度表明▼社説：文部省には各大学や学生の意見を十分聞いて法案を作成するよう望む▼岐路に立つアジア：赤色旗風の嵐 教育研究▼遺伝よりみた癌▼近代精神の克服▼洪水防止の根本論▼原子力時代の人間像▼ロシア革命勝利への道▼ルポ：北海道農業▼ルポ：京大舞鶴水産学科運営▼また授業料値上げへ→約3倍に▼京大職員組合結成▼京大経済、二期制実現へ▼同志社、法経神文4学部今春から設置▼三高、京大に合流▼教授連合総会：守らん学問の自由▼京大協同組合発足▼人文研、東方・西洋文化研究所を合併へ▼新病理学教室落成▼教養部校舎を宇治に▼京大図書館司書の訴え：経費が東大の16分の1▼学生の紙面投書「『本部』抹殺論」に職員が寄稿で反論▼大阪専門学校、大学昇格めぐり教授陣総辞職▼龍谷大、教職員再追放の旋風 学生▼アンケート：新春への期待▼全国学生宗教調査▼本社世論調査：学生運動関心68%▼三高・姫高に初の女子学生▼試験制全廃論▼社説：女子教育は戦争による空白を無視している▼総長を囲んで女子学生座談会▼初のインドネシア留学生卒業▼同学会、授業料不払体制を堅持→のちに解体▼同学会改組案に運動部が反対▼全国自治連会議、スト不成果を自己批判▼超党派的学生運動へ、民学同結成近し▼東大新聞の人事に大学当局が圧力▼東大新聞、発売禁止に：原因は左翼的な編集方針か→構成員の反発受けつつ大学側主導で「東大学生新聞」を発刊、「東大新聞」は廃刊に 文化▼関西出版会展望：良書は荒天の星のごとし▼ロシア文学における死▼日本考古展▼三島由紀夫寄稿▼映画部、松竹と提携して脚本募集▼六大学野球、立命館大に栄冠 広告▼太宰治『人間失格』▼近畿大学予備校▼大学制服調製▼詩誌『ユリイカ』



滝川事件 15 周年 48 年 6 月 7 日号

1949 年

新聞社▼黑板：京大受験生へ本紙を立売りした→活字への無関心を露呈▼編集員募集：1 回生のみ▼1 部 5 円に値上げ（6 月）▼受験電報取扱→可否結果発表通知の電報を取り扱う／基本 40 円▼毎週 4 頁制を目標に漸次移行 教育研究▼危機に立つ「ドルと原子力」外交▼中国革命の根本問題▼スペイン学術代表、京大を訪問▼関大、全国初の新聞学科▼学部紹介：法学部→禍痕残す「学部自治原則」▼癌の正体発見か：電子顕微鏡学会で論争

運営▼新制大 79 校決まる：京都に 10 大学▼受験生に東山会館開放▼同志社女子大発足▼京大農、北海道に演習林、京大病院看護婦不採用問題、再燃▼3 学生を逮捕、警官 400 名学内へ▼波紋描くアカ教授追放と反対運動▼学内掲示制限、具体化 学生▼最後の三高ラグビー祭▼全学連総会▼京大春季文化祭：主催同学会、後援京大新聞社▼全学学生大会、責任追及で紛糾、共闘と同学会の溝深し▼戦争原因の究明へ：京都で全日本学生平和大会▼同大新聞に応援団干渉で暴力沙汰に▼ルポ：ソ連引揚学徒を尋ね▼自治会連合、全学学生自治会と改称▼学生運動、渦巻く左右の対立▼全国学生新聞連盟成る▼近畿高校新聞講習会：朝日新聞本社▼神戸女学院新聞部、厳重な学校検閲で散々削られる 文化▼革命期の文学▼映画評「女の一生」▼文化遺産への新しき感覚▼黑板→野球部が弱い▼画家とファシズム▼日本映画の危機 広告▼角帽▼洋服▼眼鏡▼東大学生新聞▼朝日新聞社



引揚学徒ルポ 49 年 7 月 11 日号

▼関西学生新聞連盟新発足（125 号ニュース要旨）

48 年春発足した関西学生新聞連盟が弱体化していたが、学生運動取締が強化され、自由な編集権を保持すべく連盟再建。関学新聞部を中心に会合が持たれ、京大、関大、龍大などが参加した。関東学生新聞連盟とも連携する方針を確認した。

論考② 『大學新聞』をどう読むか 小関孝子 跡見学園女子大学講師

小関孝子氏は、雑誌『婦人之友』の研究の一環で 1945 年の新聞雑誌について調査し、『大學新聞』に偶然出会ったという。その縁から、研究対象としての活用の可能性を『大



『學新聞』の研究にむけて「終戦前後を語る史料の可能性―」（『生活学論叢』32巻、2017年）という論文にまとめている。今回、小関氏に寄稿を依頼し、『大學新聞』の希少性や読み方について当該論文をもとに改めて考察してもらった。（編集部）

## 検閲の端境期に見出さる学生らの本音

### 1 「検閲のない約1か月」にも刊行された機関紙

『大學新聞』が創刊されたのは、1944年7月1日である。戦局の激化にともない、全国の大学新聞は休刊を余儀なくされ、財団法人大學新聞社が発行する『大學新聞』に集約された。『大學新聞』第1号掲載の「創刊の辞」には、『大學新聞』が「全国一本建の学徒新聞」とであると明記され、創刊の目的には「全国学徒動員の徹底」という言葉が記されている。『大學新聞』は終戦をはさみ、1946年4月21日発行の第58号まで、ほぼ毎月1日、11日、21日のペースで発行され続けた。

戦前・戦後を語る史料として、『大學新聞』が特筆すべき存在であるのは、終戦をまたいで継続的に発行されていた点にある。1945年の言説を分析する際には、言論統制の環境が変化することに伴い、①日本政府によって言論が統制されていた8月14日まで、②日本政府による言論統制が機能しなくなった8月15日からGHQによる検閲が始まる前の9月下旬頃まで、③GHQによる検閲が開始される9月下旬頃以降、以上の3つの時期に分けて読み解く必要がある。『大學新聞』の史料的価値は、②にあたる時期、すなわち日本政府の検閲もGHQの検閲も免れ、自由に発言できた可能性がある「検閲のない約1か月」にも継続的に論考や随筆が掲載されているという希少性にある。

### 2 「特攻隊たらしめるな」を解釈する難しさ

『大學新聞』の記事の内容を大きく分けると、全国の国公立大学の動向を報じる記事、時局に応じた特集（専門家による論考や座談会など）、学術関連の連載記事（誌上講義や書評など）、随想・投稿その他、となる。『大學新聞』の史料としての魅力は、多くの記事が記名記事であるという点である。私が数えてみたところによると、第1号から第58号の総記事数約1600のうち、938本の記名記事が確認できた。執筆者の所属は全国各地の大学教員のほか、新聞記者、官僚などもみられる。また一部には学生による手記や論考も掲載されている。執筆者の専門分野は広範囲にわたり、大学史、政治史、思想史に関連する記事のほかにも、機械工学や法律、文学に関連する内容も多い。

貴重な記事が多数掲載されているものの、『大學新聞』の言説を研究資料として使用する場合、特に戦時中の記事の扱いが難しい。戦時中の記事は厳しい言論統制下で書かれたものであり、内容を執筆者や発言者の真意としてそのまま受け取ることはできない。ここで『大學新聞』の記事を読み解く難しさを示すために、当時の東京帝国大学法学部長であった末弘厳太郎の記事を紹介したい。1945年3月11日発行『大學新聞』第23号の1面には、末弘が法学部の学生を学徒兵として送り出す際に「特攻隊たらしめるな」という発言をしたという小さな記事が掲載されている。記者名は記載されていない。記事の内容は、末弘が学徒兵として動員される法学部生を送り出す挨拶のなかで、学生は貴重な人材なので、政府は計画的にこの人材を活用するべきで、特攻隊にしてはいけないという趣旨の発言をしたというも

のである。末弘厳太郎は当時、「全国学徒動員の徹底」を目的に掲げる『大學新聞』を発行する財団法人大學新聞社の理事であったこともわかっている。どのような意図で「特攻隊たらしめるな」という発言をしたのであろうか。この記事は、戦時中の記事を解釈することの難しさを示している。

勤勞意欲に燃えて學生挺身、國難打開の礎石たらんとする法學部有志學生を送り出した末弘法學部長は六日學部長室で左の如く語つた――

×…燃え上る學生の熱情、勤勞意欲を全面的に有效な場面に生かし全体を組織的にやるには、學生の自発にまかすは、

いはいけない、政府でも計費を削てねばならぬ、今度出て行く法學部の學生にしてもこれを挺身隊、特攻隊に

**“特攻隊たらしめるな”**

この氣持生かす計畫を、

してはならない、その氣持、學徒が現在敵軍を放棄しても働きたいといふこの氣持を政府はとらへ、全体的に生かす

授業の場では、人間としての修行をする事が、學徒であり、學徒が國家的意識に燃え心魂を傾けて働くといふ、この心を生かし

て行くのが眞の教育形だけだ、教育で何万人送り出して時代を變へる青年は出て來ないこの際學徒を足ぶみして一年永生きする工夫が必だ、その覺悟になれば勤勞も即修行有爲の材は轉出する

**挺身隊 末弘 學法 徒學 送部 長**

【寫眞は末弘法學部長】



45 年 3 月 11 日号

3 戦前・戦後の学生の声を記録する史料として

『大學新聞』を研究する最も重要な意義は、『大學新聞』には学生たちの声が多く寄せられているということに他ならない。戦前・戦後の学生たちの発言や手記が、まとまった分量で掲載されている『大學

新聞』は、学徒動員当事者の声が集積された重要な史料である。学生の記事には投稿のほかに、座談会も企画されている。例えば、1945 年 5 月 21 日発行『大學新聞』第 29 号には「学徒と操縦」と題した座談会が掲載されている。出席者は東大、京大、東工大、阪大の学生たちで、操縦した感想や、航空技術について意見が交わされている。

終戦を迎えると論考を寄せる大学教員などの知識人の顔ぶれが変わり、内容も大学再建に関する内容が主となっていく。知識人たちの発言から見えるのは、終戦前と終戦後の不連続性である。しかし、学生の発言からは戦前と戦後の連続性が浮かび上がる。1945 年 9 月 1 日発行『大學新聞』第 37 号には、東大の学生が「偉大な試練への道 徹底的反省への出発」という論考を寄せている。これは「検閲のない約 1 か月」にあたる極めて貴重な言説である。学徒動員で駆り出された学生たちは、帰還するも、戦後には戦後の混乱に見舞われた。1945 年 10 月 21 日発行『大學新聞』第 42 号には、京大生が「復員学徒は思ふ」という論考を寄せ「秋深い故郷の山川にかへつて来て机に向かひ本を読む。こんなことがありうるだろうか。」と綴っている。『大學新聞』の真価は、学生の声にある。

## コラム⑥ 検閲官の懐柔に成功？ 親交深めて「フリーパス」に

学園新聞は発刊当時、占領軍を批判しないなどの「プレスコード」で規制されたという。47 年卒の小林萬里夫氏によると、新聞発行のつど事前検閲を受けるべく四条烏丸の CIE（民間情報教育部）へ出向いた。以下、検閲への「対策」について小林氏が『アカンベエ！』に寄せたコラムから引用する。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

虎穴に入らずんば虎子を得ずの覚悟で、CIE のチーフであるアンダーソン中尉の秘書であったミス尾本を、英会話の先生として誘い出すことに成功した。編集部員とのパーティーを数回もって親しくなったころ、ミス尾本は同情してくれて、アンダーソンをパーティーに引っ張り出してくれた。その席で「学生時代から詩作が好き、いまでもつくっている」というアンダーソンの話を聞いたわれわれは、学園新聞で紹介したいと、かれの英文の詩を掲載したところ、「自分の詩が印刷されたのははじめてだ」と大喜びした。以後、CIE への出入りと学園新聞の検閲はフリーパスとなった。

その後、ミス尾本がこっそりみせてくれた「R」と大きく表記された CIE のファイルのなかには、（中略）編集部員全員の顔写真を貼った個人別経歴カードが、整理されていた。その顔写真が望遠レンズによる撮影であったことを確かめたとき、ある種の戦慄を感じた。（コラム「リマークド」）

## コラム⑦ 「世論調査」でお叱り 「ずさんにすぎた」

48 年卒の林篤二氏は、46 年 7 月 11 日号に掲載した「世論調査」をめぐる静田均教授から呼ばれて叱られたという。当該の調査は、戦争協力者追放のために当時行われていた教職員適格審査をふまえて学生の声を調べるべく、「やめてもらいたい教授」と「迎えたい教授」を尋ねている。これについて静田教授は、「全調査票数すら記載しない調査結果を発表することは悪質な宣伝」「学生に先生を有能か無能か判定する資格はない」と叱責。

林氏は『アカンベエ！』のなかで、日程の都合があったとはいえ、回収した調査表は各学部 3、40 枚

ほどで、「拙速、ずさんにすぎた」と振り返っている。



46 年 7 月 11 日号の「世論調査」

【連載第五回】京大新聞の百年 平和運動追い全国へ赴くも、紙面は「京都大学の新聞」へ  
2024. 01. 16



の歴史考察への寄与を期待する。(編集部)

目次

通史④ 黒字化から改題へ(1950～1959)

聞き取り① 『学園新聞』の理念と実情 1950 年代在籍者に聞く

拾い読み⑤ 「時事」の話題 広く紙面に 学生生活から反戦運動まで

通史④ 黒字化から改題へ(1950～1959)

大学にも押し寄せる右傾化の波

1940 年代後半から、占領軍による「右傾化」政策の波が大学に及んだ。49 年 7 月、GHQ のイールズ顧問が新潟大学の開学式典で演説し、共産主義教員を排除すべきという旨を主張。その後、各地の大学をまわって同様の講演を続けた。同年 9 月には人事院規則により国立大学教職員を含む公務員の「政治的行為」が禁じられた。こうした動きに対し、大学教授連合や日本学術会議が反対の声を上げ、学生も呼応して各地で抗議集会に発展した。

前年 48 年 5 月、国立大学の授業料値上げ問題から反対のストが起きた。9 月には全日本学生自治会総連合(全学連)が組織され、政治的な闘争へ踏み出す旨が決議されるなど、学生運動の先鋭化がみられた。

一方、京大の学生自治組織・同学会の内部では、49 年 12 月の代議員選挙で、反ファッショを訴える共産党系の統一民主戦線派が過半数を獲得した。その背景として、同年 6 月にかけて大学当局が警察を構内に導入する騒動が相次ぎ、「学園の自由」の堅守を訴える潮流が強まっていたことが指摘できる。

こうした学内外の荒れ模様に対し学園新聞は、週刊発行を維持して事態の推移を追いつけた。49 年 11 月からは、原則の 2 頁建てに加えて 4 頁で出す回数を増やすなど意欲的な報道を展開。その勢いは、『学園新聞』として 5 年目を迎えた春の紙面の挨拶文で「名実ともに全国唯一の週間学生新聞として堅実な歩み」と記すほどだった。ただし、続けて「まだまだ多くの問題を残している」と自省し、「苦難の道を歩まんことを誓う」とも述べている。実際、大学や学生に押し寄せていた不穏な波は、張り詰めた世界情勢のもと、簡単には落ち着かなかった。

1950 年 6 月、緊張が高まっていた朝鮮半島で戦争が勃発した。その直前には GHQ が日本共産党中央委員 24 名の公職追放指令を出すなど、占領政策が「反共」へ進んだ。同年 2 月からいわゆるレッド・パージが始まり、国立大学教員にも「赤狩り」の手が伸びた。朝鮮戦争による特需景気で食糧事情がよくなり、学生の生活環境も改善したものの、政治的な行動への風当たりは厳しかった。同年 7 月には警察が全学連の全国一斉捜査に踏み切っている。

こうしたなか、学生運動は政治的なテーマを帯びて活発化し、権力と対面した。50 年 11 月には、前進座事件が起きた。京大演劇部が前進座の団員を招いて催しを企画したところ、「占領目的阻害」を禁じる勅令 311 号に抵触しようとして、京都府警が立ち会いを要求。これに反発した学生が川端署に押しかけ、5 人が検挙された。抗議の輪が広がって学内集会が強行開催され、大学当局は同学会の委員長を含む学生 36 人を処分した。国内外の情勢をふまえ、「反戦・平和」が叫ばれたのもこの時期である。1951 年春の京大文化祭では、医学部から出品された原爆症患者の実物標本の展示や講演会が深い印象をもたらした。これがきっかけで開かれた原爆展の「原爆の図」が反響を呼び、全国的な原水爆禁止運動に発展した。学園新聞紙上でも主要なテーマとなり、51 年 8 月 1 日号で 1 面に特集を掲載したほか、学内外の教員や国外の反応をたびたび取り上げた。

### 京大天皇事件で思わぬ余波

学園新聞の宇治分校通信員・田中博(55 年文学部卒)は、1951 年 10 月 12 日朝、時計台西の編集室にいた。宇治で売った新聞代の納入を済ませると、取材陣に加えられ、正門付近へ向かった。このあと、関西巡幸的一幕から波紋を広げる「京大天皇事件」を目の当たりにすることになる。

田中らが待機していると、12 時半ごろ、百万遍から正門にかけて警官が数人おきに並び、正門と裏門が通行止めとなった。その後の経緯は 51 年 11 月 19 日号 1 面に記されている。

〈午後 1 時 20 分天皇は京大に到着した。京大学生、職員他約 2 千人は正門から正面玄関まで幾重にも列をつくって待っていたが、天皇が玄関に到着する瞬間、学生の中から『平和を守れ』の歌声がおこり、「スクラムをくむようにして御料車を中心に半円形に集まった」〈20 名ほどの警官は刻々増加され、2 時にはその数 500 名に達した〉〈それまで傍観していた学生も『警官帰れ』『俺たちの大学だ』と口々に叫んでスクラムに入り、その数は約 1800 に達した。2 時 12 分、天皇は予定より少し遅れて玄関に出、ちょっと会釈してそのまま乗車、車は急スピードで学外へ出て行った〉

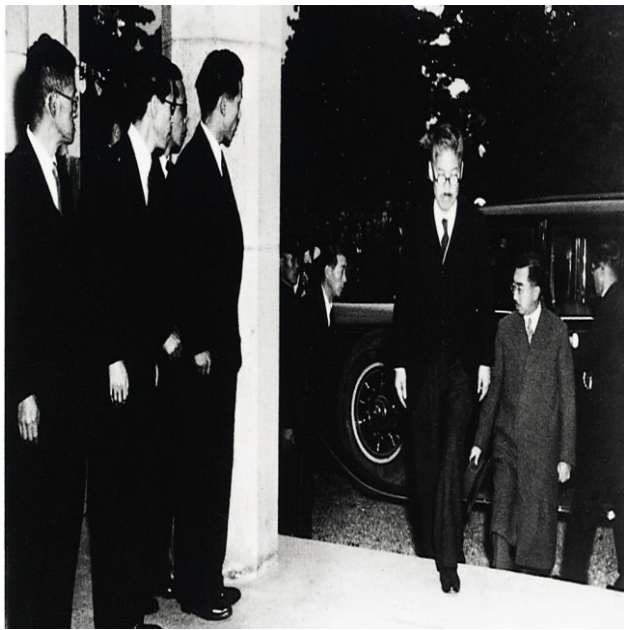
50 分ほどのできごとで、逮捕者もケガ人も出なかったが、余波は大きかった。一般各紙が報じたほか、ニューヨークタイムズが 1 面で「日本の近代史上かつてない無秩序なデモ」などと伝えた。

「事件」の翌日には、衆議院文教委員会で天野文部大臣がこの件に言及し、国会で審議中の大学管理法案をめぐる答弁のなかで大臣権限の強化を示唆した。15 日には京大当局が同学会に解散命令を出した。

世間の反応も厳しいものだった。学園新聞は 51 年 12 月 3 日号で「国民はこのように見る」という投書特集を組んだ。「処分を止めて」／「学生たちに声援を送る」といった意見は少数派で、「京大を廃校にせよ」／「右傾派の潮流に名分を与える愚挙」と学生らを批判する声が目立った。京大当局は、紙面にみられた一連の意見をふまえたうえで対応を決定したという。

学園新聞は 52 年 1 月 1 日号で「嵐に立つ大学の自治」と題した特集を組み、立命館大総長らの論説と並べて学生の寄稿を掲載した。〈声高く叫ぶ必要があるときに沈黙したり(中略)しがちな私たちの弱点に眼を向けぬかぎり、自治を守るたたかいは、つねに敗北に終る〉との懸念をつづったその学生は、「事件」の前に天皇への公開質問状を起草した人物である。戦争拒否の可否などを尋ねる内容で、同学会が提出を試みたものの、大学当局に取り次ぎを拒否された。なお、同学会の再建は 1953 年まで待たねばならなかった。





「事件」の日の昭和天皇（京都大学大学文書館所蔵）

### キャンパスの壁を越えたルポ

サンフランシスコ講和条約が発効したのが1952年4月28日。その3日後、「血のメーデー事件」が起き、警官隊との衝突で千名規模の死傷者が出た。吹田や大須でも火炎ビンが火を噴き、7月には破壊活動防止法が公布された。翌53年には内灘や砂川で米軍基地反対闘争が起こり、運動が全国各地へと広がる。学園新聞では、「講和への意向を問う」といった記事で論壇を提供したほか、「血の東京メーデー：乱闘の2時間を目撃して」と題したルポ記事で騒擾を報じている。

そして52年11月、京都で荒神橋事件が起きる。「学園復興」の集会に合流しようとした京大、同志社大などの学生約150人と、阻止を図った警官隊が鴨川の荒神橋上で衝突。木造の欄干が壊れて13人が河原に転落し、重軽傷を

負った。学園新聞は11月16日号の1面トップで詳報した。

学生運動がキャンパスの壁を越えるのに応じて、学園新聞の編集部員も行動半径を広げ、3号にわたるルポ記事「内灘を歩いて」などで運動の伝播を発信した。

この時期、学園新聞の編集室は3回移転した。天皇事件を報じたころの時計台西・赤レンガ造りの2階から、すぐ北の木造平屋の一室に仮住まいする。次に、西部構内テニスコートの奥にあった運動部の用具庫として使われていた部屋へ移った。53年には、西部講堂の手前北側に木造2階の学生団体用の建物が新築され、そこに入った。

西部の小屋時代は、経済的に苦しい時期となった。京大を越え関西の学園を網羅しようという発刊当時の理想と経営戦略が、すでに通用しなくなっていた。加えて言論界では、51年の出版用紙の統制撤廃により新しい雑誌が次々と現れた。学園新聞の販売部数は低落の道をたどり、広告収入も振るわなかった。

しかし、編集部の士気は盛んだった。破壊活動防止法をめぐる議論などの政治・経済の話題と、映画・演劇・文学などの記事が同居する紙面をつくり続けた。大学にも同学会にも属さない「独立採算制」にこだわり、政党や各種団体を含めて「いかなる勢力のひもつきになってもいけない」という原点が編集部に確立されていた。当時在籍していた者は編集会議の雰囲気について、盛んに議論していたと口を揃える。様々な闘争に向き合い、素朴な疑問から会議が空転することもあった。「書きたがり」が多く、社説にあたる「学園評論」のほか、現在まで続くコラム「黒板」、雑多な話題を取り上げる「道祖神」をめぐっては、テーマや執筆者選びで白熱したという。よく載せていたルポ記事も執筆希望者が多く、旅費が支給されるとあって取り合いになった。前述のとおり政治関連のルポのほか、伊勢神宮を参拝した〈お伊勢さんー神様と民主主義〉、映画の撮影地を訪れた〈足摺岬ロケ随行記〉など、趣味が反映された記事も見られた。学生生活や学術研究を伝える記事にも紙面を割いた。

### 「受験産業のはしり」で潤う

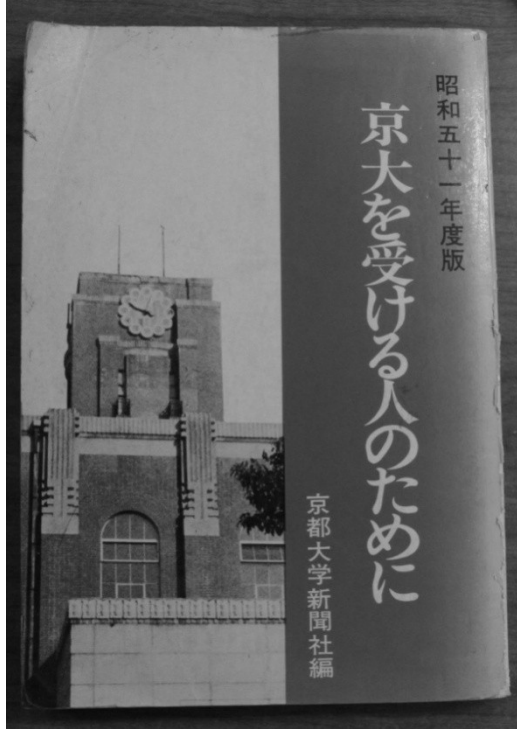
1954年からの「神武景気」で、日本は戦後の復興から高度経済成長への助走を始めた。国民の経済状況が劇的に改善し、白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫がよく売れた。学園新聞の紙面を見ると、三種の神器と呼ばれたそれらの家電の広告が載っている。このころ、映画会社・予備校などからも広告を得られるようになったほか、京大新聞社として企画・編集した受験ガイドブック『京大を受ける人のために』（1952年～）の売れ行きもよかった。

なお、これに先立つ「副業」として、49年の入試から合格電報を始めている。当時、市外電話は交換手が手をつなぐ待時方式で、数十分待ちも珍しくなかった。確実かつ速く伝えられる手段が電報だった。受験生の合否を本人に代わって編集員が確認し、郵便局から即時伝達するサービスで、千人以上の申し込みを受けて数万円の収入になったという。のちに全国でダイヤル通話が可能になり、大手予備校が合格通知サービスを始めたこともあって廃止した。代わりに手がけた受験ガイドブックは、当初の数十頁の小冊子から55年度には300頁の書籍に成長した。入試問題の傾向分析などを収録した専門雑誌として、「受験産業のはしり」と言えるアイ



デアだった。その後、受験ビジネスが一大産業化し、70年代に商業出版社へ売り渡した。

55年ごろに経理面の苦境を脱した折に、それまで滞っていた原稿料を清算することになった。卒業生のメモによると、この時点で不払いの執筆者がのべ200人以上いたという。膨大な数で支払いきれないということで、顧問の入山が伝・牧谿の『柿図』の複製を京都の美術印刷所につくらせ、詫び状を添えて各執筆者に届けた。1955年晩秋、入山が65歳を機に京大新聞社の常任顧問を退いた。当時の編集員は、学生だけで経理を見ることになる緊張感を覚えたと振り返っている。なお、この年の決算は、収入・支出ともに約159万円（収入：新聞売り上げ約51万円、広告収入約93万円など／支出：印刷代約97万、編集員に支払う「奨学金」29万円など）で、1514円の黒字だったという。



『京大を受けるために』（画像は1976年版）

### 激論の末、スト回避の意思表示

学内では1955年6月、「創立記念祭事件」が起きた。開放的な祭を目指してフォークダンスなどを催そうとする同学会と、「厳粛に学内関係だけで行う」とする滝川総長が対立。交渉時に学生から暴行を受けたとして総長が警官を学内に導入し、学生2人が逮捕され、同学会が解散に追い込まれた。

米軍基地反対闘争が下火になるにつれて学生運動は、創立記念祭事件のような学内の騒動へエネルギーを向ける傾向が見られた。しかし、1957年になり、活力を取り戻す。各国の原水爆実験に反対する世論が高まるなか、全学連が各校にストを起こすよう呼びかけた。京大では同学会に代わって各学部自治会単位でクラス討議が進められ、吉田や宇治の分校ではスト突入必至という情勢となった。学園新聞として、紙面での意思表示をどうするか。このときの編集会議はもめにもめたという。深夜になっても結論が出ず、翌日も、その翌日の原稿締め切り前夜になっても意見がまとまらない。13人の出席者は、次のような議論を交わしたという。

「学生の動きが社会の動きになり、歴史を変えた例は多い」

「原水爆禁止の世論の盛り上がった今がそのときだ」

「京大ではストが禁止されている。悪法といえども法だ」

「学生自治こそ優先。悪法撤廃には実力行動が必要だ」

「処分者が出る。同学会再建の見通しも立たない」

「学園新聞としての意思表示を避けるのか」

「われわれの討論結果を知らさねばならない」

「採決でもいいか」

「やむをえない」

結果は7対6の1票差で「スト回避」。57年10月28日号の学園新聞の見出しは、「ストライキは避けよう：11・1国際統一行動デーに望む」となった。ストの意義を認めつつ、50年の反レッド・パージ闘争時に出示された「スト禁止告示」が生きており、強行すれば大量の処分者が出ると指摘した。出席者の一人は、「徹底した討論のあとであり、何ら不満が残らなかった」と回想している。

結局、ストは回避された。当日は2千人が集会やデモに参加し、吉田・宇治の両分校は実質的に授業放棄の様相を呈した。このあと京大の学生運動は、勤務評定阻止、警職法反対などをめぐって積極的な動きを見せ、60年安保闘争につながっていく。なお、同学会は解散から4年後の59年5月に再建された。この間、学園新聞は学生運動について、「一般学生から遊離した運動にならぬよう」「一般学生は注目を」という趣旨の呼びかけを繰り返した。また、ルポ記事では55、56年に砂川、内灘、沖縄へ取材に行っている。58年には教育関係のルポも増えた。

### 『京都大学新聞』へ改題

1959年、学園新聞が大きな節目を迎える。世の中は神武景気後の不況を脱し、岩戸景気へ向けて好況だったが、京大新聞社の財政は苦しかった。大阪の印刷所には借金があり、前号分の印刷代を支払ってようやく

次の号が刷られるという自転車操業だった。苦境を脱するため、①紙面を12頁に増量②懸賞小説の募集③「京都大学新聞」への改題④社史の編纂⑤東京、京都での祝賀会開催の5項目を実行することに決めた。懸賞小説の選者は伊藤整と野間宏に依頼し、1位1万円、2位5千円を掲げた。大卒初任給が約1万5千円の時代に、苦しい台所事情をふまえると大奮発と言えた。社史編纂は、結局この時点では日の目をみなかった。用紙配給の都合で「関西一円」を掲げていた終戦直後から10年が経過し、立命館大学など周辺の大学ですでに学生新聞の復刊が実現していた。読者層も紙面の内容も「京都大学の新聞」になっていた。それでも改題は簡単な決断ではなく、入山に相談したうえで、卒業生にアンケートを実施したという。学園新聞の理想を大切にすべきという旨の反対意見も出たものの、「改題やむなし」の声が大勢を占め、理解を得た。大学当局との打ち合わせでは、改題自体は受け入れられたが、「新聞社」の紛らわしさを指摘されたため、「学生団体」と明記することにした。こうして名実ともに「京都大学新聞」となり、新たなスタートを切った。

## 聞き取り①『学園新聞』の理念と実情 1950年代在籍者に聞く

1950年代の学園新聞および京都大学新聞への改題について、当時を知る8名に話を聞くことができた。1946年の発刊時に掲げた「関西一円」の学園を対象とするという理念や、65周年記念書籍のタイトルにもなっている「権力にアカンベエ」という考え方について、在籍当時どう捉えていたのか。いま振り返ってどう感じるのか。また、現在とは異なる新聞制作の一コマや、通史では拾いきれない一人ひとりの思い出を、級友との会話を通して回想してもらった。以下では、福知山・東京・京都の3回にわたって実施した聞き取りの様子を掲載する。(聞き手 村・爽)

### ▼ご協力いただいた8名と聞き取り日時

芦田文夫氏(53-57年)

吉田忠文氏(53-57年)

2023年11月1日

@ホテルロイヤルヒル福知山&スパ

齊藤正学氏(52-56年)

梶宏氏(54-58年)

祖田修氏(59-63年)

2023年12月10日

@京大西部共用室

久野義治氏(52-56年)

野原明氏(54-58年)

緒林康孝氏(59-63年)

2023年11月4日

@京大東京オフィス

3回の聞き取りはいずれも、宇治分校にタイムスリップするところから始まった。当時1回生は宇治分校で学んだ。吉田氏は宇治分校について、「目の前に保安隊(現・自衛隊)の補給廠があった。鉄条網のすぐ向こうでは自分と同じ年代の若者が訓練している。彼らも状況が許せば勉強したかったのだろうかと、複雑な思いがした」と振り返る。



宇治分校の掲示板前に集まる学生(京都大学大学文書館所蔵)

## 「やむを得ざる便法」で掲げた「関西一円」の理念、改題は「必然」

### 入社の動機

格差感じ、「世の中を変えたい」

久野 2回生になり金銭・学業面の目処が立ち、熟考して記者になろうと思った。

野原 小中高で新聞部。家が貧しく学校で格差を感じ、世の中を変えたいと思った。政治家は金がかかる。ジ

ジャーナリストになって社会に影響を与えたいと思った。

**緒林** ジャーナリズムに興味があった。同士の先端的な議論にふれ、記者就職は断念した。

---

**斉藤** 高校で生徒会新聞。受験から解放され何かしたいと思った。

**梶** 評論家的人間で社会への関心が強かった。新聞社の空気感が性に合った。

**祖田** 実家が農家で馬を飼っており、馬術部も考えたが、当時宇治分校にいた1回生の勧誘に来ていた岡崎満義さんという先輩から話を聞き、故郷に近い縁もあり、興味を持った。

---

**芦田** 新聞社でもらえる奨学金に目をつけた友人が、僕と吉田くんを誘った。面接を受けたら、友人は工学部だから忙しいという理由で不採用だった。後に映画監督になる森崎東さんという先輩が誰をも引きつける人柄で、彼の出身の旧制高校のような雰囲気 of 4年間を過ごした。自分が採用する側のときは、こいつは何かやりそうというおもしろみや覇気のある人を選んだ。

### 会議の雰囲気

怒号だった／自由に発言できた 歳の離れた復員の先輩もいた

**斉藤** 新制と旧制の学生が混ざっていた。旧制の人が学徒出陣を経て再入学する時期で、学園新聞にもいた。その中に僕らが入ると子ども扱い。年齢が4つ5つ違うし、軍隊で揉まれた強さがある。会議ではまず発行したばかりの新聞を見て反省会をやって、次の号の話をする。メインテーマを定めて、各面の構成を考えて。週刊だから大変だったね。

---

**久野** 怒号だった。やっつけるような。

**野原** 間違えれば総攻撃されるけど、自由に発言できた。執筆者を決めて要旨を発表させ、「それは違う」などと議論した。

**緒林** 言いたいことを言い合い、納得して結論を出す雰囲気だった。宇治分校の1回生は会議に呼ばれず。

---

**吉田** 熱心に議論して、学園評論とか黒板の内容で意見を一致させる。決まったら従う。真剣勝負だね。

**芦田** ものすごかった。誰が書くかも議論。

**吉田** 書きたい人がずいぶんいたからね。

**芦田** 議論して疲れて、みんなで安い酒を飲みに行く。

### 取材・執筆・寄稿

雑誌を読んで寄稿を依頼

**芦田** 荒神橋事件が印象的。「集団の中に入ったらあかんぞ」と注意され取材に行った。

**吉田** 研究室に行って、いろんな人に原稿を書いてもらった。湯川秀樹さんとか木原均さんとか。話を聞きに行くと、わかりやすく説明してくれた。「話すから書け」と言われて記事にすることもあった。

**芦田** 経済学の堀江栄一先生の自宅に行くと、「よう来たな」とこたつに入れてくれて、学問の動向をしゃべってくれる。すごくおもしろかった。そこで聞いた話を試験で書くと、いい成績が出た。

---

**野原** 学外の教員からも寄稿をもらった。滝川総長に「全分野で京大にいい先生がいるのになぜわざわざ」と言われ、「視野が狭い」と言い返したね。

**久野** あのところは『世界』や『中央公論』、『改造』を待ちかねて読んだ。いい原稿を見つけると、著者を訪ねて「京大新聞に合うテーマを立てて書いてほしい」と頼む。そのために編集会議を通せるように一席ぶつ。この繰り返し。

---

**祖田** 宇治分校時代、一度だけ記事を書かせてもらった。宇治で赤痢が発生したというニュースで原稿用紙1枚ほど。自分の書いたものが活字になるのは初めてで、嬉しくて何回も読んだ。

**梶** 京大というより社会の底辺を見ようという考えで、ルポをよく書いた。西陣織の家内工業などを取材した。社会の階層があると実感した。

**斉藤** いま思えば、社会の先端を進んでいるつもりでも、一般の学生や他の大学から見ると浮き上がって、一部の人がやっているという見方だったと思う。どこまで支持されていたか。

### 割付・印刷

印刷所で仕上げも

吉田 印刷所は京都新聞→都新聞→大阪の高速輪転と移った。

芦田 一字ずつ活字を拾ってつくった紙型に、鉛を流し板を作る。それを回転させて印刷する。

---

野原 原稿を持って印刷所に行って割付作業の「大組」に立ち会う。時間がないときはその場で原稿を書き上げて工場の人に一枚ずつ渡した。日曜に印刷、月曜の朝に届いてすぐ販売した。

入山雄一氏

編集には関与せず

祖田 卒業後、入山さんから養子になってもらえないかと言われた。約束はできないと伝えたうえで1年ほど一緒に過ごした。私が結婚して入山家を継ぐ話は消えた。入山さんは社史を書きたいとおっしゃって、数人で分担して各年代を調べたけど、ついに世に出なかった。年齢もあり、気力が薄れたのかもしれない。

---

久野 僕らのころには編集会議では何もおっしゃらなかった。できた紙面について感想を言われた。見出しの助詞を注意された記憶がある。それ以来、文章をつくるときに気をつかうようになった。当時は赤字で、入山さんが個人の信用でお金を都合してくださったこともあった。

緒林 僕らのときも編集には関与されない。年に1、2回ほど、昔話を聞かせてくれた。創刊の経緯とか滝川事件とか。

野原 夏に祇園の床に連れて行ってくれた。貴重な経験。

役職

芦田 編集長はみんなの議論をまとめる。どんな記事を書くかはみんなで議論をする。主幹は経営の中心となる人物。

吉田 編集長の勝手にできるわけではないし、また編集長から押しつけるわけでもないし。

芦田 それがいいところだった。

『京都大学新聞』への改題

独特の懐かしさ、『学園』へのこだわりも 有名無実化、変える必然性あった

斉藤 用紙割当の経緯があって、学園新聞は京大だけのものではないという意識でやっていて、京都女子大や奈良女子大、同志社とかへ売りに行くんだけど、実際にはなかなか受け入れてもらえなかった。僕らの先輩が広い学生を対象とするという考え方で学園新聞としたわけだけど、長続きしなくて。発刊当初の考えとは違ってしまったから、。

梶 変える必然性はあったね。

---

吉田 いろんな大学に売りに行った。各大学に通信員がいて。

芦田 すでに京大だけの新聞だったね。立命館とか他の大学でも用紙が渡って新聞が出るようになっていたから。

---

野原 理念は知っていたけど…

久野 ほとんど有名無実だった。

緒林 僕はこだわりがなくて、京都大学の新聞だから京都大学新聞でいいだろうと考えた。

野原 僕らは「学園、学園」と言っていたから、やはり「学園新聞」という名前にこだわりをもっていたね。改題を聞いて「なんで」という気持ちも少しあったな。

久野 独特の懐かしさがあるよね。「新聞」まで言わずに「学園」と呼んだね。ただ、「学園新聞」としたこと自体、やむを得ざる便法だったわけだから、本来は京都大学新聞でありたかったはず。改題は時間の問題だった。

「権力にアカンベエ」の感覚

人生観を貫く基本的な考え方 戦前の感覚／少し違った部分も

久野 社会に対して京大新聞が取ってきた姿勢が一言で表されている。

緒林 僕はノンポリ学生で、しかも広告取り中心だから編集経験の重みは違うけど、正義感ももっていた。僕らのひとつ上は、教科書に墨を塗って使った学年。鬼畜米英から民主主義万歳へ転じる経験をしている。一方で僕らは、その直後に小学校に入って、はじめから戦後民主主義の教育を受けてきた。世の中は平等で、お

かしいことにおかしいと言うべきだと。そういうスタイルに魅力を感じる連中が京大に行くという風潮があったと思う。だから「権力にアカンベエ」という言葉はぴったり。過度な一般化はよくないけど、僕らの世代の人生観として一本貫かれているものだと思う。

**野原** 僕は緒林さんの言う墨塗りの世代だね。小学校4年のとき集団疎開に行って、忘れもしない8月15日、役所の庭に行ってラジオを聞かされた。何を言っているか分からなかったけど、終わって疎開先のお寺に帰ったら先生が、戦争に負けたと。「日本が間違っていた。アメリカやイギリスは民主主義で素晴らしい国だ」という話をされた。昨日まで打倒米英と言っていたのに。僕はその瞬間から教師は信用できないと思った。だからみんなに言った。泣かなくていいよと。戦争が終わったから帰れるんだと。

---

**梶** これを書名にしたのはなかなかいいアイデアだった。

**祖田** 京大新聞の基本的な視点だと思う。社会問題を学生としてしっかり受け止めるという意味合いが込められている。

**梶** そうだね。政治団体が人を送り込もうとする動きもあったけど、そういう思想に関係なく自由な雰囲気で行っていた。

**斉藤** 僕らは権力に逆らうばかり。「アカンベエ」は入山さんの感覚だな。僕はそこに対しても逆らう意識があったから、「入山さんはそういう考え方なんだな」と考えることもあった。

---

**芦田** 独立採算で、どこにも属さないという「学園イズム」が確立したのが僕らのころ。それまでは、あれだけひどいレッドパージだとか朝鮮戦争だとかを経験すると、学生が左翼的になるのも当然だった。それをしのいで、運動のやり方も落ち着いて、外へ出ていた学生もみんな帰ってきて、文化運動を幅広くやるようになった。「権力にアカンベエ」は戦前の感覚で、それとは少し違ったかもしれない。

**吉田** 私は主幹として、独立採算を守れなければ学園新聞に価値はないと思っていた。

#### 合格電報

**吉田** 遠方の人などへ、代わりに編集員が可否を見て伝える。間違ったら大変だね。

**芦田** 各学部が合格者名簿をくれて、合格はサクラサク、不合格はサクラチルと電報を打つ。左京電報局と話をつけて、あらかじめ住所と名前は打っておく。家に電話がない時代で、申し込みはたくさんあって電報局も儲かっただろうね。





今も部室にある宣伝のぼり

#### 販売・広告・経営

唯一の情報源でよく売れた

齊藤 教員用のバスに載せてもらって新聞を宇治まで運んだ。箱に置いたり、昼休みに机を出して立ち売りしたり。

祖田 当時は情報源が少ない。宇治分校生のほとんどは、お金がなくて一般紙を取らないし、安価な学園新聞は唯一の情報源。宇治でよく売れた。

梶 活字に飢えた時代は採算がとれたけど、だんだん売れなくなり、広告で保った。名刺風の社名広告とか。教員から紹介状を得て営業に行った。

齊藤 広告代理店を通じて1面の書籍広告を載せた。その有無で格が違ってくる。入山さんの人脈で円滑にやれた。

吉田 朝鮮特需のころ書籍広告が増えた。岩波書店がよく協力してくれた。学生文化誌としての側面を評価してくれていたと思う。大学や自治会の言いなりにならず、学生運動・学術・芸術・映画と幅広い紙面づくりで。

芦田 進学率向上に伴い予備校の広告も増えた。広告と『京大を受ける人のために』の収入で赤字を黒字に転じた。それまでは赤字も構わないという風潮さえあったと思う。

吉田 経営問題は重要。他大学で売れなくなって、広告をとる努力をした。京大周辺の食堂からの小さな広告も大切にした。

緒林 営業で大阪に行った。御堂筋をぐるっと回ると1日で5つほど広告をとれたね。

野原 就職関係や書籍の広告が多かった。効果があると思われていたんじゃないかな。

久野 当時は学生がよく本を読んだからな。

野原 新聞を書店で売った。あとは箱に入れて各学部の教室の入口に置く。20～30 か所あった。

## 拾い読み⑤「時事」の話題 広く紙面に 学生生活から反戦運動まで

### 8年間の紙面概要(1950-57)

今回の「拾い読み」では、1950年1月から57年12月までを掲載する。この8年間は、週間発行で号外1号を含む計334号を積み重ねた。

原則2頁で、4頁以上の号もだんだん増えた。寄稿のほか座談会やルポルタージュが目立つ。座談会では教員や学生、新聞記者、映画監督、詩人、本紙編集員らの議論が収録された。アンケート調査もたびたび実施しており、学生処分や原水爆反対運動など、時事の話題を尋ねている。宇治分校での「世論調査」では数百枚の回答を得たという。かつて毎号あったスポーツ記事は大きく減った。投書欄は健在で、言及された個人や部署が後日号で反論を投稿するといった紙上での意見交換もある。

広告は書籍が毎号数多く載る。他にも一般紙や鉄道、メーカー、百貨店、劇場、大学近辺の飲食店やお土産屋などがある。予備校の広告が年々増え、59年3月23日号には27校載っている。紙面でも入試傾向の分析記事が増えた。以下、実際の紙面から記述を抜粋する。

| 『京都大学新聞縮刷版』(不二出版)をもとに作成 | 1957            | 1956            | 1955                   | 1954            | 1953                      | 1952          | 1951            | 1950           | 年    |
|-------------------------|-----------------|-----------------|------------------------|-----------------|---------------------------|---------------|-----------------|----------------|------|
|                         | 6<br>生活協同組合となる  | 10<br>日本国際連合に加盟 | 6<br>停学処分              | 3<br>第5福電丸被災    | 11<br>荒神橋事件               | 5<br>京大スト     | 9<br>条約締結       | 5<br>宇治分校開校    | できごと |
|                         | 1<br>原水爆反対運動高まる | 6<br>新校舎へ移る     | 5<br>大学、同学会のメーデー前夜祭を禁止 | 6<br>同学会 水爆展を主催 | 6<br>府学連集会を強行<br>警察官学内に入る | 6<br>同学会再建される | 1<br>記事が京大中心になる | 2<br>最後の旧制大学入試 |      |
|                         |                 |                 |                        |                 |                           |               |                 | 1<br>値上げ・段増加   |      |

### 1950年

新聞社▼購読料、年300円に▼投稿復活→政治・文化の論文や、ルポ・文芸を募り薄謝進呈▼合否電報：至急報70円、普通報40円▼創刊4周年記念行事：社告持参で映画無料招待／懸賞論文募集「平和擁護と学生運動」・「対日講和」→入賞作品なしと発表▼各高校新聞から通信員募集▼業務部員、販売員募集→在学生若干名▼学生新聞界の展望：学校当局の言論干渉／加盟校200超の全学新を通じて自由発行へ▼全学新新聞コンクール：審査員は一般紙各社代表→1位学園、2位東大、3位早大で、一橋、三田、同志社、法政、龍谷と続く▼200号記念：フランス映画鑑賞会・書評コンクール→特賞2千円▼本社通信員会議：今後の方針を懇談→通信員から不満も 時事▼共産党政治局員寄稿▼講和への意向を問う：法経工の学部長ら▼アンケート：憲法は守られているか→東大・京大・早稲田教授、読売新聞社長、詩人、声楽家▼京大平和擁護委、一日で街頭署名2500筆▼金閣炎上に思う：京大観光研究会員▼よみがえる傷痕→絵画「八月六日」▼ゴシップ：首相官邸で記者が人文研所長を撮影、夕刊紙に「湯川博士官邸へ」と誤掲載▼ルポ：共産部落→制度徹底、私有物は歯ブラシのみ▼ルポ：台風下に漁村を訪う 教育研究▼原子力と水素爆弾、平和的利用へ：京大教授▼軍事基地化反対：原子物理学者声明▼注目の前頭葉切截術、学会で報告▼天気予報の苦しさ▼酢酸の新合成法▼京大教授が新星大根生む▼対馬の旅から：文学部教授談、日本語が与えた影響▼湯川博士帰国談：外国の学生新聞は「立派で日本の日刊紙以上」▼死体不足に泣く京大医学部▼大宅壮一：西園寺死後10年▼京大ヘトラクター寄贈 大学運営▼推進(投書)：政治活動の制限、大学側は神経質▼痛い電気料値上げ、悲鳴をあげる京大各研究室▼各科目の入試傾向の分析▼学生控室竣工▼本のない図書館？宇治分校▼京大図書館拡充へ：利用率も戦後最高▼鳥海学長、米より帰学：更生施設完備に驚嘆▼学生健保、今秋発足へ：製薬会社らが寄付▼補導部長、映画座談会も禁止：元松竹監督を招待、「外部から問題に

なっている人を招くのは政治活動」▼緊迫の10日間:レットページ粉碎抗議▼学術会議「学問の自由に不安」▼「ストは学内秩序錯乱」:文部次官一問一答→本紙記者が訪問▼京府医大、全員復学なるか:教授公判へ▼宇治分校開校→寄宿問題で非難の声も▼東北大事件、学生処分決定▼広島大に平和研究所▼東大、アカ学生は奨学金停止へ 学生▼発足した新制京大自治会、新同学会入り可決▼「先輩サロン」→日銀支店長／京福電鉄社長／指揮者:朝比奈隆／京都市長▼就職戦線8銀行が回答→採否の鍵は面接態度／アカはダメ▼育英会、取得科目の少ない者に注意喚起→「黒板」:なるべく穏当に扱って▼映画館実現か:西部構内籠球部を劇場に→予算123万で竣工へ▼京大親学会好評:中高生の学習指導▼「推進」:衣類無償配給の対象者選定に不満→翌号の同欄で学生課が回答:数量少なくやむを得ない▼推進:生協食堂の改善を／分校の学生掛が不親切▼編集部主催、分校教授・学生の座談会:新制京大一年を顧る▼メーデー学生2千参加▼夜間学生、続出する退学▼阪大学生、『わだつみの声』をエスプラントに翻訳 文化▼栄える戦前文学▼仏映画の典型美▼映画評「白雪姫」▼映画界追放裏話▼歌舞伎役者寄稿 広告▼学園新聞編『新制大学案内』▼ニューヨークタイムズ国際版▼タイプライター修理



メーデーの様子 1950年5月8日

編集権の自由を(157号(1950年1月30日))

本社、公認学内団体へ→全国最大の学生新聞として現在に至る／1月23日正式に独立の京大公認学内団体となり同学会同様取扱を受けることとなった／「学生の自主的編集の精神」以下22条に上る本社社規も承認された／学生課長談:学内団体になったからといって弾圧するものではない、編集権の自由は社規にも明確にされている

社告:創刊4周年に寄す(168・169号(1950年4月17日))

今や名実ともに全国唯一の週間学生新聞として堅実な歩みが続け得ることはわれわれの欣快の至りである／昨年11月より月一回4頁制を断行し、多大の成果を収めてきた／独立採算制を維持し、学内における編集権の自由は確立／まだまだ多くの問題を残していることは甚だ遺憾／迅速正確なる、真実公正の報道に努め、平和を愛する読者諸氏と固く手をとりあつてともに日本民主化、学問文化水準向上のため、苦難の道を歩まんことを誓う

創刊200号に際して(200=通算578号(1950年11月13日))

敗戦直後「京都帝国大学新聞」の後身としていちはやく産声をあげた／前身「京都帝国大学新聞」は、軍国主義のあらしによく良心の灯を守りつづけながら、スタッフを次々と戦争に奪いさられて、ついに停刊したというつくりけれども、悲しい歴史をもっている／この抵抗が読者にふかく根を下して活動からこそ生れたものであった／「学園新聞」がいままでいろいろの困難にうちかつて生きぬいて来ることができたのも、読者のみなさまのつねに変わらぬご叱正によるものであった／わたしたちの今後進んで行くべき道もここにある

創刊200号に寄せて(200=通算578号(1950年11月13日))

入山雄一氏寄稿:やがて帝国大学の「帝国」は消えてしまうだろうから、われらははじめてから京都大学新聞社で行こうと決まった／同学会も名実ともに学生の手につるであろうから(中略)すべてを学生自身のものとする建前をとった／不幸な運命に対して如何になすべきかという課題も、今は一応タナあげにしてよかりそうだ

1951年

新聞社▼583号より号表記に／1段16字詰15段制へ▼入試書類選考の有無を電報で通知▼創刊600号記念:学生寄稿募集「学生新聞のあり方」▼本社調査部の憲法等世論調査は、補導部当局から学内規定に触れるとの疑義を向けられ延期→翌月掲載:再軍備に8割が人権侵害訴え▼編集員募集→希望者は作文(題「時計台」)持参 時事▼改選後初の学術会議:再軍備反対延期▼疑われる英国の『善意』▼アカ追放の簡素化:教育公務員特例法成立す▼貧困に悩む国々→ユーゴほか▼私は講和をこう見る:立命館・大阪市大の学長、住職、京都市教育委員、同学会委員長ら▼製作の言葉:総合原爆展特集 教育研究▼チタニウム抽出成功▼宇治茶田荒廃の原因を発見▼農学部が病院に:人さわがせな映画ロケ 大学運営▼補導機構改革問題、学生の意向重視▼電力危機解消:学内の割当増加▼京大燃料化学教室全焼→教務が紙面で呼びかけ「事

務に支障ないからご安心を」▼学内集会規定を施行:団体結成規程も▼学費滞納者を近く除籍か▼新制京大、地方から3年への転入学可へ▼学内掲示規定成文化→掲示や立看板の大きさを制限▼京大・目立つ転学志望:問題視される縦割制▼予備隊が宇治に駐屯→運動場予定地の接收に不満▼各大学に健康相談所:文部省、結核予防に対策▼旧防空壕を利用:由良に地下地震観測所▼大学、原爆展を禁止 学生▼京大にも琉球留学生▼学生に給食を:京大保健診療所が警告▼京大入試に関わった教授と学生の座談会▼新制京大、近畿出身5割▼学生相撲、ハワイへ派遣→渡航費捻出のため石鹸売り出し▼推進:西門の開門時間のばして▼京大女子学生座談会:女のくせになぜ法学部へと言われた／女子寮をつくって▼「君が代」をかきけす平和の歌:京大行幸に警官隊500／学生2千、平和を守れと合唱▼同学会に解散命令下る:「弾圧は許さぬ」自治会連合会議決議▼一橋大学国立町寮の防空演習、「演習に協力せよ」と「消すな平和の灯を」のビラ合戦▼仮装行列に警官、わきかえる龍谷大▼暴力をふるうほかない:龍大新聞社解散要求で紛糾 文化▼東西対抗ラグビー:関西はなぜ弱いのか▼ベストセラーから国民心理は分からね:日本出版協会事務局長 広告▼学生募集→大阪経済、神戸市外国語、京都薬科ほか▼鉄道(阪急・京阪・近鉄)▼新聞(朝日・日経・毎日)▼葵書房開店▼ラジオ機器▼武田薬品▼進々堂▼高島屋秋のモードコレクション▼大丸▼伊藤忠▼サンスター▼島津製作所▼井筒八つ橋▼京大中央食堂完成新聞社



教授を囲む放談会 1951年9月24日

1952年

新聞社▼コラム「道祖神」廃止▼はがきアンケート「今年の夢」▼1月14日より値上げ:2頁8円、4頁15円、年350円▼創刊7周年に寄せる:名実ともに全国における最大の学生文化紙を誇れるようになった／中正な立場・真実を報道の使命を守る／新しい企画を増やし、日夜頑張る▼2回生→編集員、1回生→通信員を募集、前者のみ作文課す▼出版物取次店大阪屋と契約▼医理農の各所で販売開始:15か所列挙▼学生からの遊離を反省:第5回全学生新聞連盟大会 時事▼学園の赤追放本格化▼国立大授業料値上げ:米軍駐留予算をふまえ「その百分の一を回せば値上げしなくて済む」と指摘▼日本経済の動向:大阪銀行頭取ら寄稿▼電力値上げ公聴会:大阪の事務局を訪ねた▼新聞記者座談会:都、朝日、毎日、読売の記者▼乱闘の2時間:ルポ、血の東京メーデー▼学園評論:破防法と自治→我々は戦争は絶対にイヤ／教授会も学生も立ち上がらなくてはならない▼京大教官に破防法でアンケート▼

破防法でもめる参議院:議員寄稿▼私はかく公約する:5大政党代表者回答 教育研究▼死刑廃止は時間の問題:滝川幸辰▼結核新薬と死亡率 大学運営▼私学に値上げの嵐:国庫補助獲得へ活発化▼東大文、テーポコーダー買入▼京大法に警官、官費で聴講生を受験▼またも私服警官:学長「自治擁護に職賭す」▼京大、タバコで消える非常勤講師の給与▼総長が女子学生を軟禁:京都外大事件、警官隊ハリスト学生に実力行使▼学生部、学内各団体に要望:火災瓶事件をふまえ「学生を信頼している」「建物の管理に念を入れて」▼京大楽友会館発足:接收解除▼厚生課、市電定期値下げに動く:市内各大学に呼びかけ 学生▼八日市高校、新聞部に活動停止処分▼ルポ:女子大生は訴う▼「めーるりひと」:京大の玄関にある彫刻「雲」／死体保存室／新聞記者室▼ベル(投書):寄宿舍を建てよ／宇治食堂は高い▼黒板:学生保健所へ不満▼学生

投稿:学生運動の方向→ストはかえって権力を挑発する／憲法擁護の運動が成果を収めるよう祈る▼宇治分校世論調査:徴兵に抵抗49%／授業料6千円痛い60%▼京大山本君、陸上でヘルシンキ五輪へ 文化▼映画評:ドイツ零年→広告も掲載▼中国からの手紙:「わだつみの声」に涙流す▼京の近郊に行く 広告▼朝日放送▼シオノギ▼日本新薬:抽選で10万円▼近畿大学予備校▼住友金属▼新三菱重工▼いすゞ自動車▼神戸製鋼▼川崎重工▼京都寶塚劇場





## 1953 年

**新聞社**▼編集員・通信員募集▼営業部員募集:固定給月千円と歩合月 4 千円程度 **時事**▼内灘を歩いて:文 4 回生▼原爆記念日に全関西平和大会▼独立を失った裁判所:松川事件・三鷹事件被告寄稿▼被災の京大生 450 人:水害で開学以来の被害→月額 6 千円の学費補助 **教育研究**▼インドの教育と学生:85%が読み書き不可▼国際物理学会、オッペンハイマー氏講演▼財政を 2 割削る授業料:アフリカの基礎教育▼徴兵抵抗史 **大学運営**▼法学部ゼミ廃止決定:自治会は抗議▼西食拡張に署名千▼注目浴びる宗門大学:京都女子大／龍谷大▼学校の隣へ保安隊:桂高校、設置に反対▼生協書店で万引き相次ぐ▼警官隊京大校内に侵入:時計台前集会に学長が招請▼広がる抗議の勢力:血を呼んだ警察の暴力、学生石河原に転落→こくばん:また一つ京大の歴史に汚点 **学生**▼結核学生の寄稿▼ゴシップ:卒業憂う学生へ、体育教員「待っていますから話しに来て」▼各学部事務で聞いた新入生の印象▼競争率 4 倍:吉田学生寮入舎選抜▼京都で学生平和懇談会結成▼大学管理で全学投票:票少なければ同学会再建足踏み→服部学長は「規約草案に難点ない」「3 千票ほしい」→4500 名が賛成▼京大体育会発足▼秋季文化祭、11 月祭と命名→大学「名称認めない」▼学園復興会議:討議内容決まる▼京女大生、同学会活動始まる▼こくばん:西部広場前でラジオ京都が街頭録音→講義同様、発言を嫌う学生が多い▼新学長に望む:若い人の声を聞け▼ジョンズホプキンス大学教授から三田新聞編集員への手紙▼東京の荻窪高校で 19 名を退校処分:新聞発行停止→全学新が抗議文化▼京都市美術館日展評:美術史研究室生対談▼こくばん:ラジオの普及が目覚ましい▼座談会:独立プロを語る▼ルポ:お伊勢さん▼ローマ紀行▼歌舞伎を大衆に返せ:工織大教授 **広告**▼トーキー映写機 35 万円▼岡崎公園にスケートリンク完成▼ひらかたパーク▼広告論文電通賞公募▼明治ヨーグルト▼予備校(大阪・清風・日本・難波・浪速)▼新聞(朝毎産日)



ボックスの引越し 53 年 10 月 12 日

創刊 700 号を迎えて(700・701 号(1953 年 6 月 15 日))

新聞は正しき者の味方でなくてはならない／京都帝国大学新聞(中略)発刊の趣旨『自由の精神』は新しく独立した学園新聞に受け継がれた

## 1954 年

**新聞社**▼旧本部建物の取り壊し→西部構内西の建物に本社移転▼全受験生に新聞無料配布▼編集員募集:作文「最近特に感じたこと」課す▼京大新聞社主催、民族舞踊の集い▼懸賞写真募集・寸描:京大の学生生活 **時事**▼改憲めぐる政局の動向:参院議員▼市長選、同学会が候補 3 氏にアンケート▼緊縮財政の行方:成功の可能性は低い→証券会社取締役寄稿▼戦後反動立法の歩み▼水爆・汚職への憤り:響く 5 万余の平和の大合唱、統一メーデー▼水爆展に人波▼広島平和祭に湯川教授メッセージ「原水爆反対は日本人の義務」▼外国からの便り:イギリス、メキシコ→原水爆に激しい怒り▼学園評論:水爆展を盛り上げよう▼全員参加できるメーデーへ歌集発行▼平和をめぐる国際外交:力強いアジアの連帯感▼ルポ:西陣を訪ねて▼金融引き締めと京都の中小企業:京都市職員▼特集:農村の苦悩→村からの便り▼最高裁判決、学生選挙権ついに勝訴:府学連傘下各大学に通達▼医学部学生に朗報:市電途中下車を許可▼期待さるアジア・アフリカ会議▼「戦争か平和か」賭ける次期選挙 **教育研究**▼イタリアの日本研究家たち▼学園評論:航空科の設置が秘密に進むのは由々しい▼原子兵器の研究拒否:全国に先駆け京大で声明▼ソビエト原子力発電完成:気候を変えることも夢ではない▼自然科学者はかく訴える→自主的な研究を **大学運営**▼自治機構持たぬ百余名の分校教職員:京大の植民地との皮肉も▼電子工学科を新設▼西部講堂改築▼西部食堂改装▼新書庫など増改築進む▼学生課、創造座に立ち退き要求:西部講堂の管理強化か▼京大教養部新発足:教授会新設▼京大当局の自主性喪失を悲しむ:参議院文部専門員▼学園評論:分校を吉田に▼学生生活委員会、全学的厚生機関を設置▼宇治火薬所復活へ:市民に強い反対▼京大、試験場に同大・立大を借用 **学生**▼京大女子学生懇親会、総長と会見▼第 2 回全国女子学生大会「女だから」に憤り集中:北海道～九州の各大学・高校 128 校の

学生 800 人▼窮地に陥る学生生活：相次ぐ食費値上げと下宿難▼大学オーケストラ連合結成の動き▼京大女子寮、学生自主的に選考▼『女の園』その後：ルポ、京女大▼処分解除に見通し立たず：同学会執行部、学長と懇談▼荒神橋負傷学生、賠償を要求▼京大、ケンブリッジ大に勝つ：全日本に勝てば五輪▼座談会：帰郷活動に参加して／署名の力に疑問／結論の押しつけは禁物▼合唱コンクール近畿大会、京大制覇の公算大▼市民との交歓を禁止：学生部、11 月祭を大幅に制限／演劇脚本を検閲／「大学の品位を保つため」文化▼「映画は好きでもいい宣伝マンにはなれない」：映画館支配人寄稿▼国民文学論の現状を語る→桑原武夫・竹内好・中野重治▼渡部氏の書評に反論：経済学部院生→反論に答える：渡部助教授▼足摺岬ロケ随行記▼戦後揺籃期の生きる詩：詩人寄稿▼映画評：ロミオとジュリエット 広告▼劇場（花月、朝日会館、京極大映、京洛、文化会館、田園ニュース、藤和、北星、エンパイアニュース）▼雨がっぱ▼新聞（読朝毎産日／都／京都）▼大林組▼大力餅▼関西日仏会館▼京都百貨店協会（藤井大丸・丸物・大丸・高島屋）

映画ベストテン選出 54 年 1 月 11 日

増頁と値下げのおしらせ(755 号(1954 年 5 月 31 日))

名実ともに「日本一の学生紙」の名声を日一日と高からしめており、日本の学生の姿を知るためにもっとも有用な資料として、全国各地はもちろんのこと、アメリカ、中国をはじめ広く諸外国からも求められている→満 30 年を記念して 3 つの計画を発表：①増頁→月 1 回 4 頁としていたが、最近東京の広告社との協定がなり、6 月より最低月 2 回の 4 頁制へ②2 頁 5 円、4 頁 10 円に値下げ、予約購読も年 300 円・3 か月 90 円に下げる③記念行事→講演会、映画と音楽の回、コンサートなど

1955 年

1953年の映画を顧て  
ベスト・テンを選出



| 順位 | 映画名         | 監督      | 配役      |
|----|-------------|---------|---------|
| 1  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 2  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 3  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 4  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 5  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 6  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 7  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 8  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 9  | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |
| 10 | 新日本プロレス大博覧会 | 新日本プロレス | 新日本プロレス |

現代人の宿命  
リードの文化

二面性を衝く「雨月」



新聞社▼諸般の事情で卒業生号を発行できなかった▼特集:岐路に立つ学生新聞→解説:底をついた悪循環▼学生新聞への苦言:日経新聞勤務→幼稚な誤りが多い▼連日受験生より受験に関する問い合わせ殺到▼京大と新聞記者:各社から専任記者／他大学にはない結びつき→入山雄一寄稿 時事▼地方選挙に自治



体労働者は訴える▼学園評論:学術会議の3原則を守るために→世論の喚起が最も必要▼政府、特別奨学金を3千円に引き上げ▼土地  
接收に苦しむ沖縄:現地からの訴え→軍部の強制は無茶▼ルポ:横  
須賀防衛大学校を訪ねて→失われる批判精神▼保守合同のゆくえ  
教育研究▼河上肇と宮本百合子:良心に生きたインテリの生涯▼京  
大カラコラム探検隊:わが国の最初の荘途▼理科系を5年制へ→反  
対派と賛成派の教員の寄稿→時期尚早で見送り▼法学部ゼミを復活  
▼南極に結ぶ科学者の夢 大学運営▼苦しい教室不足:大学院博  
士コース▼戦後最大の新書庫完成▼総数 46957 冊:中央図書館昨  
年度▼女子は収容せず?:完成近い学生会館▼東一条に日独会館  
▼京大協組、総長に援助を要望:実現すればライスは9円に▼中央  
食堂、白米給食見送り▼「アカハタ」立売禁止:食堂は治外法権で黙  
認▼学部の問題点:教授と学生の往復書簡▼入試裏側:厳重な印刷、  
出題教官が校正▼学生寮など移転か:学内施設大改革の基本路線  
打出す 学生▼第9回河上祭低調:計画倒れ▼督促状の効果満点・  
授業料納入者、会計課に殺到▼ボックス問題:創造座遂に立退き→

学生課「強制執行」通告▼受験生と保健:能率的な勉強法とは▼サークルを育てよ:宇治のサークル活動は  
低調▼学園評論:前夜祭禁止は不当▼学生会館入館問題、学生、自主選考を主張:後援会は学生課推選制  
を希望▼東西南北:託児所の設置を▼警官隊、時計台下で実行使:創立記念祭、一方的な禁止、学生側  
「あくまで話し合いを」／滝川総長、同学会解散も考慮／2 学生起訴→全国から激励の手紙百通▼同学会解  
散、高まる憤激の声▼郷里からの便り:高い水爆展を望む声▼近畿大会、棒高跳びなど優勝▼11 月祭の準  
備活発化:学生側の態度慎重、フォームダンスは回避か▼野球部、立命館破る:岡部好投▼京大ボート部琵琶  
湖周遊随記▼同大新聞発行不能に:自治会が会計管理決定 文化▼日本のうたごえ運動、「創作オペラ」  
に発展▼モスクワの青春群像▼沖縄小学生の手記:もう戦争はいや▼ルポ:富士を汚すもの→頭上にうなる  
砲弾▼菜食主義者の弁▼狂言の再発展:演出家寄稿 広告▼都新聞朝刊開始▼カルピス▼天寅▼紡績 10  
社▼三菱扇風機▼八幡製鐵▼予備校 8 校▼聖護院八ツ橋

受験生に向けた記事 1955 年 3 月 21 日

## 1956 年

新聞社▼年間購読予約の新入生に合格者名簿進呈 時事▼時の窓:米赤狩り続く▼ルポ:生活保護を受け  
る人々▼学術会議総会、教育二法案に態度決せず▼学術会議のあり方:保守政権の翼賛機関にするな:立  
命館大教授▼ルポ:文化財は壊される→秋吉台爆撃演習場接收問題▼学園評論:国鉄値上げに反対▼憲法  
改正と参院選挙:学生寄稿▼無視される労働白書:みえぬ政策樹立への積極性▼ルポ:軍事基地その後→  
内灘、北富士▼旧ソ交渉、京大生はこう考える:本紙世論調査▼教授対談:刑法改正の問題点▼教員座談  
会・社会主義諸国家間の国際関係 教育研究▼嵐山のサルを相手に根比べ▼教員座談会:京大の原子力研  
究をめぐって／原子炉購入はどうなる▼座談会:スターリンは批判されたか▼米、宮地教授を拒否:中ソ学術  
視察が障害か▼日本最大の医学辞典、京大で編纂進む▼両立せぬ研究と原子力委:湯川教授、心境を語る  
▼科学の部屋から:重力変化の測定／ネギのにおい／ノイローゼとは▼文学部 50 周年史編纂へ大学運営▼  
ウイルス研究所新設▼学園評論:授業料値上げ反対▼悩みはなんでも:学生懇話室誕生▼図書館は利用さ  
れているのか:少ない貸し出し、原因は煩雑な制度に▼受験生に得点通知、出身校校長を通じて▼創立記念  
体育祭、賞品にビール▼戦後初の大園遊会:2 千人／フォークダンスも▼原子炉設置問題に結論か:敷地は  
宇治火薬場跡→予算 2 億申請▼学生の政治運動を討議・国立 7 大学学生部長会議:▼合宿所おめみえ:農  
学部グラウンド▼授業料滞納率 6 割弱:2 年間たまれば「除籍」▼一年後の総長選へ職組動く:選挙権拡大へ  
全職員にアンケート 学生▼松浦君敗訴、法学処分確定:大学の懲戒権内と認める▼波紋えがく政治活動禁  
止:学生側声明「基本的人権奪う」▼各学部自治会低調▼学園評論:性急な闘争を続けるな▼宇治自治会発

足▼アイスホッケー京大初優勝▼座談会:京大入試に注文する→在洛の受験生ほか▼病苦と闘う休学生▼東ドイツの学生生活▼法律相談部創立10年、多い借地借家問題▼京大生、イランへ学術旅行▼第一回学内写真コンクール特選写真「某教授」▼ルポ・予備校の夏期講習▼砂川闘争、学生はかく闘った:同好会委員長に聞く▼学園評論:傍観者の態度なくせ、記念祭公判の資金難を救おう▼応援団結成へ体育会本腰:それまで有志が独自に動いていた▼国鉄運賃値上げ反対で全国自治代デモ▼師走の京大生:アルバイト、消えた生活困窮型▼今年の学生運動・本紙編集員座談会→質的な成長見えず▼入試直前の必勝計画 文化▼散歩に快適な京都▼学生鼎談:石原慎太郎「太陽の季節」をめぐる▼『学生生活』生まれる:『学園評論』から改題▼世界の古典演劇▼海外文学の動向→宗教的な傾向が支配▼日本酒の特性 広告▼牧場▼クリーニング▼テレビ▼汽船▼日本郵政▼銀行(三菱・京都・三和・富士・第一)

京大生の生活調査 1956年6月4日



京都大学と学園新聞(834号(1956年3月19日))

時代感覚を鋭く／大学の歴史と共に／学園共通の広場→学生だけではなく、教授や卒業生のための新聞でもある

本紙創刊十周年にあたって(837号(1956年4月16日))

変革期を生きる京大生の生活に密着し、その喜びと苦悩を紙面に表してきたことに誇りを感じる。

1957年

新聞社▼新聞を愛した人々:入山雄一寄稿▼「古都」「科学の部屋から」「旧著のあとがき」「東西南北」を刷新→「私の著作」「京大物語」「講座:原子力平和利用」「学園論壇」:投稿を募集、「争鳴」:読者の声欄▼学生新聞のあり方:ニュース取材を自己批判→明日の荒波へ邁進▼914号は「飛び番号・発行せず」時事▼好況反映した就職戦線▼現地報告:ハンガリー事件 教育研究▼学会議員にアンケート▼教員座談会:科学と民衆／死の灰の経験が障害▼科学の部屋から:金魚とフナ／イギリスの原子力発電▼サルトルと共産主義▼教育公務員特例法の解釈▼不足訴える研究費:ルポ、京大研究者待遇の現状▼座談会:京大事件の歴史的意義→当時辞職した教員ら▼教授対談:国際政治の現段階と今後の方向▼ルポ:京大農学部水産学教室▼法政大学教授会、

原水爆実験禁止声明▼海外出張激増:戦後最高を記録▼新しい放射性排水処理装置▼人工衛星と京大観測陣:上層大気調査に成果▼学内ルポ:収穫期の農場▼ソヴィエト生物学の意義 大学運営▼宇治に原子炉設置→反対の声集まる→断念→高槻有力、阪大も協力→小委員会設置も難航→新候補地名乗り▼学園評論:関係者は深く反省せよ、宇治原子炉をどう解決するか▼東西南北:京大作業員の願い▼総長選、全職員参加の間接選挙へ:職組が運動展開→教員540名アンケート、半数が改革要求▼原子核関係の大学院講座新設▼行き悩む新制大学院▼激減する図書館利用者:9割が椅子だけ利用▼ライス値上げ決定▼平沢次期総長語る:学生を信頼し、規則のいらない大学へ 学生▼決定者昨年の8割増:関西53大学の就職▼記念祭事件公判、滝川総長証言要旨「三上がわたしを蹴った」→検察警察、両調書と食い違う▼三上君の無期限停学処分解除▼全学連、水爆実験反対決議▼尊属殺人をめぐる京大法律相談部座談会▼170万円の映写機、西部講堂で祝賀会へ▼京大生評判記:いまだに「帝大さん」／学生運動元気がない▼自動車部、ビルマ国内を走る▼応援団、対東大野球戦へ▼京大エイトで優勝:関西漕艇▼街頭募金や講演会:帰郷活動各地で進む▼砂川闘争弾圧に抗議:同大で集会▼分校10クラス、スト決議:国際統一行動へ▼学園評論:ストライキは避けよう／行動デーに望む▼京大2千人が決起:統一行動デー→実質的に授業放棄／処分避けスト回避▼学園論壇:スト回避、決して後退ではない▼京大文化祭近づく:姿を消した原爆展▼学生座談会:どんな司法官になるか、司法試験合格者に聞く 文化▼ルポ:歌舞伎→期待される学士俳優▼日本の中の朝鮮人町▼「新・平家物語」の完結▼私の著作:シェイクスピアと30年▼ソヴィエト芸術の現状▼座談会:大型映画化の課題 広告▼ビール(サッポロ・キリン)▼朝日放送主催の電子音楽コンサート▼図書新聞▼石油▼殺虫剤▼ポマード▼銀行▼生命保険(朝日・日本)▼建設会社(鴻池組・大林組・竹中)▼証券(野村・山一・大和・日興)▼阪神電車、セリーグ公式戦ナイター日程▼乳業(明治・森永・雪印)▼銀行▼いすゞトラック▼トヨタ自動車▼日野ディーゼル▼ゴルフ場▼日立製作所▼デイリースポーツ



全京大集会 1957 年 11 月 4 日

900 号に寄せて(900 号(1957 年 9 月 16 日))

芦田譲治氏(顧問)寄稿: 続いたことは支持を十分に受けている証拠。編集者には対立する見解や事情を正しく紹介し、人々に考える資料を提供してほしい

## 【連載第六回】京大新聞の百年 ヘルメットかぶり、カメラとペン持ち全国の闘争へ

2024.02.16



国会デモの様子をつづったルポ記事(1960 年 6 月 20 日号)

2025 年 4 月の創刊 100 周年に向け、京大新聞の歴史を振り返る連載の第六回。時系列で振り返る「通史」は、1960 年から 70 年ごろまでを扱う。なお、内容は 1990 年に出版された書籍『権力にアカンベエ! 京都大学新聞の六五年』から大部分を転載して再構成する。このほか、実際の紙面から記事を書き留める「拾い読み」は、1958 年から 63 年までを掲載する。また、当時在籍した卒業生への聞き取りも実施した。連載を

通して社会背景や編集部理念を顧みることによって今後の紙面づくりに活かしつつ、各方面の歴史考察への寄与を期待する。(編集部)

### 目次

通史⑤ 安保闘争から京大闘争へ(1960～1970)

「大学と社会との接点網羅」企画展示で本紙紙面活用 京大大学文書館 渡辺恭彦助教

聞き取り② 「闘争」時代の京大新聞 1960 年代在籍者に聞く

「新しい文化活動に敏感に」東大教養学部新聞での経験 放送大学名誉教授 柏倉康夫

拾い読み⑥ 社説やルポで社会問題斬る 多彩な求人広告が下支え

通史⑤ 安保闘争から京大闘争へ(1960～1970)

### デモで死者、悲痛な紙面

1960 年は「安保」の年となった。岸信介内閣は、講和条約と同時に締結された日米安全保障条約について、対等性や双務性の強化を掲げてその改定を図った。しかし、日米の共同防衛や核搭載船の寄港をめぐる懸念から大規模な反対運動が巻き起こった。5 月に自民党が強行採決に踏み切ると、内閣退陣を求める数十万人規模の抗議デモが国会を取り巻く事態に発展した。京大新聞では、同年春から関連の話題が毎号トップ記事を独占し、教員や学生らの反対表明が紙面に並んだ。

条約の自然承認となる前日の 6 月 19 日夜には、全日本学生自治会総連合(全学連)の学生が国会内に突入して警官隊と衝突。その最中に東大生・樺美智子が命を落とした。京大新聞はデモに参加した学生のルポを 6

月 20 日号に掲載。「警棒と鉄カブトの渦」という見出しで、「力いっぱい振り下ろされる警棒が(中略)学生の肩や首にくい込む」などと生々しい言葉が並ぶ。翌号の編集員による報告記事にも苦しい胸の内があらわれている。

『死』という最終の事態が学生の心をゆさぶってひろがった」

「この死は、(中略)沈鬱な、また力感をともなった声で、速やかに伝わらねばならぬ」

改定成立と引き換えに岸政権は退陣。代わって発足した池田勇人内閣は、「所得倍増」のかけ声で経済政策を展開した。想定を上回るペースの経済成長が生まれ、耐久消費財の普及率が急上昇したほか、レジャーブームといった言葉が定着し、国民の多数が「中流」を自覚するようになった。人手不足が省力化技術への設備投資を後押し、経済成長が加速した反面、鉱業所での労使紛争や農山村からの労働力流出など、ひずみもみられた。国外情勢への懸念もあるなか、1964 年には東京で五輪を開催。同年に開通した新幹線の勢いに乗り、日本は経済大国の道を走り始める。

経済の活気は京大新聞にも反映され、東大の学生が立ち上げた広告代理店(現・リクルート)から得た多数の求人広告が紙面に並んだ。

### 処分覚悟でスト提起の社説

創刊千号の記念行事が一段落したころ、京大新聞の存亡に影響しかねない状況が訪れた。全学連が 60 年 4 月 26 日を安保改定の国会審議の山場と位置づけ、阻止に向けた統一行動日として全大学にストライキを呼びかけた。京大同学会は呼びかけに応じてスト準備に入った。一方、大学当局は 1950 年のレッド・パージ闘争の際に出したスト禁止の告示を念頭に、処分を辞さない構えで学生を牽制した。当日の集会申請は不許可となり、スト呼びかけの看板は即撤去されるという情勢だった。京大新聞は、処分を覚悟で「全学スト」を呼びかけるかどうか、選択の岐路に立たされた。

主幹の藤田と編集長の小坂は学生部に呼ばれた。芦田譲治学生部長から、「伝統ある京都大学新聞を危機に陥らせる」としてスト呼びかけを避けるよう諭された。京大新聞出身で顧問も務めた芦田からの言葉に困ったふたりは、入山雄一顧問に相談した。入山は「きみたちが正しいと思うことを好きなようにやってください」と言った。新聞社の先輩からは「京大新聞を潰すような社説は書くな」との声も聞かれたという。

編集員の考えは、安保改定反対では一致するものの、社説でストを提起することの是非をめぐってなかなか結論が出ない。しかし、多数決にはよらなかった。激論を闘わせる編集会議を 5 回重ね、ほぼ全員が納得できる社説ができ、4 月 18 日号に掲載した。その見出しは「ストライキでたとう」。明確なスト提起だった。編集部として制裁も覚悟した。当日は、文学部などの学生大会でストが決議されたほか、大勢の学生らが時計台前を埋めて集会が強行された。

9 月 12 日、京大当局が安保闘争に関する告示を出した。「正常な授業遂行を阻止するなど、ときに行きすぎもあったことはまことに遺憾」と批判しつつ、「民主主義をまもるべく、(中略)行動しようとしたことは理解できる」とし、「混乱せしめるような行動をくりかえしてはならない」と警告するにとどめた。京都大学新聞にも制裁はなかった。



政府への抗議として教職員や学生にスト(授業放棄)を呼びかける社説(1960年4月18日号2面)

### 大学管理法めぐり紙面で主張

学生運動は安保闘争以降、停滞期に入る。一時的に高揚感が生まれたのが大学管理法反対闘争である。1962年5月、池田首相が選挙演説で「大学教育においても、教育が革命の手段に使われている」と発言したことをきっかけにその内容が公となり、12月に法案化された。

法案の骨子は、学長や評議会などの権限を明確にして大学の管理強化を図るとともに、政府の諮問機関を設けて「著しく不適当」な場合には文部大臣が学長や教官の人事の再考を求めるというものであった。これに対し大学の自治の否定であるとして、学生や教職員、日本学術会議、国立大学協会などが抗議運動を起こした。京大新聞は各層の動きを追いながら、社説で政府案を「絶対に許せない」「徹底的にはねかえしていこう」と記すなど主張を打ち出した。編集部は、学内唯一の報道機関としての客観性を意識しつつ、現実には繰り広げられる学生運動に学生の立場で加わるという微妙なバランスの上に身を置いていたと言える。

大管法反対闘争は62年秋に頂点を迎える。11月1日、安保闘争以来の規模で全国的な統一行動が実施された。さらに京大同学会は、12月8日の国会開会日に合

わせた「京大全学閉鎖」を提起し、全学投票を呼びかけた。京大新聞は社説で、「大学が、その自治・学問研究の自由の根幹をゆるがすような政治的意図に直面したときには、自らがその門を閉じてでも(中略)はねのけていかなければならない」と主張した。のちの全共闘運動で日常化する「全学閉鎖」の戦術はこの時点では支持を得ず、目標とされた1万人の投票に届かず挫折した。

63年3月、池田首相は「大学の運営は自主的に適正化されることを強く期待する」として法案の国会提出を取りやめ、大管法闘争は収束に向かった。一方、文部大臣が教官人事に「差し戻し権」を持つとする方針は、法案が消えても認識として残っており、同年1月28日号の京大新聞社説は、「表面上の形式をかえただけで、支配者の意図の実体はもののみごとに貫徹されてしまった」と憂いている。

### 「層」から「個」へ紙面の変質

1963年1月、アメリカが原子力潜水艦の寄港を日本に申し入れ、翌年8月には政府が原則同意した。戦争協力を危惧する抗議運動が広がり、学生運動も勢いを持った。一方、夏休みに入ると、京都府学連などが、安保闘争の挫折により分裂していた全学連の再建を画策したものの失敗。9月には、京都府学連の一翼となっていた共産党系学生組織が分裂した。さらに、市電・市バスの値上げ審議中だった京都市議会場に府学連の学生約30名が乱入し、全員告訴されるという事件が起きた。

こうした情勢は京大新聞の紙面に反映された。編集部は学生運動の現状分析に着手し、64年4月13日号の巻頭評論で、「学生運動はその政治性の喪失のゆえに(中略)再出発を問われている」と記した。その後、「憲法の背理を追う」をテーマに紙面づくりを進め、「戦後文学・思想の転換」といった論文や15回にわたる「戦後映画史」の連載など、様々な視覚で「戦後」を語った。当時在籍した編集員は、それらの試みは京大新聞の変質を意味すると振り返る。大管法闘争以後の学生運動の混迷にともない、「層」としての大衆運動を報じる「商業新聞の学内版」的なスタイルから転じ、放り出された「個」として編集員自身が問題提起の主体になろうと努めたという。

### 「学友の死に満身の怒り」

1965年、ベトナム戦争による特需に支えられ、戦後最長の好況とされる「イザナギ景気」が到来した。カラーテレビ、クーラー、乗用車の「新・三種の神器」が急速に普及率を上げ、68年には国民総生産(GNP)が西側諸国2位となった。一方、四大公害訴訟が提起されるなど、経済成長の反面で公害対策や自然保護のあり方が問われた。

67年になると、学生運動が再び高揚をみせる。ベトナム戦争の激化は、高度成長を続ける日本に戦争への姿勢を問う契機となり、学生運動に根拠をもたらした。前年に再建された全学連は67年10月8日、佐藤栄作首相のベトナム訪問の阻止を試みた。全学連を中心とする新左翼(※)系学生らが羽田空港付近で警官隊と衝突し、その渦中で京大生・山崎博昭が犠牲となった。京大新聞は号外を出して「官憲の暴力により虐殺」と報じ、「本紙では、(中略)学友の死に対して満身の怒りをこめて抗議の意思を表明する」と記した。この第一次羽田



闘争(10・8 闘争)が、ゲバ棒とヘルメット姿で権力にぶつかる学生運動のスタイルの定着につながった。10・8以降、エンタープライズ号の寄港阻止を訴える佐世保闘争や「王子野戦病院」反対闘争など、学生運動は激動の季節をくぐる。70年5月に迫った日米安保条約の自動延長阻止を射程に入れ、多数の負傷者を出すなど尖鋭化した。京大新聞では、編集員が運動に加わって現地発のルポ記事を載せ、読者への問題提起を続けた。

### ※新左翼

共産党批判から発生した左翼運動。1950年代後半から学生運動のなかで中核派、革マル派などの党派組織が生まれ、共産党の指導を受ける民青同盟と対立。党派間でも革命理論をめぐる批判を重ね、中核派と革マル派の「内ゲバ」は殺人事件に発展している。



号外(1967年10月9日)

### 「狂気の3日間」めぐり出版も

1960年代後半は、全国各地の大学で国内外の情勢にくわえて学費値上げなどに端を発する抗議運動が活発化し、学生間の党派対立も相まって実力行使を伴う闘争に発展した。全学共闘会議(全共闘)が組織され、日大全共闘などが機動隊とわたり合った。

69年1月には、東大で安田講堂を封鎖した全共闘と機動隊の攻防が繰り広げられた。同じころ京大では、寮の運営をめぐる大学当局との話し合いが決裂したとして、全寮闘争委員会が学生部を占拠し建物封鎖を実行した。これに対し、「五者連絡会議(同

学会・職組・院生協議会・生協・生協労組)」は実力による封鎖解除を主張。封鎖を支持する学生らが正門前に詰めかけると、「五者」の学生らが看板などでバリケードを築いて立ちをはかった。突入を試みる封鎖支持派に対し、大学当局からヘルメットを支給された学生らが放水で応じるなど、衝突は3日間にわたり続いた。京大新聞は1面トップで報じるとともに「ドキュメント『狂気の3日間』」と題した特集を組み、「大学が潜在的にもつ矛盾の暴露」の解析を試みた。

孤立した寮闘委が白旗を掲げて封鎖は解かれたものの、大学当局による実力行使の黙認が波紋を広げ、学内で大規模な衝突が相次ぐことになる。寮や各学部の学生が全学闘争委員会を組織し、総長と団体交渉を実施。「逆封鎖」への自己批判や総長の辞任など8項目を要求した。押し問答が延々続き、開始から53時間後に決裂した。教養部や文、医、工など各学部で学生大会の議決をもって無期限ストライキに突入、「闘争」は全学的な広がりを見せた。3月には入試中止による「学園民主化」を訴える動きが起き、当局が試験会場を学外に移す事態に至った。

関わった学生の問題意識は様々で、党派の理論にもとづき政治拠点づくりを図る者、文部省による管理強化を批判する者、自治を掲げながら政府や産業社会の意向に従っているとして大学当局を追及する者、教授中心の旧来の学部運営を疑問視する者などが入り組む状態となった。さらには国内外の政治問題とも結びつき、「学園闘争から70年安保闘争へ」というスローガンが叫ばれた。

この時期の京大新聞の構成員は、各学部闘争委員会の担い手でもあった。紙面を通して全学に発信し、「闘争の徹底化に努めるべき」とする社説を載せるなど連帯を呼びかけたほか、全国各地の運動の現況も伝えた。ルポや特集で検証に取り組み、〈関西学生運動の新たな発展は可能か〉〈特集：東大裁判〉など直接の記録のほか、〈ドイツ革命の敗北と70年安保〉のような革命論、〈日本帝国主義と部落問題〉〈反大学講座—朝鮮問題〉といった大局的な視点の記事も掲載している。6月には京大闘争の記録を収めた『ドキュメント・京大闘争』を出版した。



1959年7月14日号2面の特集タイトル



69年6月刊行『京大闘争』(三一書房)

### 時計台封鎖、くすぶる「京大闘争」

1969年8月、大学臨時措置法が成立した。「紛争の解決が困難」と認められる場合に文部大臣が学部などの機能を停止できるとする内容で、これを機に各大学は「自主的」な解決を図るべく機動隊の導入による「正常化」を進めた。

京大では、各学部の建物で抗議のバリケードが築かれたり授業が延期されたりと緊張が続くなか、9月に学生が本部時計台を占拠・封鎖したほか、百万遍から東一条に至る街頭バリケード闘争などが展開された。長引く異常事態に対し、大学当局は警察導入に踏み切った。約2千名の機動隊が突入し、抗戦する学生らに放水や催涙弾で迫り、封鎖解除に至った。

各闘争委員会は多くの消耗者を出した。それでも完全な沈静化には至らず、各学部で浮上する諸問題に対し、学生らはストライキや建物封鎖をもってたびたび抗議の声をあげ、不安定な学内情勢が続いた。学生運動の領域は学外に広がり、安保・沖縄闘争を軸に三里塚や反公害の地域運動などとも

結びついた。

京大新聞の編集員は、朝は立看板を出してビラをまき、夜は会議に原稿執筆、看板づくりという生活を送った。各地での闘争を追い、ヘルメットをかぶってカメラをぶらさげ東奔西走した。こうして得たニュースや論説のほか、「入管をめぐる諸問題」「報告レッド・ページ」「沖縄現地報告」などの特集が並んだ。

### 「大学と社会との接点網羅」 企画展示で本紙紙面活用 京大大学文書館 渡辺恭彦助教

京都大学大学文書館が開催する企画展では、本紙紙面の写真が展示資料としてたびたび登場している(最新の展示は百周年時計台記念館にて3月31日まで)。大学の歴史を顧みる営みにおいて、本紙はどのような特徴を持つのか。展示を担当した渡辺恭彦助教に尋ねた。

#### ▼渡辺助教

これまで文書館の企画展示を3回担当した。1回目が「京大図書館の起源—知の集積地として—」、2回目が「1969年再考」、そして今回開催しているのが「京大生の文化活動—1950年代を中心に—」である。1回目は大学創設期からはじめて、やや幅の広い年代を対象とし、2回目、3回目は年代を限定しつつ企画を構成した。企画を作り上げていくなかで、『京都大学新聞』は大きな助けとなった。毎号、学内の動きや学生生活、教官や学生へのアンケート、時代によっては急進的な学生運動等を取りあげた密度の高い紙面が構成されている。学内の出来事や学生気質を中心に、大学と社会との接点がかなりの程度網羅されているのではないだろうか。取材力と筆力には、恐るべしといった感がある。

教官が多少くだけたスタイルでコラムを書いていたりするのも、妙味の一つだ。後に書籍に収められる論説が掲載されているだけではなく、同新聞のみに書かれたものも多いと思われるので、史料的にも貴重な価値があるといえよう。

文書館の企画展は主として文書館所蔵資料を展示するため、まずは資料をもとに考えるのだが、重要な出来事であっても資料を所蔵していないことがままある。そこで頼みの綱となるのが、『京都大学新聞』である。今回、京大生の祭りというテーマのなかで、河上肇の業績を記念する河上祭の資料を展示している。祭が始まったいきさつを調べようとしたところ、所蔵資料数点からはいっこうに分からない。そこで『京都大学新聞』のページを繰ることになる。河上祭が行われたのは周忌の1月末で、2月の号を見ると、1947年以来、ほぼ毎年掲載されていることを確認できる。1960年の第14回からは、新入生を迎える4月下旬に行われるようになった。

そのほか、今回の展示に関して言えば、1951年7月14日に京都丸物百貨店で行われた総合原爆展や1954年6月18日の京大創立記念祭で行われた水爆展が大きく取り上げられており、新聞社としても社会問題への意識が高まっていたことを窺うことができる。

1969年を扱った際には、バリサイ、反大学、ティーチイン、自主講座などの学生たちが主催した試みをはじめ、教官たちの学問論や大学論が紙面を埋め尽くしており、時間を忘れて読みふけてしまうこともしばしばあった。全共闘支持を表明し、学生のあいだでカリスマ的な人気を誇った高橋和巳(中国文学)が1969年2月8

日に行った講演も、すぐに『京都大学新聞』に掲載されている(後に、京都大学新聞社編『京大闘争—京大神話の崩壊』三一書房、1969年に所収)。大学や体制に批判的な文章が多く載せられているのを見ると、はたからみてもはらはらしてしまう。ペンの力を信じた気骨ある精神に、ただただ感服する次第だ。

その時代を一望できるような気がして、まとまった年数を製本刊行した縮刷版を愛用してきたが、このほど、創刊号から2000年までの大部分を京都大学学術情報リポジトリ紅で閲覧することができると知った。同時代と並走する新聞社にさらなる期待が高まる。創刊百周年へ向けた「京大新聞の百年」の連載も楽しく読ませていただきたいと思う。

## 聞き取り②「闘争」時代の京大新聞 1960年代在籍者に聞く

60年代の京大新聞を知る8名に話を聞くことができた。各地で学生運動が盛んな情勢で、何を意識して紙面づくりに取り組んだのか。通史では拾いきれない一人ひとりの思い出を、級友との会話を通して回想してもらった。以下、東京と大阪で実施した聞き取りおよびメール取材の内容を掲載する。(聞き手 村・史)

### (1)東京の4人のやりとり



左奥が片岡優さん(1964-68)、左手前が国吉澄夫さん(1967-71)、右奥が枚田繁さん(1968-74)、右手前が吉澤潔さん(1968-73)=1月27日、京大東京オフィスにて

重労働で「裏側」学ぶ—入社の動機は。

片岡 同学会作成の冊子『樹々の緑』に紹介が載っていて、中高で新聞の経験があったから興味を持った。「薄給進呈」と書いてあったのも魅力的で。

国吉 私も中高で新聞の委員。高2のときには地元地区の高校新聞連盟の委員長も務めた。大学入学後、友人に誘われて新聞社に入った。抵抗はなかったけど、高校新聞よりも政治色があるというのは後で分かった。新人が入ると先輩の間であそこの党派らしいといったうわさが回ったと聞く。でも特定の政治団体に肩入れする組織ではない。

枚田 大学に入るとクラスに高校のころから闘争をやっている連中がいた。話を聞いてもわからなくて、中立的に見たいと思って学生新聞の扉を叩いた。

吉澤 浪人時代に10・8羽田闘争をテレビで見た。それがきっかけで、志望校を体制派的な東大から京大に変えた。ときどき遊びに行っていた同志社で京大新聞が配られていた。入社後、学生の逮捕を身近に感じる機会があって、「そういうこともあるところなんだな」と思った。それから任されたのは、代理店「リクルート」の大阪支社で広告を受け取って印刷所へ持っていく仕事。重たい凸版を運ぶ。20キロ以上あったかな。

片岡 原稿を印刷所に届けたり新聞を販売スタンドに置いたりするのも新人の仕事。それと、今は封筒に入れて新聞を送るけど、当時は紙の帯を直接巻いて送った。その作業を頼む「折り屋さん」へ、重い新聞をタクシーで運ぶのも1回生だった。

—1回生は記事を書かない？

片岡 書くけど、上回生の方が多い。優先権とかはない。

吉澤 当時はテレビドラマ『事件記者』が流行っていたけど、そういう記者像とは違う裏の部分の仕事を知れたのはよかった。

片岡 組み方とか、文章以外のことも先輩から教わった。

国吉 毎週とても大変だった。

片岡 印刷所に行く電車で社説の原稿を仕上げることもあった。

吉澤 週刊の学生新聞は珍しい。

枚田 印刷所からしてもいいお得意様だったな。

吉澤 印刷所の職人技はすごかったね。

枚田 でこぼこした活字という物体を一字ずつ並べていく。

吉澤 15字詰めで横長の「棒打ち」の部分と、コラムで使う「箱組み」を組み合わせていく。

枚田 あとは鉛板。大きい見出しは板に焼き付けて形を取る。

—鉛板はその1回限り？

枚田 そう。一度使ったら溶かす。

「取材」で羽田闘争へ

片岡 新入生にアンケートを取ったり、学生や教員の座談会、就職情報を載せたりと、読者に興味をもたれるような企画を意識した。ニュースは、当時各地で事件や集会が多くて、実際に現場に行って記事を書いた。殴り合いの場もあった。

国吉 私は最初の大きな取材が 10・8 だった。夜行列車に乗って東京へ。取材だけど、集団と一緒に羽田空港まで走って、機動隊に押し返されて。

—取材はひとり？

国吉 先輩も行って記事を書いていた。でもあれ以降みんな機動隊に震え上がって。取材に行きたがらない人が増えた。

吉澤 10・8 の経験から運動全体で武装が強まった。

社内で意見対立も

—編集会議の雰囲気は。

国吉 週のテーマを決めたね。

片岡 司会は編集長。発行直後の紙面の批判をみんなでする。見出しのつけ方がおかしいとか。その後、学内のできごとや人事、自治会の集会日程を確認。決めたテーマに沿って、書きたい人は手を挙げるけど、幹事の 3 回生が下級生に「あなたこれ」と振る場合もある。

国吉 入ったときはみなさんの議論に面食らったね。

片岡 我々の世代も喧々諤々、いろいろな意見が出た。

国吉 私のころは京大闘争の収束の時期で、京大新聞として総括をしようと激しい議論になった。一方で韓国の問題を熱心に取材する編集員もいて、主幹が「今は学園闘争の総括だ。アジアなんか放っておけ」と叱責したり。僕は編集長として広く取材をやっていく方針で、結局消耗して編集部を離れてしまった。

片岡 学園闘争については各人で評価が違う。新聞社の中で対立もあった。党派の主張を編集会議で述べる人がいて、厳しい言葉が飛ぶこともあった。そういう状況で一本の主張を出すとなると、なかなか収まらない。

国吉 セクトは全共闘が退潮すると出てくる。セクトどうしの争いが激しくなると内ゲバが起きたりする。京大新聞として、いかに客観的に全体を見て方向を示すか。そういう議論をしたいと思っても、党派の意見を言う人もいてバチバチの議論に。

吉澤 内ゲバでセクトの力が弱くなって、京大新聞としても民族差別問題などなどの他の大きなテーマを扱おうという流れになった。同学会の存在感も弱くなって、事実上、京大新聞が全体の事務局だった。編集会議で、「記事がないから何か一発やろうか」と冗談を言うほどだった。

入試は稼ぎ時、でも「粉砕」

枚田 69 年 9 月の時計台闘争で京大の全共闘運動はバラけて、サークル棟が空になった。流れとして 69 年で切れる話ではない。

吉澤 受験指導をする親学会が持続不能になって、『京大を受ける人のために』の刊行を我々が引き継いだ。

枚田 もともと京大新聞が始めて親学会に譲った。改めて引き受けた後、社の「利権」をめぐる大手予備校とやりとりした。

吉澤 毎週のように名古屋まで行ったね。京大新聞は入試問題が一番早く手に入るし、そういう利権をいかして儲けられるように、問題解答集を速報で出したい予備校側と交渉した。合格者名簿も利権で、合格電報（※49 年に京大新聞社が始めたサービス）はドル箱。その申し込み受付は入試当日にやるしかないから、当時起こっていた「入試粉砕闘争」には、それを気にしながら関わった。

片岡 受験関連や学術系の出版、合否通知などの事業は、京大新聞社発で今に至っている。

全国の学生を意識

吉澤 70 年ごろの京大新聞は、他の大学新聞が弱るなか、東京の救援連絡センター（69 年設立）に毎号千部以上送っていた。

枚田 運動で逮捕された学生らを支援する組織。

吉澤 何千人規模の拘置者がいた。編集部として、京大ではなくて全国の学生の新聞だと意識するようになった。一面に京大の話題は出すなどと言われるほど。大きな編集方針の変更と言えるかも。他の党派の新聞は差し入れしてもはじかれるけど、うちは国立大学の公認団体だから大丈夫。「あのころ京大新聞を読んでいた」と



しばしば言われる。いいことをしたなと思う。

## (2)大阪の3人のやりとり



右から荻原征三郎さん(1961-65)、岡田盾夫さん(1962-70)、垣口弥生子さん(1968-73)＝※2月12日、大阪市内会議室にて

**闘争委の一員として―入社―の動機は。**

荻原 理系志望だったけど、物理がダメで文系に。教師がマスコミしかないと考えて編集員の2次募集を受けた。月500円給料が出たのもよくて。

**―応募は多くなかった？**

荻原 枠が6人で、応募多数なら選考、足りなければ2次募集。

岡田 私は工学部で、文系のものがおもしろそうで入社。紛争のせいで博士課程中退。女性編集員はずっといなかったのかな。

垣口 前にもいたと聞いた。私は中高ずっと運動部。大学では美術部にとっていた。ところが、新入生歓迎の催しで京大新聞の人に話しかけられた。「君らは70年安保を担う世代だ」と檄を飛ばされて、戸惑いながらも入社した。面接はなかった。

**―入ってみて雰囲気は。**

荻原 おもしろかったけど、入ったころは会議なんて初めてで、どうでもいいことをぐだぐだやっているなど。夜中まで続いてトボトボ帰った。それが毎週。週刊は誇るべきことだけど、だんだん授業に出なくなった。

**―会議の参加人数は。**

荻原 3回生まで全員参加。暇な4回生も。狭い部屋に約20人。

垣口 私のころは15、6人かな。

荻原 僕の年から宇治分校が廃止されて最初から吉田にいた。1年上の先輩は、宇治から毎週輪番でひとり吉田に来て会議に出て、他は不参加だった。1回生から会議に出ていた僕らは、2回生を少し馬鹿にしていたね。

**―何を話し合った。**

荻原 寄稿を誰に依頼するとか。

垣口 どんなネタを扱うか、コラムを誰が書くか。なかなか決まらなくて、論破した人が書く。

**―揉めることもあった。**

荻原 一本の軸として編集長のイデオロギーがあって、僕らノンポリが「おかしい」と茶々を入れて、反論され、という流れ。セクトの影響は感じたけど、政治ばかりやるのが学生新聞ではないという発想もあった。バランスをどうとるか、全体として迷いながら編集方針を議論した。

垣口 初めのころ新聞の部室にあまり行かなかった。クラス討議のほうが政治的で大変で。東大や日大から全国で学園闘争が起って、京大でもやるぞという雰囲気だった。1回生の秋までは教室で勉強していたけど、以降はバリケード封鎖で授業がなくなる。69年1月、学生部封鎖が始まったころ私は教養部闘争委員会にいた。学部教室にほぼ入ったことがない状態で、授業が再開されても、ほぼレポートでの単位認定だった。京大新聞の取材に加わるようになったのは、この年9月の全共闘結成大会あたり。

岡田 私のように院に進んだ者がそろそろ闘争に参加した。一度下火になったけど呼び戻される感覚。嫌だなと思いつつ。

荻原 僕らの4年間は、大管法とかはあったけど、前後と比べれば無風状態。たまにあったデモで機動隊を見ると怖かった。

岡田 大管法闘争のころは、理屈をこねて闘うものを見出して運動が展開されていた印象。僕らは冷ややかに捉えていた。

荻原 闘争に精を出す連中の中で僕はのどかな記事を書いた。ハスの花の写真を撮ってきたり。

**リクルートの進出**

荻原 62年ごろからリクルートが関西に進出してきて、もともと付き合いで広告を出してくれていた企業との間にも入るようになった。マージンを引かれるから、直接出稿よりこちらの取り分が減る。収入に響くということで、



リクルートの江副(浩正・東大在学中に創業)とすったもんだした。でも向こうはプロ。簡単に論破された。

—収入減にどう対応した。

荻原 僕は64年に会計担当になって、最初はやりくりしたけど、秋には金欠に。入山(雄一・顧問)さんの個人的な負債として10万円を銀行から借りて踏みとどまって、合格電報でお金が入る3月までのいだ。そのころ編集員の給料は廃止した。

垣口 私のところ給料はなかった。

—入山さんとの関わりは。

荻原 週に1回ほど来られる。幹事団が出がらしのお茶で迎えると、ニコニコして「君たちと会うのが楽しみ」とおっしゃる。戦前は入山さんが責任者。大変な功績のある方。

垣口 私は入山邸で新聞縮刷版の発送作業に携わった。

海外取材の一方で

垣口 年2回ほど合宿に行って、向こうでも会議をやった。

荻原 週刊の間でよく行けたね。

垣口 合併号にしたと思う。

荻原 郵便局の第三種認可を受けるには3か月で10回発行するとか決まりがあった。ときどき電話がかかってきて確認されるから、小さいタブロイド版も挟みながら発行を重ねた。

岡田 合宿に行けるお金があったんだな。高度成長の最盛期か。

垣口 高度成長期でも文学部の女子学生向けの就職案内は2件くらいしか来ない時代だった。

岡田 私は取材で韓国に行った。アメリカ国務省の招待で東大・一橋大の新聞の記者と一緒に渡米した編集員もいたね。

荻原 僕は三池闘争のルポに行った。自分の未熟さを思い知らされた。

岡田 自分の生き方を絡ませながら、政治や大学に向き合うことで浮上する苦悩をどう表出するか考えるという営みだった。

—紙面を読まれていた実感は。

荻原 ないね。販売ボックスは空になったけど、ほとんどお金は入っていなかった。

垣口 読まれていたと思う。全共闘の取材に行くときは新聞を持って行って現地で配った。

岡田 ニュースは先生方も読んでくれていて、そういう硬い記事をどんどん載せようとする編集員がいる一方で、僕は学生をどう教化するかを考えていて、そういうものはあまり読まれなかったんじゃないかな。

荻原 遠回しに考え方が違うと言われて原稿を書いてくれなかった先生もいるけど、京大新聞に書くのが楽しみと言ってくれた先生もいた。

いつの時代も変わらない

—現役の編集部に一言。

岡田 よく100年もったなと。101年目がうまくいけば、5年、10年とつながる。我々はノスタルジックに紙媒体が不可欠。若い人たちがどんな展望を持っているのか気になる。

垣口 大学という場で学生たちに向けた媒体として、存在意義はある。世相や課題にどう向き合うかという問いかけはいつの時代も変わらない。

荻原 IT時代をぶったぎってほしいな。

伊東勉之さん(60~64年)の2月6日付メール回答

入社の動機

母校鳥取東高が間欠ながら連続して社員を輩出しており、迷わずその伝統に従った。

当時の印象的な体験

安保闘争を現場体験した一人として、激しさを増したジグザグデモに対する機動隊による棍棒殴打、放水、身柄拘束などの強烈な弾圧と共に、街頭カンパにより得た資金でオルグ要員として上京し東大学生樺美智子の死から自然承認の夜の徹夜の座り込みまでの一連の記憶は今でも鮮烈である。中でも30万人ともいわれる学生、組合員の人波が議事堂前を埋め尽くした光景は忘れ得ない。

編集部と党派・大学当局との関係性

大学新聞で「社」を冠するのは珍しい。経営の独立の確保という理念が「社」の一文字に込められているという認識を共有していた。当局をはじめとして学内外の干渉を排し独立自由の主張を護るに当たって最も留意されたのが財政の独立で、会社人事や総務部門への直接交渉による広告の独自入手などに取り組んだ。

当時は学内外で激しい党派闘争が繰り広げられていた。その中であって、あくまで中立不変を貫くことによって一定の信用を得た。その効果は学内外の論客、学内革新系若手教授らの意見発表の場として活用されるなどの形で現出した。

本紙紙面に見る 1969 年の攻防(学生部「逆封鎖」～時計台封鎖解除)





上から順に 1969 年 1 月 27 日号、3 月 3 日号、3 月 10 日号、3 月 17 日号、5 月 26 日号（1 面と 3 面）、9 月 22 日号  
**「新しい文化活動に敏感に」 東大教養学部新聞での経験 放送大学名誉教授 柏倉康夫**  
 60 年代、学生新聞づくりは他大学でも盛んに行われていた。放送大学名誉教授の柏倉康夫氏は、東京大学での学生時代に「東大教養学部新聞」の編集長を務めている。その経験を振り返ってもらった。

\* \* \* \* \*

**入会の動機は。**

→高校でフランス語を学ぶ機会があり、大学ではフランス文学・文化の吸収を中心にした生活でした。一方で時代は政治の季節を迎えていました。高校の社会科の担任は「原爆許すまじ」の作曲家の木下航二先生で、皆でよく歌ったものです。入学の翌年の 1960 年には「日米安全保障条約」の改定があり、全学連などが激しい反対運動を展開していました。こうした社会状況に学生としてどう向き合うかを真剣に考えるために、仲間と議論する機会を得たいと思いました。そして新聞作りで、自らの思考を文章にする機会を得られると考えました。東大新聞の縮刷版にある卒業生の手記に、「教養学部新聞は、本郷の東大新聞とは独立しながら、やはり兄弟分の関係にあって、何かあると出入りしていた。あの第二食堂の階段を上がって東大新聞のドアに向かうと教養学部の学生は、なんだか一段とおとなの世界に足を踏み入れる思いがしたものである」という記述がある。2 年生までという区別があったのか。

→区別はありました。1・2 年生で「東大新聞」の部員だった者はいません。私の同期 10 名のうち 2 名が「東大新聞」に入り、他は「教養学部新聞」で新聞作りをやめています。

**東大新聞との関係性や内容のすみ分けは。**

→学内のできごととは本郷と駒場というすみ分けがありましたが、その他はそれぞれが独立した立場を守っており、財政的な点では競合関係にありました。新聞の販売益と広告が主な収入源ですが、広告は競合するものが多く、広告取りには大いなる企業努力が必要でした。私たちは駒場周辺だけでなく本郷の喫茶店や古書店などにも出向いて広告をお願いしたものです。もう一つ大きな財源は、毎年の合格者発表号でした。名簿の掲載は「教養学部新聞」の専売で、普段の数十倍の部数を発行して売り上げました。

**運営は学生のみで。**

→顧問の先生は一応いましたが、私の在籍中、一度もお目にかかったことはありません。新聞の発行は完全に学生の手には委ねられていました。ただ、東大ほか他大学の著名な先生方に原稿を執筆料なしで書いていただいたことは多々あります。これは学生新聞の特権でした。

**編集長の権限は。**

→「教養学部新聞」は隔週刊行で、記事の内容を統括する「編集長」と財政や庶務をあつかう「総務」を設けていました。会員全員の互選で決まりました。毎号の取材対象、記事の内容に関しては、すべて部員の合議制で決めていました。編集長はこの会議を主宰し、かつ記事の内容、表現に関しての責任を取ることが暗黙の了解事項でした。さらに毎号1面に載せる論説を書くのも編集長の役割でした。

当時の「新聞会」の雰囲気については、60年入学で私の次の編集長になる上村忠男氏(東京外国大学名誉教授)が、『回想の1960年代』(ぶねうま社、2015)で次のように書いています。

「喧々囂々の議論、部室はいつも活気に満ちていた。議論は時として激することもめずらしくなかった。なかでも、ブントに所属していたNが、編集部員の担当する「斜影」という一面下のコラムで、日本共産党の構造改革派の論客の一人として知られる安東仁兵衛の4・26デモ当日の行動を批判する記事を書いたさいには、どうやら共産党内で安東らの構造改革路線に同調する立場をとっているらしいGがクレームをつけ、一座の空気が一瞬凍りついてしまったことがあった。11・27以降顕著になりつつあった全学連内部における主流派と反主流派の対立は、新聞会の部員たちのあいだでの議論にも折りに触れて顔をのぞかせていたのだった。しかし、そんな場合でも編集長のKが仲裁に入って、議論を巧みに収束させていた」

私の編集長時代は、安保闘争を中心とする政治ネタだけでなく、大学の内外で起こっている新しい文化活動にも意識的に目を配ることに努力しました。映画についていえば、ポーランドのアンジェイ・ワイダ監督の「地下水道」、「灰とダイヤモンド」などが評判を呼び、東大の「ギリシア研究会」がギリシア悲劇を日本で初めて上演する運動が起っていました。日比谷野外音楽堂での上演初日には、脇の日比谷通りを「安保反対」を叫ぶデモ隊が通っていくといった光景が出現しました。学生新聞はこうした新たな傾向に敏感であるべきだというのが編集方針の一つの柱でした。

**販売経路は。**

→郵送での定期購読、学内の本部や図書館、教室のある建物の入口に、大学当局の許可を得て無人スタンドを設けました。代金はほぼ販売部数に見合って回収できました。加えて、合格者発表当日や駒場祭などの特別の日は部員総出で立ち売りに励みました。

教養学部の学生の少なくとも半数は「教養学部新聞」を読んでいたと思われます。「安保改定」という国の形をゆるがす問題が最高潮に達する時代であり、反対運動の先頭に立つ「全学連」の動向は社会的に大いに注目されていました。それゆえに、「東大新聞」や「東大教養学部新聞」に限らず各大学の新聞記事と主張は、大変注目されていました。

**学生時代、京大新聞との接点は。**

→残念ながらありませんでした。東京の他大学の新聞とは若干の交流がありました。忘れられないのは東京女子大の新聞会と合同でダンスパーティーを開いたことです。パーティー券は用意した100枚ほどが完売した記憶があります。ただし、わが部員の誰一人ダンスができず、みなが教室の壁を背にして立ちん坊でした。

**卒業後、文学部二十世紀学専修の初代教授として京大へ。京大新聞の印象は。**

→96年に赴任してから毎号購読し、退任前(02年)にはインタビューも掲載してもらいました。その際に部室を訪ね、あまり活気を感じなかった印象があります。京大には記者クラブも置かれており、こと学術・文化に関しては豊富な情報源が身近にあるはずです。取材の窓口をもっと広げてはどうかと思います。また、SNS全盛の時代に紙媒体が直面している困難に、学生新聞としてどう対応するかを真剣に検討すべきです。

\* \* \* \* \*

63年、東京大学文学部フランス文学科卒業。NHK解説主幹や京大文学部教授を経て02年から放送大学教授。副学長や附属図書館長を歴任し、現在は同大学名誉教授。文学博士。

**拾い読み⑥ 社説やルポで社会問題斬る 多彩な求人広告が下支え**



今回の「拾い読み」では、1958年1月から63年12月までを掲載する。この6年間は、週刊発行で号外3号を含む267号を積み重ねた。原則4頁で、増減することもあった。各地での闘争に関する話題のほか、映画や文学、芸術の記事もある。広告は、毎号書籍系が1面に載るほか、多様な企業の就職説明会案内のみで面を埋める号もある。以下、実際の紙面から記述を抜粋する。



60年代の自社広告

『京都大学新聞縮刷版』(二出版)をもとに作成

| 1963     | 1962       |              | 1961                  |              | 1960   |                    | 1959                | 1958         | 年        |           |           |           |              |             |            |               |             |      |
|----------|------------|--------------|-----------------------|--------------|--------|--------------------|---------------------|--------------|----------|-----------|-----------|-----------|--------------|-------------|------------|---------------|-------------|------|
| 11<br>爆発 | 4<br>教養部設置 | 10<br>キューバ危機 | 5<br>首相演説から<br>大管法闘争へ | 4<br>経済研究所設置 | 宇治分校廃止 | 5<br>工業教員養成所<br>設置 | 1<br>関西原子炉<br>熊取に決定 | 6<br>新安保条約発効 | 生・樺が亡くなる | 動隊との衝突で東大 | 万人規模のデモ↓機 | 安保改定めぐり数十 | 4<br>スト提起の社説 | 11<br>千号で改題 | 5<br>同学会再建 | 10<br>警職法反対闘争 | 7<br>岩戸景気到来 | でぎゅん |

## 1958年

**新聞社**▼戦後学園新聞の歩み:先輩、顧問に聞く座談会 **時事**▼共同行動デー:米水爆実験に抗議▼小学校教員ら座談会▼学園評論(社説):革新政党に勝利を▼教養部学生、自殺企図 19%→厚生省に防止研究班▼教員座談会:アメリカ資本主義の方向▼原水爆禁止世界大会:核武装禁止宣言を採択▼メーカー・商社、昨年より多い求人:ナベ底景気ひびかぬ?▼警職法改正に抗議:京大助教授、立命総長ら▼松川事件現地報告:この不正が許せるか **教育研究**▼南アで霊長類調査へ▼地球の変形と剛さ▼音声タイプライター:機械を音声で指令できる時代がくる▼世界一大きい電子顕微鏡▼研究所めぐり:生駒山天文台▼新築の助教授宅:しゃれた近代的ブロック建築▼奄美群島を訪ねて:水産学科報告▼高音プラズマ発生装置完成へ▼私の受けてきた教育:赤紙の前に大義なし、軍事教練が青春を圧殺▼科学技術者に望むこと:工学部教授「戦争中の考えがなお残存」▼京大留学の実態:案外多いチャンス▼「雪男」を生物学的に考える **大学運営**▼新春対談:京大総長・立命館総長→立命館学園新聞と共同企画▼来春、吉田分校を増築▼教養部クラス担任決まる:老教授中心 **学生**▼全学自治組織再建賛成 3800 票:学生部は認めず→学園評論:再建承認を要求しよう▼記念祭事件、両君に有罪判決、控訴へ→本人寄稿「けんか両成敗不満」▼メーデーで同大生逮捕▼三上君、滝川前総長を告訴▼学生総決起、京都で 800 人▼京大生の表情:たいてい日に一度は掲示板で奨学金の公示など見る▼連載「京大の顔」:応援団創設者▼荒神橋事件勝訴:権力の暴圧に勝利▼同学会代議員選挙強行:9 人に停学処分→学生「でたらめ」/教授「相互の努力不足」▼勤務評定阻止京都総決起▼各地で帰郷活動:市民と共闘体制組む▼京大合唱団、地方演奏旅行▼争鳴(投書):商業劇団のマネやめよ▼山岳会チョコリザ登頂▼関西ボート番狂わせ:京大敗れる▼京大オーケストラ、批判に反論:実りある忠言を▼京大スポーツの現状:大半が OB の寄付、部費捻出に悩む▼11 月祭に改称▼就職先の決まった学生一覽文化▼映画評:ポーランド映画「地下水道」▼書評:『宇宙への設計』▼近代文学の舞台:小豆島▼大衆性失



った現代詩▼ゴッホ展に思う 広告▼トリスウイスキー:テレビ・ラジオが5千台当たる抽選券進呈▼古河電気▼予備校20校▼麒麟レモン▼マツダ真空管

## 1959年

※11月23日号までは学園新聞、11月30日号＝通算千号からは京都大学新聞に改題

新聞社▼紙面の刷新:私の研究・大学生・海外から帰って・入試講評を開始／あの人この人・研究室めぐりを廃止▼写真部・本紙共同ルポ:西陣▼紙名変更「各大学も各々学生新聞を発行している現状や読者の皆様の要望などからみて」「変える時期だと考える」→京都大学新聞へ▼千号記念懸賞小説募集▼入山氏囲んでなごやかに:創刊千号を祝う会開く 時事▼日本の課題:半独立から真の独立へ▼最賃法政府案を批判する▼京大教官に聞く安保条約改定・砂川判決→多い判決の支持者▼国鉄学生運賃値上げへ▼今年の就職:破られた紳士協定▼学園評論:値上げに関心を▼教員座談会:日本の裁判→国内では条約より憲法／誤解される砂川判決／紳士的に取り調べよ 教育研究▼数理工学科・経営学科新設▼パルプ廃液から合成繊維作る▼戦後社会科教科書の変遷▼早期発見の手がかり:胃ガン撲滅へ▼ウイルス内部構造を撮影:京大教授が世界初成功▼スターリン主義からの決別▼京大学術調査隊、中央アに▼言葉がすぐ文字に:世界初の音声タイプ▼ゴリラ調査隊みやげ話:ゴリラは竹の子が好き 大学運営▼京大で働く人々:生協従業員／用務員／電話交換手／守衛▼200万円で時計台修理▼入試統計:近畿出身者増える▼原子炉設置予定地、寝屋川へ三転:住民また反対▼園遊会でのど自慢▼国立7大学、庶務課などを部に格上げ▼女子寮完成、19人収容▼揺らぐ大学自治:熊本大と愛媛大、予算削減で脅す▼研修センター実施へ→中止決定:臨時教授会「理解得られず」、抗議実る▼花山天文台に米から火星観測用望遠鏡▼京大、台風被災者に学費免除へ▼大学院奨学制度改革案決まる 学生▼同学会4年ぶり再建、賛成4千票超→学生部長も祝杯▼高校生座談会:政治より受験に関心▼角帽:学生の象徴は昔のこと▼学園論壇:厚生施設の改善を▼ふすま張り講習会▼安保改定阻止へ気運高まる→メーデー学生2千▼スポーツ・武道に集中:新入生の入部傾向▼宇治分校に赤痢発生▼詩人座談会:空想は社会変革の力▼奈良道徳講習会阻止闘争、初公判▼11月祭全国学生サークル研究集会:全国初の試み▼11月祭予算10万円増 文化▼週刊誌ブーム展望▼モスクワ芸術座▼健康軽視の文学部生▼荷風の死▼チョゴリザ登頂の記事を見て:金沢大学講師▼劇評:笑えない状況を知れ▼新しい送り仮名の問題点▼私の好きな道:北白川の並木道▼NHK局員座談会▼『学園評論』編集方針決まる▼魯迅の作家的特質:強い主情性 広告▼ご存知ですか?目に入るメガネ「京都コンタクトレンズ」▼テレビ局(朝日関西毎日読売)／一般紙(朝日京都毎日読売)▼予備校30校▼トーヨータイヤ▼富士フィルム▼味の素▼サンヨー電気釜▼東京ガス▼昭和電工▼積水化学▼京阪タクシー

通算1000号(1959年11月30日号)より抜粋(一部要約)

### ▼学園評論(社説):共通の広場にー学生と学生新聞のあり方

千号を機に名称も京都大学新聞と改め、更に進歩発展を目指す／現在、新聞未発行の大学は全国でも数えるほどしかない／沈滞した大学内の空気を打破し、若いエネルギーを結集させるために共通の広場を提供するのは、われわれの急務／学生新聞が大学や特定団体のいいなりになっては存在意義はなく、機関紙以外の何物でもない／学生新聞の役割の一つが、学生の手による大学、教授と学生の意見交換の手段でもあることを強く認識してもらいたい。

### ▼永遠につづけ:入山雄一(創刊以来の顧問)

一千号を数えることは驚くべき事実／戦前は広告や販売、庶務、会計のような仕事は、学生以外の者でやっていたが、戦後はこれらいっさいを学生の手で扱ってきたのだから、その苦労はひとしおであった／帝国大学新聞や三田新聞、大谷大学新聞という先輩にさきがけて一千号を迎えたことは何としてもめでたい／京都大学とこの新聞は、未来永遠につづくのであり、一千号はその向上への階一段をのぼったものと見るべきであろう／二千号、三千号をむかえる日あるを信じ、若い人々とともに、希望に胸ふくる思い。

### ▼アンケート:本紙と読者をつなぐ

→京大生174人を無作為に選び意見を求めた。

- ・毎週読むと答えた人は3割強(62人)
- ・サークルの動きを多面的に取り上げてほしいという要望が多い。
- ・黒板(編集員コラム)は皮肉ばかり目立つとの指摘があった。
- ・学生運動は、本紙としては日本の学生に課せられた任務として重点的に取材してきたが、さらなる充実を望む声とスペースをさきすぎるという声が相半ば。
- ・論文の執筆者に京大教授陣を多用せよとの要望が見られたが、テーマに適当な人であれば京大に限らず

執筆してもらう方針。

・社説が左翼的、一方的という指摘があったが、中立を保てという言葉はわれわれにとって空疎なもの。ニュース報道には可能な限りの客観性や中立性が必要だが、新聞には報道のほかに誘導という役割があることは今さら言うまでもない。われわれは読者に訴えたいことは社説やルポ、寄稿を通して主張していくつもりである。一方的とみられても、そういった読者との溝をいかに狭くしていくかに関心を払うだけである。

## 1960 年

**新聞社**▼千号記念懸賞論文募集:1位1万円▼定期購読:年300円▼合否通知電報▼『京大を受ける人のために』180円▼学園評論(社説):今年こそ力強い学生運動を／ストライキでたとう／当局は集会を許可せよ／国会解散まで全学閉鎖を▼「大学への道」係(受験向け質問コーナー)常設／編入試験問題の連載▼「読者の広場」欄設置:第1回テーマは卒業後の生き方、賞金千円 **時事**▼安保改定反対声明:京大教官200人▼渡米阻止へ全学連、羽田デモ決行→学生78人逮捕▼安保採決強行、京大教官や学生ら12氏の意見▼京大当局、安保闘争で告示:処分を避け警告「批判の立場はわかる」▼学園評論:池田内閣は総辞職せよ▼文部省、大学への人事発言権を強化へ▼学園評論:文部省の動きを監視しよう▼砂川判決考察:「憲法の番人」でない最高裁▼道徳教育が必修:教員免許規則変わる▼統一社会党にみる仏新左翼の動き **教育研究**▼白象伽藍を発掘:中近東学術隊▼九州の銅鐸、時代検証で学界二分▼脳腫瘍の増殖に成功:ガン研究打開の可能性▼科学にかける夢:火星ロケット／鋼鉄しのぐ合成樹脂▼クロレラ新加工法に成功▼フムボルト大学印象記:学術のメッカは今や大衆大学に移った▼高校教育課程改定:混乱と不審招くな▼連載「師」:足立文太郎先生「酒が生んだ解剖学者」▼大学院の問題点▼産学共同は何をもたらすか **大学運営**▼薬学科、学部に昇格▼原子炉設置2億円計上:住民説得へ→第5候補に熊取町誘致→決定▼工化総合館を新築▼工業に3学科を新設▼入試講評:人文地理「熟考して回答を」▼ミシガン大学と姉妹の縁結ぶ▼滝川前総長再び出廷:記念祭事件控訴審→証言食い違う▼総長が困窮学生に基金▼新設食堂の位置で平行線:協議会「西につくれ」、教養部「東につくる」 **学生**▼京大時計台前に1500人:全国の学生、安保阻止へ総決起▼本紙京大生調査:安保改定9割が反対／回答千件以上▼学園論壇(投稿):法学部に自治会を作れ▼同学会に平和賞:世界平和評議会▼主流派・反主流派分裂:大混乱の全学連臨時大会▼全学連分裂、全自連が新発足▼学生座談会:不合格者への助言▼ルポ:第9回教育系学生ゼミ→2700人の学生が討議▼戦争体験継承への道:新わだつみの会発足▼宇治分校自治会、結成難航▼薬学部自治会発足へ▼東南ア留学生座談会▼京大探検部トンガへ▼アイスホッケー5大学戦優勝▼京都学生駅伝、京大2位▼ボート部五輪予選へ▼スポットライト:ローマ五輪に馬術で出場の荒木氏▼豊かになった京大生の財布:宇治分校生活調査→食生活充実、聖徳太子5人ペロリ **文化**▼文学に表れた京大生▼映画評:ナチス興亡の実態を暴く▼冬は底冷え:京都と京大案内▼書評:現代マルクス主義の硬直した既成性を打破／樺美智子遺稿集→左翼の爆風を復活せよ／戦後日本の科学運動(杉山幸丸・現名誉教授の院生時代の寄稿) **広告**▼京大生協:安保改定阻止と物価値上反対のため、みんなの力を結集して新年早々から闘おう▼銀行(住友・三菱・京都信用／自動車学校(デルタ・西院)／伊藤忠／ダイハツ／テイジン／東京電力／日本通運／博報堂／富士フィルム／／富士フィルムマツダ／丸紅飯田／村田製作所／名鉄電車

## 1961 年

**新聞社**▼新コラム→若者の論理、複眼時評、今週のベストセラー▼応援歌歌詞募集:応援団主催、新聞社協賛▼定期購読:年350円▼編集員募集→1回生対象、作文「最近感じたこと」課す▼懸賞小説1位1万円▼合否電報通知▼女子事務員急募:高卒18歳以上▼第5回「読者の広場」募集:入選なし、佳作2編→造型性やアクチュアリティない▼第6回「私の安保総括」▼複眼時評執筆者:交代で健筆を **時事**▼部落の要求は全国民の要求:解放同盟中執の寄稿▼炭坑のかげ:貧困につけこむ暴力▼どう見るソ連の超大型核実験▼右翼テロとジャーナリズムの責務:ジャパンプレス記者▼政暴法と新聞:言論の危機もヨソごと→東大新聞研究所員寄稿▼共産党綱領草案批判▼近畿学生部課長会議、国鉄運賃値上げに反対▼混迷する医療制度:病院と診療所の機能分化が急務▼学園評論:文部官僚の権力掌握に反対／国内法改悪に警鐘を／米ソの核実験反対→重要なことは軍事力強化を阻止し反帝闘争を組織すること **教育研究**▼科学にかける夢:人工頭脳の可能性→経済性が障壁／人間なみに処理できる方式は見当すらつかない▼京都派憲法学の没落:大阪市立大教授▼資本論をいかに読むか▼日本のサル社会学▼日本列島生成に新説:磁気方向から発見▼入試講評:生物「読図能力が不十分」農学部採点教授談▼留学生は訴える:留学生会館が第一 **大学運営**▼非常勤職員削減か:研究体制に響く理科系▼スクスク育つ化石:構内のメタセコイヤ▼ガタガタの分校正門▼

新設される学生ボックス▼スポットライト:吉田寮の世話に半生をささげた野田さん▼なぜうどん高くなる:苦しい経営に物価高の嵐▼再選・平沢総長インタビュー:学生会館建てたい▼黒板:せめて助教授まで選挙権を拡大できないか▼世界初の科学水族館:瀬戸臨海実験所に▼学園短信:滋賀大、愛知県女大、お茶大、立命大、早大、慶應大▼奈良道徳講習会阻止事件、全員に執行猶予▼カモにされる学生:ほくそえむ私学経営者学生▼焦燥するアメリカの若者:全米学生協会の招待で渡米した編集員の寄稿▼最低賃金値上げ:600円▼体育会、会費徴収の全学組織に▼学園の眼:射撃場に体育会怒る→予算不足が絡む▼学生運動への提言:高校教諭「現実から遊離し沈滞の道をたどる宿命」▼関西六大学と京大野球部:合併問題で背水の陣▼京大生の食生活:満腹だが栄養不均衡▼京大生の生活観:真面目な学生ぶり▼教養部自治会が発足▼教養部代議員会にストで解散命令▼編集員座談会:主流派圧勝の背景を探る▼法学部自治会結成▼若者の論理:恋愛めぐり拭えぬ古い観念▼争鳴(投書):主流派と反主流派のマイクの奪い合いに「学生運動に僕たち1回生は如何なる態度でのぞんだらいいのか」▼前夜祭、模擬店や仮装行列:11月祭総予算150万円 文化▼ニュース映画の活路:映画美学の冒険の場→学生寄稿▼教員座談会:曲がり角にきた日本映画▼書評:テレビジョンの功罪▼現代日本における笑いの社会心理▼京の桜/年賀状に思う:入山雄一▼名前あれこれ:タバコさん・タコセさん 広告▼「祝11月祭」や就職説明会の案内に際して複数の広告で1頁埋める面も▼京大親学会/一般紙(朝毎経)/飲食店(進々堂、鈴蘭食堂、大安食堂、ハイライト、らんぶる、ユニオン、柳月堂)/沖電気/花王/キャノン/JAL/ソニー/電通広告論文募集/東京電力「諸君の将来を約束する」/東洋電機「新幹線で躍進」/トヨタ/日本長期信用銀行/阪神電車/藤田組「学生重役を望む」/丸三証券全面広告/ヤマハ

## 1962年

新聞社▼米国留学中の編集員へのカンパが1万2304円集まった→被曝写真などの送付に使用、平和会議で発表へ▼定期購読年300円「反戦自由の伝統を守って40年」▼合否電報1通100円▼懸賞小説→第3回は67編応募▼『京大を受ける〜』250円▼新コラム「文学の中の青春像」募集▼読者コラム(学園論壇・争鳴)募集▼編集員再募集:1回生若干名→3か月間は見習い 時事▼EECとイタリア:読売新聞論説委員▼ワイマール憲法の没落:法学部教授▼国際的交流としての新左翼→スターリンの世界観を覆す試み▼貿易自由化と日本経済の動向:関学経済学部教授▼ガガーリン京大を訪問:2千の学生を激励▼ルポ:創価学会→単なる宗教団体かファッショ勢力か▼ルポ:長崎造船の新左翼▼学園評論:戦う武器を守ろう:京都市長選では市公安条例撤廃を公約している革新系候補を当然支持する必要があると訴えたい/大管制粉碎まで逃走の手をゆるめるな▼現地に見る中央公聴会→抗議行動で公聴会の性格が暴露したという意味で高く評価しなければ▼札幌公聴会阻止闘争を見て:自らの姿勢を権力側に預けての闘争は明確な方向を打ち出せない▼教授会の権限縮小:国大協、管理運営法改正へ→善意が逆用される恐れ▼今年度求人先一覧→募集人員や初任給▼複眼時評:交通事故に思う→自動的にブレーキがかかるものができるのか 教育研究▼アマゾンから珍客:ナイトモンキー持ち帰る▼研究室便り:金属微粒子の物性を開拓▼学園の眼:研究所教官も学生指導→文学部教授会、文部省に抗議▼教員座談会:教授という身分的特殊な地位は現実には合わない▼複眼時評:教官の給与改善=研究体制の改善である▼東南ア研設置の動き:まず現地調査団派遣▼文学部30人が落伍:卒論締切 大学運営▼ライス20円に値上げ▼生協赤字125万円▼争鳴:生協専務理事→記事「生協書籍部の赤字問題」に答える▼生協花谷購買部を新設▼教官囲み芝生談義:和やかに園遊会→約1500人がつめかけ大盛況/出席した総長ら教官と学生がジョッキ片手に懇親 学生▼寮自治は全学生の問題:吉田寮総務「大学当局は寮の自治封殺図る」▼経済学部、学生会誕生▼スポットライト:37歳の京大生/ハンドボール学生五輪に出場の学生/3回生で外交官試験に合格した学生▼京大生の生活と意見:8割以上が改憲に反対→回答約800▼写真部、高島屋で全京大写真展開く▼対東大戦姿消す:国立七大学戦に吸収▼転機に立つ京大体育会:悩みは予算不足/体育会幹事長「現在の戦いぶりは目をおおいたくなる」「下宿で夢想する青白きインテリより、スポーツマン・インテリの方が全てにモテるのは当然」 文化▼音楽評:交響楽団演奏会→若々しく淡泊な「運命」▼『原始社会』の今西書評に反論:著者「意図とかけ離れて受け取られた」▼海を越える日本詩歌:助教授翻訳、独で出版▼滝川先生と新聞:入山雄一 広告▼エッソ/塩野義/島津/ソニー「若い頭脳求む!」/大丸/日本オリベッティ全面広告

## 1963年

新聞社▼京大応援団が愛唱歌作成を計画、本紙は後援→ふるって応募を(賞金3千円)▼第4回懸賞小説→入選なし「例年になく低調」/第5回懸賞小説▼投稿募集→争鳴・学園論壇/購読料変更:年400円「学内唯

一のマスメディア」／編集員募集 時事▼「政治集会は自治の範囲外」ポポロ事件、最高裁が無罪判決破棄  
▼資料：大管法→編集部「我々の反対の立場を再度確認する意味で特集」▼府学連学生京都市議会場に  
「乱入」：市長が学生告訴▼ルポ：原潜艦を迎える佐世保→軍港あつての佐世保、反原潜闘争の大きな壁▼  
学園評論：アジア政策に注視を▼この眼で見たキューバ：米経済学者寄稿▼黒人問題と中ソ論争：欧亜大連  
邦は夢か 教育研究▼滝川元総長の絶筆『激流』を読む：入山雄一名誉顧問「再建後の法学部教授会があん  
な状態だったとは想像のほか」▼人間不信から自己嫌悪に▼米エール大から京大図書館へ、言語や風俗、  
習慣から政治経済にいたるまで世界の文献を分類した貴重資料届く：世界に 25 組のみ▼海外出張教授の名  
前と行き先一覧▼工学部に鎮座する「天皇」教授▼複眼時評：産業界が真に産学共同を望むなら、工科系に  
金さえだせばという安易な考えをすてねば▼座談会：教育実習を終えて→増大する教師不信：詰め込み路線  
が浸透 大学運営▼1 円玉なら安くなる：生協が釣銭不足に苦肉の策→今度は外壳が休業：予想以上の赤字  
で→カレーなど値上げ▼「全学的な討論を」総長、選挙権問題で言明→本紙学生世論調査では 85%が拡大  
賛成、教員アンケートでも圧倒的→結局拡大せず▼学生懇話室の 8 年間：修学問題が半数▼京大の数字→  
全国の敷地合計は約 1470 万坪、9 割は農学部演習林▼今年度予算 43 億円▼教養部にゼミできる：独文など  
▼金 5 万 8 千円ナリ：国鉄から京大に寄贈のバス▼京女大の学生新聞「きづな」、大学側が処分示唆▼厚生  
補導の問題：早稲田大、当局が委員選挙／慶應大、第二大学新聞誕生→編集部「学生自治を圧殺しようとする」、  
背景に中教審の答申も▼総長、東南ア諸国へ▼農薬研設置決まる▼薬学部、大半を焼失 学生▼応援  
団、体育会を脱退：独立採算制で再出発▼劇研誕生の裏話：想像座の演目めぐり分裂▼学園評論：寮生に支  
援を→学生の権利主張は、真の意味で学内民主化を勝ち取るためにも絶対必要／寮生を支援し、全学的問  
題として対処を▼寮規定改正、学生自治を強調：対立点は入寮選衡権、今後再燃も▼京大ワングル、初の海  
外調査計画▼京大生の生活と意見：本社世論調査→社共支持が伸びる▼京大生の生活→2 年間は吉田で  
授業／下宿難は不可避／運動部はアマ精神を堅持・資金不足がガン／文化部は「自己意識」追求の場・学生  
の 3 割が参加▼教養など 5 学部ストか：11・1 府学連統一行動→各自治会準備活発▼全学連再建の方向：学  
生運動の現状をさぐる 文化▼家族の将来：崩れる「家」の社会的役割→哲学者寄稿「死滅し果すべき運命に  
ある」▼書評：レーニンの盲点を指摘▼反論の反論：ソ連映画「僕の村は戦場だった」をめぐる紙上討論 広告  
▼一般紙（大阪・産経・サンスポ）▼証券各社／カネボウ／サントリー／シャープ／住友商事／デンソー／明  
治／森永／雪印

## 【連載第七回】京大新聞の百年 不況に人不足で休刊、復活し「闘争」スタイル脱却

2024.04.01



70 年 4 月の合格者名簿号の立ち売り

2025 年 4 月の創刊 100 周年に向け、京大新聞の歴史を振り返る連載の第七回。時系列で振り返る「通史」は、1970 年から 79 年までを扱う。なお、内容は 1990 年に出版された書籍『権力にアカンベエ！京都大学新聞の六五年』から大部分を転載して再構成する。このほか、実際の紙面から記事を書き留める「拾い読み」は、1964 年から 69 年までを掲載する。また、当時在籍した卒業生への聞き取りも実施した。連載を通して社会背景や

編集部の理念を顧みることで今後の紙面づくりに活かしつつ、各方面の歴史考察への寄与を期待する。

（編集部）

目次

## 通史⑥ 休刊・復刊と竹本処分（1970～1979）

### コラム⑧ 癖字も読める植字工 70 年代の印刷事情

### 聞き取り③ つぶさないことが最大の目的 1970 年代在籍者に聞く

### 拾い読み⑦ 増える「闘争」記事に批判も 企業広告もあふれんばかり

## 通史⑥ 休刊・復刊と竹本処分（1970～1979）

### 前回の振り返り

60 年代後半、学費値上げなどの身近な問題をめぐって各大学で火がついた学生運動は、実力行使を伴う大規模な闘争に発展した。文部省による管理強化や揺らぐ大学自治、さらには教授を頂点とする学部運営への批判といった大学のあり方の問い直しが叫ばれ、各大学でいわゆる無党派の学生らが数千～万単位の規模で全学共闘会議（全共闘）を組織。「自主的」な解決のために警察導入も辞さない大学当局と激しく対峙した。京大でもバリケードによる建物封鎖や機動隊との衝突といった光景が珍しくなくなった。特に 69 年 9 月の学生による時計台封鎖と、約 2 千の機動隊の実力行使によるその封鎖解除は、「京大闘争」の高揚と後退を象徴する一場面となった。

京大新聞の編集員は、ヘルメットをかぶって各地に赴き、紙面で連帯を訴えたほか、闘争委員会の担い手にもなった。70 年代にかけて全国に消耗の雰囲気漂うなか、編集部は、くすぶる学内外の問題に加え、団体運営の課題と向き合うことになる。

### 闘争の総括、編集長制廃止

「京大闘争」の高揚が峠を越えた 1970 年 11 月、京大新聞は 1500 号記念号を発行。編集部の総力を計 40 頁におよぶ紙面に結集させた。3 部構成で、〈シンポジウム・反戦派労働運動の到達点とその課題〉〈激動の 70 年代を闘いぬくために〉などの特集や懸賞論文・懸賞小説を掲載した。編集員総出で学内各所に散らばって売り子に励んだ。通常号より 30 円高い特価 50 円だったが、飛ぶように売れ、学内販売だけで 2 千部以上さばいた。広告もよく集まり、この号だけで 58 件載った。

学園闘争の総括がこのころの大きなテーマで、その模索が京大新聞社の運営にも反映される。70 年 4 月、それまで置いていた主幹や編集長といった役職を廃止し、幹事会体制に切り替えた。週 2 回の編集会議を組織運営の要にすえ、紙面づくりは輪番によるデスク担当制にして分担の固定化を避けた。これは全共闘運動の反省から生まれた組織論だった。すなわち、教授を頂点とするピラミッド型構造の不平等性を追及するなど、学園闘争を通して大学のあり方の問い直しを迫るなかで、主幹・編集長制というみずからの組織に顕在化する権威主義的な側面にメスを入れたのである。

### 全国の運動体の拠点に

70 年 12 月には、各大学での運動の過熱に伴って停止していた全国学生新聞連盟が再建され、2 年ぶりの会合が開かれた。京大新聞が委員長校となり、全国 75 の学生新聞関係者 180 名超が京大に集まった。▽全共闘運動の総括▽なぜ新聞をつくるのかといった話題で盛んに議論が繰り広げられた。

当時、各大学で闘争が下火になり、全共闘が解体するなど全国的に諸団体が疲弊していた。一方、京大



新聞は活気を保った。京大内の学生新聞という枠を突き破り、みずから押し広げた領域や集会で知り合った人々を読者とし、学生運動での逮捕者らに新聞を差し入れたほか、各地の書店で販売した。全国各地の運動体を支えるメディアとして、交流の拠り所となった。

創刊以来の紙面を全6巻（のちに増刊）の縮刷版として刊行したのもこの時期である。高度成長期に伴う豊富な広告収入が、これらの活動を支えた。

70年12月の全学新大会

#### 広告激減、新陳代謝進まず

72年から74年にかけては、ニクソンショックなど世界的な経済危機が起き、日本の経済社会も高度成



長のひずみが目立ちはじめた。学生運動では、72年の沖縄返還・自衛隊派遣、73年の米空母ミッドウェイの横須賀母港化、74年の米大統領来日・訪韓に際し、阻止に向けた実力闘争が盛り上がった。狭山裁判糾弾や刑法改正・保安処分粉碎（※）も熱を帯びた。一方、浅間山荘・連合赤軍事件や連続企業爆破事件などの過激な闘争への反発から、大衆運動・学生運動は後退の一途をたどった。

※前者は部落差別による冤罪であるとの追及、後者は「犯罪者予備軍」の処分を含む法案反対。

このころの京大新聞の紙面は、1970年ごろのスタイルを続け、沖縄などの政治闘争の現場や課題領域に編集員を派遣し、闘う者からみた報道という路線を貫いている。教育改革、公害、労災など、現在にもつながる話題もみられる。しかし、大衆運動・学生運動の後退が活動基盤の弱体化につながり、73年のオイルショック以降は広告収入の激減による財政難にも直面した。さらに、69年ごろから定着していた闘争・編集・生活を共にする編集員の活動スタイルは、新編集員の定着に結びつかず、サークルとしての新陳代謝が進まなかった。74年以降、週刊体制の維持が困難になり、合併号が頻発するという苦しい時代を迎える。

#### 「竹本処分」いったん凍結

京大で72年11月、史上3度目の全学学生大会が行われ、2500を超える学生の投票により同学会の民青系執行部が罷免された。京大新聞はこれを12月1日号のトップで取り上げ、「権力の庇護の下に闘争への露骨な敵対を行ってきた執行部＝民青系学生をリコールし、闘う同学会（京大全学自治会）の創出へ向けた第一歩を踏み出した」と報じた。

この再建同学会を中心に73年、第一次竹本処分粉碎闘争が繰り広げられることになる。京大全共闘の理論的な指導者のひとりだった経済学部竹本信弘助手は、71年8月の自衛官殺害事件の重要参考人として指名手配されて以来、潔白を主張して地下潜行していた。学部当局が無断欠勤であるとして73

年1月に免職処分を上申し、評議会での審査がはじまった。これに対し学生・教職員は「学問の自由への弾圧」と批判し、ストライキ（授業放棄）や建物封鎖などの反対運動を展開。不安定な学内情勢から、卒業・入学式が中止される事態となった。結局、総長の交代などもあり処分が凍結された。

### 「3か月の準備期間」

昭和50年代（1975年～）は戦後最大の不況で始まる。狂乱物価を抑えるための金融財政政策が景気を冷やし、円高の進行や78年の第二次オイルショックも追い打ちとなった。打撃を受けた各企業は減量経営による安定を図り、省エネルギー型産業が台頭。世界的な苦境のなかで、日本経済は総体的地位を高めるに至った。

75年春、創刊50周年記念特集を出したばかりの京大新聞は、危機に直面していた。編集員はわずか2、3人。それも4回生や院生で、後を継ぐメンバーがいない。運営資金も枯渇寸前。

学生運動を取り巻く社会環境は厳しく、激しさを増す中核派と革マル派の内ゲバにみられるような「過激派」の動きが市民の支持を遠ざけた。大学では、親から学生運動をやらないよう釘を刺される学生が増え、いわゆるノンポリの比率が高まった。ビラを受け取ることすら拒む学生が多くなった。

全国的な学生運動の退潮に不況も相まって、各地で大学新聞が廃刊した。京大新聞も無縁ではなく、75年5月、やむなく休刊した。しかし、灯を消すまいと、同学会メンバーら1・2回生に加入を呼びかけ、夏休み明けに新体制が始動した。編集員は6人となり、再び輪転機を回すことができるようになった。発行ペースは週刊から毎月1日と16日の半月刊に落とした。復活後の9月16日号では、社告で約3か月の休刊を詫び、「3か月間の準備期間をもって定期的発行の体制も整いつつある」と報告。この号のトップ記事では、「天皇訪米を前に実力阻止へ陣形構築」との見出しで各学部の集会の様子を報じており、以前と変わらず学生の動きを追っていく姿勢がうかがえる。なお、この号で「来年度からは週刊に戻し、読者諸々兄弟のご期待に応えん」と記していたが、月2回の発行体制が定着し、今に至っている。

### 失意の竹本処分強行

73年に竹本処分が一時凍結され、翌年春は入試や卒業・入学式が通常どおり実施された。

しかし、77年からはじまる第2次竹本処分紛争闘争が、キャンパスを再び燃え立たせる。この年の2月、京大評議会は竹本助手の分限免職をめぐる審議を再開した。就任直後に「理解を深めたい」として議論を凍結していた岡本道雄総長が、懸案解決に乗り出したのである。京大新聞は2月16日号のニュースで、「総長岡本はとうとうその本性を現し、欠席密室審査による処分強行を図ってきた」と警戒し、「不当なデッチ上げ政治思想弾圧」と批判した。3年前の処分紛争闘争から時は流れ、学生の大半は竹本氏に会ったことすらない。それでも、その処分は学問・思想の自由に関わるもので、戦前の「滝川事件」の再来と受け止められた。同学会は再び闘争の狼煙を上げ、文・農・経済・教養の各学部が相次いで抗議のストライキに入った。

大学当局は学外施設を転々としながら43回にわたって評議会を開き、審議を続けた。採決直前の段階

で、岡本総長は学生側からの団体交渉の求めに応じた。77年6月17日の夜のことである。法経一番教室は約千人の学生・教職員で埋まった。約6時間に及んだ交渉では、処分は思想弾圧であると追及する学生らに対し、大学当局側は本人の思想ではなく連絡不通や無断欠勤を問題視していると応酬するなど平行線をたどったものの、同学会が「断固粉碎」を改め「票決を学内で行うなら実力介入しない」と提案し、岡本総長は「明日の評議会は学内で行う」と応じた。のちに紙面でこのときの雰囲気について「総長の『譲歩』に『楽観的』雰囲気」と記したように、処分案の否決や棚上げが期待された。しかし、翌日の6月18日、「静かな怒り」をもって学生らが包囲するなか時計台で評議会が開かれ、3分の2の賛成で竹本氏の免職を決定した。

処分が決まった夜、京大新聞はただちに号外づくりに着手した。通常、刷り上がりまで5日ほどかかるところを、大阪・京橋の印刷所に拝み倒して2日で印刷してもらった。1面は〈竹本処分強行される〉の見出しと、団交中の法経一番教室をぐるっと眺めるパノラマ写真。2面には竹本氏が友人の教官に送った委任状の記事を載せた。正面前で配ると、飛ぶようにさばけた。

77年6月23日号外

処分に反対する学生らが総長室前で座り込みを行うなど抗議を続けるなか、大学当局は77年末にかけてたびたび機動隊を構内に導入した。正門付近には連日、警官や機動隊が待機するようになった。この異例の状況について、京大新聞は岡本総長にインタビューを実施して追及。「開き直る総長」と題した



解説記事をつけたうえで次のようなやりとりを掲載している。〈一学生は「機動隊常駐体制」と糾弾している。

岡本もちろん学生の自由な自治活動を尊重しますが、現在のような教官に乱暴が加えられたり施設を壊されたりするような学内の状態では止むを得ないじゃないですか。

一竹本処分に反対する側は、処分の審査過程そのものに疑惑があると主張している。

岡本疑惑を持つことは構いませんが、異議を唱えるその方法が良くないんですよ。学内の理解を得るために、京大広報や総長所感などで十分説明してきたんですがね（一部要約）

大学当局はこの年の末、闘争の象徴として時計台に白ペンキで書かれていた「竹本処分粉碎」のスローガンを消し去った。さらに、「学内正常化」の旗印のもと、ビラ張り禁止や立看板撤去、正門の夜間ロックアウトなどの措置を打ち出していった。



77 年 11 月 16 日号総長インタビュー

紙面刷新、社会問題の先取りも

当時の京大には、成田闘争などに力を注ぐ同学会と、共産党の指導を受けて「暴力学生追放キャンペーン」を張る民青が真っ向から対立する構図があった。京大新聞編集部は、全学自治会としての同学会の動きを主に伝えつつ、編集方針は完全な独立を保った。編集員たちは運動の現場に入り込み、マスコミに報道されない事実を自分の目で掘り起こそうと努めた。こうした方針のもと、時代に先んじて社会問題の紙

面化を結実させる例もみられた。欧州の反原発運動を紹介する特集を組んだのは、スリーマイル島事故（※）で世間が問題に注目する 2 年前となる 1977 年のことである。

※79 年 3 月 28 日、米ペンシルバニア州スリーマイル島の原子力発電所で冷却水が流出するなどの事故が起こった。商用原子炉として世界初のメルトダウンの衝撃は大きく、原発の「安全神話」に亀裂が生じた。



77 年 10 月 16 日号の反原発特集

また、75 年の休刊の一因には一般学生からの遊離があると考え、学生メディアとして新しい編集方針を模索。「読む価値があると同時に、読まれる紙面」を目指した。ニュースを基本としてルポやインタビューに力を入れたほか、見開き 2 頁を活字で埋め尽くすような大論文の掲載は控え、堅苦しくない要素も加えるよう心がけた。かつてのような「昼はヘルメット、夜は原稿書き」といった生活スタイルが消

えたことも影響したのか、編集員が増え、特集号では通常の 4 頁を大きく上回る十数ページ建ての大型企画も可能になった。兵庫県の福祉施設で起きた「甲山事件」の冤罪を訴える公判傍聴記や、日本アジア・アフリカ会議が 79 年 4 月に京大会館で開いた反体制詩人・金芝河のシンポジウム記録などを長いスパンで取り上げた。

「反原理」に着手したのもこのころである。勝共連合や統一協会を背景に持つ原理研究会は、大学へ勢力を浸透させる手段として、70 年代前半から各地の大学で学生新聞を装った活動をしていた。京大では「京大学生新聞」という題字の新聞が出された。研究室に投げ込んだり学内で無料配布したりする程度だったものの、卒業生から寄付を集めるなど、各大学の学生新聞は妨害に苦慮した。京大新聞では、

77 年 10 月から「原理研レポート：その腐蝕の軌跡」と題した連載を組んだほか、「京大学生新聞」からの寄稿依頼に協力しないよう教官に呼びかけるアピール記事を掲載している。

77 年 6 月 16 日号の「反原理」呼びかけ



### 卒アル開始、経営上向き

京大新聞社の経営面は、75 年を底にして徐々に上向いた。79 年の大学共通第 1 次学力試験の開始をステップに受験産業が事業を急拡大し、予備校などから盛んに広告が入るようになった。また、新たに卒業記念アルバムの製作を引き受け、年 150 万円ほどの編集料を得た。当時の年間支出は約 800 万円で、これらの収入は大きな助けとなった。懐具合がわずかながらも豊かになり、中古のライトバンや一眼レフカメラを購入したり、学内配布ボックスを新調したりした。

79 年 6 月、通算 1800 号に到達した。大正末の創刊以来、半世紀にわたって京大新聞を見守ってきた入山雄一・名誉顧問が永眠したのは、この年の 11 月 1 日夕刻だった。



現在も使われる販売ボックス

コラム⑧ 癖字も読める植字工 70 年代の印刷事情



70年代の京大新聞の印刷事情について、次頁に掲載する聞き取り取材のやりとりから紹介する。（発言者の情報は次頁参照）

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

篠田 割付の作業が大変だった。徹夜することもしばしばだった。

橋本 今はパソコンでやると思うけど、当時は紙面の設計図を手書きして印刷場で植字工さんに渡して、活字に組んでもらう。

篠田 教授に書いてもらった原稿の字が読みづらくて。そのまま植字工さんに渡したら、彼らは読めるんだよ。それで仮で刷られたものを見て校正した。あの人たちすごかった。

橋本 反転した文字も読めるし。一字ずつ積み木みたいに組み立ててヒモでしばって、台の上に組み上げていく。

篠田 何字足りないよとか言われて、その場で書くんだよ。

橋本 最後に厚紙を押し当てて型を取って、半円形に反った鉛板をつくる。それを2つつなげて1回転分にして輪転機へ。

篠田 そこまでいくと修正不可。鉛板がぐりぐり回り出すのを見届ける瞬間が嬉しかった。

岸根 大阪の福島の印刷所まで行ったね。植字工さんが原稿を勝手に変えてしまったこともあったな。見出しに韓国の「ソウル」と書いていたのに、余白の都合で「京城」に変えられた。日本が統治していた時代の呼び方だからまずい。こっちも気がつかなくてそのまま出して読者に指摘された。あれは困ったね。

### 聞き取り③ つぶさないことが最大の目的 1970年代在籍者に聞く

70年代の京大新聞を知る7名に話を聞くことができた。以下、東京と京都にて座談会形式で実施した取材の内容を掲載する。前半の東京での聞き取りでは、世代が近く今も飲み仲間だという3名に休刊後の再建期を振り返ってもらった。後半の京都では、学生運動の高揚期から退潮期へと世代をまたぐ4名に、数年の間で様変わりした編集部内外の様子を回想してもらった。（聞き手 村・史）

#### (1)東京の3人のやりとり



右手前が岸根正実さん（1972-78）、奥が橋本聡さん（1975-80）、左が篠田謙一さん（1975-79）＝3月9日、京大東京オフィスにてサッカー同好会から増員一入社の動機は。

岸根 4回生のころ同学会の知り合いに誘われて入った。京大新聞に人がいなくて後が続かなそう

と言われて。まだ卒業するつもりはなくて、やることを探していたからよかった。すでに橋本くんがいて、あとは先輩2人と同じく誘われた2人かな。

篠田 私は3回生のとき。当時は、学生運動が盛んなころの世代が抜けて橋本さんがほぼひとりでやっていて、彼から手伝ってと言われて入った。きっかけはサッカー。体育の授業で彼がゴールキーパーをやっていて、私が入っていた同好会に誘った。広島県選抜の経験があってすごくうまいんだよ。でも彼は新聞で忙しい。どうにか試合に出てほしくて、同好会から私と友人（阿形清和さん、75 | 79 年）が新聞を手伝うことにした。

橋本 75 年入学後、体育会のサッカー部に入っていたけど、ボール磨きをさせられるような当時の雰囲気嫌いで夏前にやめてしまった。やることがなくフラフラしていたら、西部構内の建物の壁に京大新聞社と大きなペンキ文字で書いてあるのを見かけて興味を持った。一般紙は普段から読んでいたし、文学部だし。部室に入ってみると事務員さんしかいない。関心があると伝えたら、あとで先輩が下宿に来て、「今は休刊中で、夏休み明けから復刊するから一緒にやろう」と言われた。そのとき編集部には先輩2人だけ。復刊したものの、低空飛行が続いていた。

一編集部の雰囲気は。

篠田 そもそも会議には人が集まらない。

岸根 会議というより、書いてきた原稿を持ち寄って「ここはおかしい」と言い合う程度。

篠田 次の紙面をどうするか話したな。回数を確保するために合併号もたくさん出した。

岸根 合併号は第3種郵便の認可との兼ね合いもあった。

広告が入らない

篠田 75 年から数年は、新聞をつぶさないことが最大の目的だったね。全共闘世代の後片付けをする感覚で。

橋本 全然お金がなかったね。

篠田 世の中の経済が落ち込んで、それまでけっこうなお金になっていた就職情報の広告が入らなくなった。

橋本 学生運動の全盛期は、紙面はハードでも、たくさん企業広告が載っていた。69 年をピークに、学生運動のうねりが収束し、その後、高度成長もおわっていく。

岸根 石油危機が73年で、企業の業績が顕著に悪くなったのが75年ごろだった。

一広告を頼んでも断られる。

岸根 全然だめ。昔は営業活動しなくても入ってくると聞いた。

橋本 このころ他の大学新聞がどんどんつぶれていった。

篠田 そんななかで、存続にすべてを費やした時代だったね。枠をなくしたら終わり。続ければいいことがあると思っていた。

橋本 上の世代には営業担当がいたけど、僕らのころは役職を割り振れる人員がいらないからみんなで手分けした。力を入れたのが予備校広告集め。当時、79 年から共通一次試験が始まるということで、予備校が積極的に宣伝していた。営業に行くと快く出稿してもらえたね。あとは合格電報（49 年には

じめた合否通知サービス）も収入になった。京大新聞は大学から合格者名簿をもらえたから、発表の日  
に受け取りに行って、手分けして電話する。

岸根 ただ、合格電報は新聞以外の人も集めて回していたから、バイト代として飲み会をやると稼いだ  
お金がなくなる（笑）。

橋本 卒業アルバムの制作をはじめたのも大きかったな。出版社側から窓口をやってくれと話を持ちか  
けられた。

一大学当局ではなくあえて京大新聞に言ってきた。

篠田 そうそう。大学に断られたのかも知れないね。

橋本 こうして金銭的に少し余裕ができて、中古車を買ったり学内の販売ボックスを新調したりした。  
それまでは先輩がつくった木製の箱だった。

篠田 ゴミ箱扱いされていたね。

岸根 知り合いに鉄工屋の息子がいたから、頼んでつくってもらった。

橋本 岸根くん凶面を書いたね。壊されないように。まだ使っているんだね。他の収入源として、もと  
もとつくっていた『京大を受ける人のために』という本も復活させた。名古屋の河合塾に泊りがけで行  
って、紙面のエッセイとかを集めて載せる。

篠田 居酒屋にも広告をもらいに行ったね。結局飲んで支払うお金の方が大きかったけど……それと出  
版広告。あれはユーピーユー（※）が扱っていた。

※就職情報誌で台頭する「リクルート」に対抗して京大新聞の卒業生らが立ち上げた採用広報事業の会  
社。

全国に声を聞きに行く

橋本 全国の大学で学生運動が収束するなか、京大は『週刊朝日』が「ガラパゴス」と表現したように、  
全共闘時代の雰囲気が残っていた。ストライキをやるのが京大に来た者の務めだと言う人もいた。一方、  
世の中はセクトの内ゲバや連合赤軍、東アジア反日武装戦線などのニュースにふれて、ハードなものに  
拒否反応を示していた。僕たちはその中間にいた感覚。先輩の世代は自身が学生運動のプレーヤーとし  
て記事を書いていたけど、僕たちはそうではなくなっていた。

篠田 横から見るスタンスに変わっていった。

岸根 なかには思想的に偏向している編集員もいて、党派に取材してきたと言って運動の記事を書こう  
とするんだけど、私がボツにしたね。そんなの京大新聞に載せるのはおかしいやろって。せめぎ合いだ  
ったね。

篠田 ろうそくの炎を消さないように必死だから。「〇〇粉碎闘争」ばかりでは立ち行かないし、ソフ  
トな方向にブランディングした。先生に書いてもらうことも多かったね。

橋本 著名な教授にも原稿料なしで書いてもらえた。もちろん、学生運動を報じることは引き続き柱の  
ひとつだった。でも、それだけではなくて、学内にとどまらず地域に出ようと。成田空港をめぐる三里

塚闘争の現場に行って農家の人と話をした。反原発問題も取材した。根底には、権力側から虐げられている人たちと一緒に物事を考えようという発想があった。自分でデモをするわけではない。僕らのやることは書くこと。直接的には京大に関係ないように見えるテーマでも、成田や伊方原発、水俣など全国の人たちが京大生とのネットワークを持っていて、学生が出向いたり現地の人京大に来たりしていた。そこに、学生の正義感や、社会の関心を引きつけるものがある。

批判精神は絶対

一読まれている感覚はあった。

篠田 販売ボックスにお金を入れてくれない人も含めれば、読む人はけっこういたと思う。

橋本 学生部の買い上げもあって、だいたいの先生に届いた。

橋本 定期購読案内に総長の推薦文を載せた。当時、竹本処分をめぐって紙面で激しく批判していたのに、「今年も推薦を」とお願いして。バランスをとってほしいという言葉こそ添えてあったけど、書いてもらえた。

篠田 懐が深かったね。

橋本 それを見て購読契約してくれた人もいたと思う。でも実際に紙面を見て、特に親御さんがびっくりしていたのではないかな。こんなに学生運動をフォローするのかと。69年以前よりもソフトになっていたのに。

篠田 世間はもっとソフトに、ということだったんだろうね。

橋本 「しらけ」の時代だね。以前の熱気を知る先生と話すと、「最近の学生は何を考えているかわからん」とこぼす。

篠田 世界がどこに向かうか見えないなかで、続いてきたものを残したかったし、受け継がれる批判精神は絶対に捨ててはいけないという意識があった。そこを残しつつ、経営を安定させる体制づくりを考えていた。

一本のタイトルにある「権力にアカンベエ」という考え方。

橋本 それはベースにある。当時、情報発信の手段が少なく、立て看板かビラくらい。もちろん携帯電話もなく、今のように電子的にいろいろできない。そういう意味で学内唯一のマスメディアと言えた。全学で配るといのは影響力があって、それを大学の先生たちも認めていた。もちろんけしからんと思う人もいただろうけど。

嫌味言われてもお金も大事

橋本 1800号記念号では、一般紙各社から広告をもらった。各社にいた京大新聞の先輩たちに声をかけて集めた。当時の一般紙は、60年安保のときに7社共同宣言（※）を出したりと学生運動を批判する論調だったから、広告を見た同学会の人に「おまえら筋はないのか」と嫌みを言われた。でも、お金も大事。先輩の世代が「ブルジョワ新聞」という言葉で一般紙を権力寄りだと批判していたことを思うと、マスコミとの距離感が少し変わったと言えるね。

※60年6月、国会内外で繰り広げられた安保闘争をめぐり、一般紙大手7社が「暴力主義を廃し、議会主義を守れ」という声明を一斉に掲載した。

橋本 僕らのころに反原理（※）も打ち出した。最近また問題になっていて、早くから注視してきたのは正しかったなと思う。

一当時、学内で存在感があった。

篠田 当時から怪しかったよね。

橋本 構内で学生に声をかける。

篠田 教官にも。先生は京大新聞だと勘違いして原稿を書いてしまう。商売敵だし、橋本が熱心に注意を呼びかけていたね。

橋本 原理研の新聞だけが残る大学もあって、危機感をもった。

※原理研究会は旧統一協会系のカルト団体。京大では「京大学生新聞」を発行していた。



この車で大阪の印刷所や各地での取材に行った  
主張はあえて抑えた

一前の世代は社説で積極的に主張した。発信について  
の考えは。

岸根 そのあたりは少し抑えた。

篠田 意図的にね。新聞をどう再建するか考えたとき、  
それ以前のやり方が行き詰まっていたから、学生に受  
け入れられるあり方を模索した。

岸根 どこかの党派に偏ることは避けるべきだと考えて、広く情報を集めようという気持ちでやってい  
た。自分たちで書いて発信するのは書評ぐらい。難しい本を読んで載せた。

一現役の編集部へ一言。

篠田 100年の歴史で様々な画期がある。私たちは学生運動が終焉して今につながる入口にいたんだろ  
うなと思う。そういう流れを追うと理解が深まると思う。

橋本 デジタル化に対応して足腰を整えているのはいいこと。何が起きたかを客観的に伝える姿勢は大  
事にしてほしい。

岸根 卒業しても京大新聞を見れば京都や大学のことが分かる。京大という場で地に足つけて取材を続



けてほしい。偏向しすぎず、かつ当局にすり寄らず。



1978年のボックス。中央にはこのころ買ったという煙突つき灯油ヒーターがある

## (2)京都の4人のやりとり



左から原田敏さん  
(1967-71)、宮崎史朗さん  
(1967-71)、浪岡俊行  
さん(1972-77)、蜷川泰  
司さん(1973-80)＝3月  
10日、京大西部共用室にて  
西部講堂から助っ人

一入社の動機は。

原田 特別な目的はない。作文と面接の入社試験を受けて、全員合格したと思う。夏休み前、経験を積むために1回生だけで編集する号があって、潮岬で合宿して作業したのが印象的。

宮崎 1回生だった67年10月8日、第一次羽田闘争で山崎博昭くんが亡くなった。旅行先の能登半島で報道を見て衝撃を受けて、切り上げて帰ってきた。いろいろ考えて、もっとものごとの裏側も知りたいと思った。それで11月に入った。

一募集があった。

宮崎 常時受け付けていたかな。

浪岡 高校のころ、自分たちが新聞を作って京大新聞に送って、逆に京大新聞が送られてくるという交流があった。反安保のデモに参加した経験もあって、京大の中で居場所はどこだろうと思った。

蜷川 僕の在籍は80年の1年間だけ。芝居をやっていて、学生生活の大半は西部講堂にいた。知り合いから、次が1年生だけになるから面倒を見てと言われて入った。70年代に京大にいた視点で言えば、いくつか裁判闘争があったのと、なんといっても竹本処分だね。入学式が中止になった。それから東アジア反日武装戦線とか、焼身自殺した船本洲治(※1)が衝撃的だった。在籍期間中では、韓国・光州事件(※2)の記事を載せたのをよく覚えている。

※1 75年6月に米軍嘉手納基地前で「皇太子訪沖反対」を叫びながら自殺した活動家。

※2 80年5月に起きた大規模な民主化要求行動。

「ここでギブアップ」

浪岡 僕は主に休刊の前まで。そのあとは助言する程度。休刊直前は僕ら4回生と、3つ上の先輩しかいなかった。下の世代がないから、編集がすごくしんどい。お金もない。この際、一度休刊して人を増やそうということになった。それまでのスタイルを維持できず、ある種の負けだね。しかも、人を増やそうにも周りからは党派の新聞だと思われていた。プロパガンダのつもりは一切ないけど、傍から見たらそういう印象だった。

宮崎 敬遠されがちだったね。

浪岡 逆に、党派性の強い人もほぼ入ってこない。そっちからも敬遠される。文学青年的な編集員が政治色の濃くない紙面づくりをしていたからかな。ただ、まったく人が来ないわけではない。でも、取材と言って新入生をいきなり闘争の現場へ連れ回す。一緒にデモをやりながら記事を書くスタイルを準備のないまま目の当たりにすると、せっかく入っても結局定着しない。

原田 人数が多かったら余裕を持って対応できるけど、週刊で出すことに必死で、「事件があったからあそこに行け」と引き回し状態にってしまったね。

一外から見た印象は。

蜷川 たしかにレットルはあったと思う。休刊後はノンセクト的な色で再建。100年近く続いているのは、あそこでなんとか踏みとどまって色が変わったことも影響したんじゃないかな。

浪岡 休刊の前後で大きな断絶がある。全体としては「権力にアカンベエ」という思考の人が集まるんだけど、新左翼的な政治性からは脱却した。

一休刊の際、発行ペースを落として続けるという選択肢は。

浪岡 そもそも出すのが難しかった。編集部として「ここらでもうギブアップ」という気分もあった。当時は、各大学の学生新聞がなくなっていく時代。京大新聞も合併号の連続で悲鳴を上げながら出していた。50周年の直後で、歴史ある新聞をつぶしてしまってもは申し訳ないし、つぶす権利はない。そう思って、先輩のツテで人を集めた。

数年で広告激減

宮崎 リクルート社から広告がたくさん入ったから、段数を増やしたり広告だけで埋める面を作ったりした。

原田 第3種郵便の割引を受けるためには、広告を全体の半分以下に抑えないといけない。規定を超えないようにギリギリのサイズに調整したね。

宮崎 70年度の1年間は、リクルート側と交渉して何百万円規模の最低保証を取り付けていたけど、それを上回る広告が来た。求人広告のみで埋めて記事がない紙面ができるほど。そういう場合は第3種では郵送できない。

浪岡 広告が載ってこそ新聞というイメージがあったなかで、石油危機以降は全然入らなかった。不況

の苦しさを救ってくれたのはユーピーユー。僕らだけでやるのは限界があるし、プロの支えは大きかった。

原田 僕らは京大闘争の昂揚期。当時から、新聞は続けることに意味があるとする人と、その時々で柔軟に考えようという人がいた。後の世代の話を聞くと、退潮期の難しさを感じるね。記録媒体として検証できる点に、続けることの意義がある。



広告で埋め尽くされた紙面（67年6月6日）

編集長や給料の見直し

一編集会議の雰囲気は。

原田 僕のころは3回生が編集長。先輩が喧嘩腰で意見を言って激論になった。党派とか関係なく紙面内容に関する議論だった。佐世保エンブラ闘争（※）の68年1月あたりから、新聞社内に党派闘争の様相がみられて、私自身、違和感を覚えて距離を置くようになった。1年ほどして戻ると、より一層、京大新聞が主体的に闘争に関わるスタイルに変わった印象を受けた。東大闘争が一番激しくなったころ。戻る前は、いろいろな人がいながら客観的に意見を紹介するイメージだったけど、だんだんそうではなくなった。

※68年1月の米海軍の原子力空母寄港をめぐる反対闘争

宮崎 3回生が幹事になる旧体制は、僕らが最後かな。70年4月から、幹事会は組織するけど、主幹や編集長は置かないことにした。我々67年組とひとつ下の68年組はかなり議論したね。68年組が3回生になったとき、編集長を決めずに全員が編集員という体制にしたと聞いている。

一変えた理由は。

宮崎 大学や教授の権威、そしてそれらがつくる構造の権威。そういうものをつぶそうとして大学闘争をやっている自分たちが、権威主義的な体制を抱えているというのはいかなものかと議論になった。

原田 責任の所在とか、課題が出てくるけど、「権威主義はダメ」と定まったら徹底的にその方針でいく雰囲気があった。

宮崎 だから、それまで編集員に支払われていた奨学金も廃止した。編集員は取材費が出るけど、闘争に行く一般学生はどこからもお金が出ない。そんな不均衡はおかしいという話。お金がなくてやめたわけではない。

一現在は編集長ではなく議事進行役として議長を置く。当時は。

蜷川 各号、紙面の検討から印刷まで統括するデスクを持ち回りで担当する。編集会議はデスクがそのつど回していた。

宮崎 僕らのころは編集長がすべての原稿に目を通して、見出しもつけていたと思う。

原田 世代が少しずれるだけで状況が全然違う。

かつての全国性を落とす

宮崎 編集部だけではなくて、71年に全国全共闘が解散したりして、党派もバラバラになった。

浪岡 京大新聞としてすべての動きを追いきれない。その結果、取り上げられない立場の人たちから敵視されることもあった。

浪岡 72年ごろの連合赤軍の衝撃が強くて、学生運動が立ち行かなくなった。教養部でクラス討論するとなっても、「ああいうものには関わらないでおこう」という空気。ストライキが実現することはあったけど、それは理念に対してではなく授業がなくなることへの賛成だった。

一そういう状況で、京大新聞としての方針の軸は。

浪岡 休刊前は全国紙だという意識が強かったな。

宮崎 東京の救援連絡センターとか、いろいろな団体に新聞を送っていたからね。下手な記事を書いたら全国から批判が来るという緊張感があった。

浪岡 闘争の後退期には、あらゆる運動が四分五裂していた。残った全国的な組織のうち、京大新聞は政党主義ではないから、おのずと全学連に目を向けることになる。

一休刊後、全国紙の意識は。

浪岡 闘争全盛期の意味での全国性は落とした。学内新聞という原点をふまえつつ。

拾い読み⑦ 増える「闘争」記事に批判も 企業広告もあふれんばかり

今回の「拾い読み」は64年1月～69年12月を掲載する。この6年間は、週刊発行で号外2号を含む275号を出した。十数頁に至る号もある。以下、紙面の記述を抜粋した。

| 1969                    | 1968                        | 1967                     | 1966      | 1965      | 1964             | 年                         |
|-------------------------|-----------------------------|--------------------------|-----------|-----------|------------------|---------------------------|
| 9 学生が時計台占拠→機動隊導入        | 12 創刊1400号                  | 11 京大70周年式典<br>第二次羽田闘争   | 9 創刊1300号 | 6 日韓基本条約  | 4 京大卒業生人名録の編纂着手  | 4 創刊40年記念特集号／「戦後日本論」長期連載へ |
| 6 『京大闘争』発行              | 11 創刊45周年記念で京大新聞縮刷版の発行を計画   | 10 第一次羽田闘争翌日に号外「山崎君虐殺さる」 | 4 熊野新寮完成  | 4 米軍、北爆開始 | 11 京大、自衛官入学問題表面化 | 10 東京オリンピック               |
| 2 京大全寮委が学生部封鎖→当局側逆封鎖で解除 | 6 東大で学生が安田講堂を占拠→機動隊入れ排除→再占拠 | 4 「ぼくらの中のベトナム」連載へ        | 1 早大闘争始まる | 2 米軍、北爆開始 | 10 東京オリンピック      | 4 創刊40年記念特集号／「戦後日本論」長期連載へ |
| 1 安田封鎖解除<br>東大入試中止      | 1 米空母エンブラ寄港                 |                          |           |           |                  |                           |

1964 年

新聞社▼4 頁 15 円／年 400 円／編集員募集／原稿募集／懸賞小説：入選 2 万円、佳作 5 千円▼創刊 40 周年記念講演会：戦後日本論▼『京大を受ける人のために』270 円▼正門・有信会前・図書館前・吉田正門・食堂（吉田・西・医・北）にて無人スタンド販売→料金の回収率が低下したので 5 月 4 日号から立売も行う／発行より 3 日間 時事▼韓国学生思想と行動：毎日新聞ソウル特派員▼恐るべき公害▼近畿地区大学、バイト斡旋再開▼自衛隊、宇治グラウンドで演習：寮生反対▼各地でデモ：原潜、佐世保に入港▼複眼時評：戦時中、新聞を開くのが怖かった／戦後も読まない／商業新聞の低俗な記事を押しかけられて発狂しない気持ちは解せない▼学園評論（社説）：中国核実験に反対 教育研究▼京大原子炉、臨界実験成功▼アフリカ研、ゴリラと対面 6 時間▼マツタケ栽培実験進む 大学運営▼新しい大学創造を：奥田学長、就任挨拶「学生諸君の声を聞きたいので、私に手紙を出してほしい／誠実な声なら、実現に努力する」▼労働強化危惧：京大病院業務部長「企業精神に偏るな」▼「熊野寮」一挙実現へ▼京大構内を一新：長期施設計画明らかに：西部→京大会館、体育館▼学園論壇：京大に保育所を▼学生も設計参加：教育学部移転で話し合い▼寮総務ら座談会：規定がないのが理想／全寮連はセクト臭強い▼文部省、初の大学白書出す→大学人は警戒▼学園の眼：生協への提言→汚物を捨てた手でうどんを手づかみ、衛生にとどまらない根本的問題 学生▼生協生活調査：意外に少ない書籍費▼署名 4 千人：生協地下売店移転に▼府警本部長の「新聞社の記者と学生新聞の学生を間違えて殴った」との発言へ抗議文：京都の学生新聞・放送局（同志社・学芸・工芸繊維・立命館・京大）の連名→▼山岳部ネパールへ：学術調査▼応援歌、一編も集まらず→1 等 5 千円▼京大民青が分裂：京大学生統一会議を結成▼体育館の獲得目指し体育会が準備委設立 文化▼理解されなかった芸術映画▼正倉院展の魅力▼書評『ポポロ事件』：情報収集の実態暴露 広告▼「印刷界のパイオニア」大日本スクリーン▼IBM 全面広告▼劇場や飲食店から祝 40 周年広告▼通産省・電源開発学生論文募集▼比叡京福ランド開場▼麻雀新開店▼国立近代美術館、ダイハツ、日本生命、日本電信電話公社、日本ブラッドバンク、不二家▼時に思う：創刊 40 周年を祝して（1964 年 4 月 13 日号）



学生部長寄稿 100% 学生自身の手になる新聞の果たした仕事は、時には若さに任せてのいさみ足的な誤りもあったのかもしれない。みる人々によってその評価はさまざまであろう。これに対する正しく評価を下す自信はない。しかし少なくとも京大学生の世論をその時々忠実に表現しようとするその努力は評価すべきであろう。



1965 年

新聞社▼購読：年 450 円▼卒業生人名録 12 月創刊、4 万名を収録：日増しに要望高まった▼第 6・7 回懸賞小説▼編集員募集：1 回生若干名、作文を課す／『京大を受ける〜』京大親学会と共同編集：320 円▼佐々木惣一・初代顧問死去→入山雄一・名誉顧問寄稿「佐々木先生と新聞」▼同人誌寄贈のお願い→文学運動創造の芽を広く支援するため紹介企画を新設 時事▼国立 9 大学声明：就職青田刈り禁止呼びかけ▼世界経済の動向：発展の不均等を露呈▼黒板（編集員コラム）：五輪映画騒動に腹が立つ▼立命館大の在日朝鮮留学生の寄稿：「関東大震災の時の虐殺を忘れない」▼3 府県学連統一行動、北爆日韓反対で 7 千人▼ベトナムの図式：主役は米国→毎日新聞外信部員寄稿▼医学生全国統一行動：インターン制に反対▼黒板：農地報償法が社会党の懸命の阻止にもかかわらず自民党の強引な会期延長などで成立してしまった▼長崎大学館闘争：権力に勝てなかった民主化運動▼ヒロシマの印象：編集員「被爆者は、原水禁運動の発火点の役目が終わったいま、『政治の道具』でしかないのかも」 教育研究▼防災研、チリと共同研究▼東洋学文献センター開設▼人文研、全文献マイクロフィルムに▼アメリカ反戦運動の実態：米国人指導者寄稿▼オーストリアの新聞記者の講演▼白血病予知をつきとめた医学部助手：12 年の執念実る▼米農務省、農学部へ研究費 2 万ドル贈与 大学運営▼燃料化学教室焼く：現存最古の赤レンガ▼京大 70 周年、ぐらつく記念事業計画：寄附が不況で集まらない▼大学・学生の意思疎通機関を：厚生問題対策協議会が発足▼宇治寮、今年度限り廃止▼京大工業教員養成所、定員満たず▼留学生に施設：日本人学生も協同生活▼大学院生寮発足▼学園の眼：教養 A 号館地下に控室▼同志社大此春寮、教授会が閉鎖勧告「寮自治の限界越える」▼ルポ：山形大の寮闘争▼激化する各大学闘争：お茶の水大→新寮規定改定反対で全学授業放棄／高崎経済大→授業料値上げ、機動隊に守られ可決▼学園短信：九大新寮完成▼吉田寮憲章改正：総務会から委員会制へ▼団交決裂：京大寮闘争、学長「受益者負担は当然」▼宇治に総合研究所：理工系研究所を集中▼同志社大学館闘争終わる：学生側に運営権学生▼反戦へ学生・労働者 3 千人結集▼教養部、250 人留年か▼宿状況好転の見込みなし▼学園論壇（投稿）：不払闘争の理由→寮連委員長寄稿▼野球部、関西六大学復帰までできず▼京大生本紙意識調査→望まれる全国共闘結成／強い米ベトナム侵略批判▼女子学生の 4 分の 1 が喫煙：生活実態調査 文化▼会社員や詩人、教員ら書評▼アジア映画祭を見て▼懸賞小説選考発表：49 編しか応募ないジリ貧▼書評：ウイルスの総体を見事に解説▼書評：『ヒロシマ・ノート』▼新連載「京大雑誌拝見」：文学不

毛の地から決別を▼ツタンカーメン展に寄せて：同志社女子大講師  
広告▼図書専門店開設▼ドイツ万年筆モンブラン▼六甲山ホテルの  
ジンギスカン鍋▼銀行（京都・京都信用・神戸・埼玉・北陸・横浜）  
▼トヨタ／日本興業銀行／古河電工ロケット／ワコール／大阪府庁  
／野村総研／松下電工／明治生命



1966年

新聞社▼卒業人名録、好評で重版▼購読：年550円「あなたと京大を結ぶ一つのきずな」▼発行部数2万▼内線で迷惑をかけることが多かった→直通電話を開通 時事▼大阪・京都府学連がデモ：国・私鉄運賃値上げ反対で→逮捕者29名▼複眼時評：女子学生亡国論→男性側は徳川時代以来、なんの進歩もない▼労働運動の転機と今春闘：関西労働者協会会員寄稿▼小選挙区制の問題点：法学部助教授▼憲法第9条と日本防衛論争▼ルポ：原潜闘争現地報告▼5・25制服警官学内立ち入り調査：官憲の学園侵入→生協、同学会、学生部長、抗議文を渡す▼学園評論：府警は大衆的に弾劾されるべき／総長はその先頭に立て／学生は完膚なきまで国家権力の否定の構造を▼三高の影また消える：教養部木造研究室取壊→跡地はグラウンドに▼学園評論：市電市バス料金問題▼生協に盗賊侵入：35万円盗まれる 教育研究▼花山天文台：山奥へ移転の運命▼交通情報案内に新兵器／血圧の連続記録 大学運営▼ルポ：早稲田大学スト▼百万遍などの学生会館に機動隊200名：退館の仮処分執行▼インターン制廃止へ：厚相国会で答弁、研修義務付け→医学連、全廃要求を貫徹▼入学金は一挙4千円に▼大学当局、熊野寮生全員の家庭に学校側督促状を発送、寮側は負担交渉継続求める▼吉田寮南庭に娯楽場建設進む：寮執委では抗議→学友会館の付属施設として撞球場、麻雀、娯楽室を建設へ▼教科書合戦休戦：ナカニシヤ・生協書籍部、仕入れ販売で協定▼生協利用者懇談会：利用者と従業員、理事との直接の話し合い▼大学協議会開かれる：学長選挙権拡大を決定→教授から専任講師まで▼歯学部設置原案を提出▼学園評論：総長選挙権拡大→学生が学長選挙権を持たなければという我々の主張を示唆したい▼北部食堂改築着工：845万円▼保育所開設：建設費は384万円▼職員組合がスト：京大集会に千人参加▼文学部東館の噴水→以文会の寄附金約100万円で作られた 学生▼浪人3分の1割る▼黒板：我々は余りにもテレビや雑誌、新聞を通じて考えることに慣れすぎている▼相次ぐ講演会・音楽会→各団体予定出揃う：ハイキングやスポーツ大会も▼陸上部19年ぶり優勝▼ある生活集団「ユートピアを求めて」（4）原理研究会→京都に教会が誕生したのは去年の9月／11月祭で展示も／現在、京大生は10人ほどが伝道者に／その他京女大、同志社など総勢20人近くが集団生活／廃品回収や花売りで生計▼教養部自治委「授業放棄」決議：「スト案」否決▼11月祭模擬店に人気：60枠に230超の応募 文化▼複眼時評：歴史ブームの背後→ツンドクという読者の抵抗▼現代芸術の二方向：武蔵野美術大学教授▼第7回懸賞小説選考評：雑駁な感じ→一応の水準作の多い内容／応募は減少し40篇▼映画評：博物館映画で失敗作▼東京大阪ジェット3400円空の旅：新幹線族の増加に伴う乗客激減受け実施▼サルトル氏・ボーボワール氏講演▼座談会：総長「楽友会館より大きい京大会館を考えている」／教員「周年事業は非民主的な運営、白紙還元して再検討せよ」／学生「学生生活は豊かにならぬ」 広告▼日本IBMタイアップ記事▼兵庫県自動車学校▼博報堂：会社訪問歓迎、但し男子 ▼本紙に対する意見に答えて（1966年7月25日号）

読者アンケートで、難解、観念的、自己満足、学生運動・政治問題が多すぎる、投書欄を拡充せよ、一部の左翼の機関紙化、中立で公正であれ、誤植が多い、アンケートの選択肢が少ない、値段が高い、無料配布せよ、などの意見が見られた。

→「中立」が編集員主体の排除を意味するならば、現実問題の取舍選択は不可能であり、我々は思索者としての意味を失う。我々は学生であり人間であることを確認し、編集会議での討論によって個々の編集員の問題意識の深め合いの中から新聞編集している。事実の見誤りがあれば投書で指摘してほしい。  
→「学生運動が多すぎる」は、学生団体の活動としてはやむを得ない。しかし、読者との対話をなくすことはしない。



総長らを集めた座談会 1966年11月14日号

1967年

新聞社▼購読：年550円／発行部数2万▼卒業者名録刊行 時事▼市電市バス値上案否決：市長は日共と絶縁▼学園評論：赤松判決を考える  
→「不法侵入」罪の危険性▼アンチサラリーマン族へ：記者、広告マン、プログラマーの紹介 教育研究▼コンピュータの創る未来像：日本IBM  
学生懸賞論文1位作→コンピュータ＝創造能力の付加は不可能に近いが、有効な補助手段となりうる 大学運営▼全学連に破防法適用か、学生断固粉碎の構え▼「大阪市大は左翼偏向」：自民党市議団が声明、学

生は抗議→「アカの教育をする大学に市が助成するのは筋が通らぬ」▼5・25京大警官侵入事件公判へ：起訴された藤枝君公判、長期的展望を予見し大衆闘争の方向追求を▼自衛隊が深夜に演習：水産学科が抗議▼国立大授業料値上げ▼理学部化学教室70周年記念事業：産学協同を露骨に表す▼70周年事業・同学会・院協が不協力訴え：財界の予算使うのは学問の自由の侵害▼合格者発表、昨年より遅れそう：受験生増加で採点が間に合わない▼西部食堂で拡張工事：雑貨店売場増設、営業延長も▼生協総代、1回生から活発な意見：「政治闘争の大衆化を図れ」／食器不足や食券売り場の非効率の指摘も▼科研費総額40億円：西独の7千億円と比べて少額▼本紙学長会見・搜索は事案に応じて：大管法に代わる自己規制進化か▼関学大、授業料値上げ 学生▼文1回生・山崎君虐殺さる：10月8日羽田で機動隊と衝突中／断固たる行動を展開せよ／追悼に3千人参列▼こくばん：産業新聞は10・8参加学生を「暴徒」と表現→本紙のようなミニコミ新聞の存在価値の大きさを痛感▼10・21に反戦の大波・全国で100万人が参加▼11・12羽田闘争報告→自ら流した血を洗うことこそ我々に残された任務▼原空母反対で府学連、再建全学連初の闘争へ▼府学連カンパ活動に府警干渉：学生、市民が抗議し撃退▼ベトナム・砂川に団結強化：関西学生3千人デモ▼沖縄高校生座談会「沖縄のころ」：ジェット機の爆音で目を覚ます／大声しか通じない▼学園短信：都立大、西南学院▼群馬大「はだか祭」→新入寮生がパンツ

一枚で踊り街頭にくり出す▼スポットライト：新文学部委員長→ベレー帽にネクタイ、秘められた学生運動への情熱は並々ならぬもの▼東大戦・ラグビー逆転勝▼学園の眼：全国の学生生協書籍部で万引き



が多発。京大では1月で23万円の被害▼複眼時評（教員寄稿）：学部によって答案の熱心さに差がある▼自衛官公演に抗議集会：300人の学生が結集▼学園評論：行動する自治会再建を→全学共闘会議が「行動を起こし続け得る」期待で結成、自治会空洞化阻止へ▼本社全学世論調査→1500人に配布、896人回収▼探検部、24時間「海底生活」実験成功▼留年の調査結果：クラブが理由の第一→文部省が京大生約2500人調査 文化▼京大写真部、創立30周年写真展▼同志社大映画祭を観て▼演劇映画連盟結成▼談話：大島渚の映画観▼書評『ロシア経済思想史の研究』：東大院生寄稿▼劇評：『奇想天外神聖喜歌劇』→ちっとも奇想天外ではない／『汚れた手』名演

だが方向が間違っていないか▼「仲間意識」決別を：京大演劇界の危機→全く愚劣な舞台構築と批判精神で悪循環（※翌年の紙面に反論投稿：「観客はもっと利口だ」） 広告▼日本ビクター卓上型ステレオ：80分音楽を聴ける▼親学会『京大を受ける人のために』▼三菱電機「あなたをゆたかにします」／大日本印刷「日本の文化とともに躍進をつづける」▼西友ストア全面広告▼早稲田大学新聞縮刷版▼花王、河合塾、トヨタ千ドルカー35・9万円、京都レンタカー

全学スト・総長団交 1967年7月3日号

## 1968年

新聞社▼抗議声明：民青系学生による立命大新聞での破壊活動糾弾▼新幹事→主幹・編集長・編集担当幹事・業務会計担当幹事▼新編集員募集→新1回生はもとより在学中の学生諸君も期待の応募を期待▼映画界への招待：京大西部講堂で映画会を開く→入場無料▼第9回懸賞小説・最終選考評→例年になく高い水準：入選作2編 時事▼IBM社インタビュー：徹底する個人の尊重▼ルポ：サバンナの長征▼ルポ：韓国→特需という大義、現実には人命貿易▼動揺するチェコスロバキア▼学園評論：反政府闘争という個別闘争の中から国際性を引き出し戦争阻止へ▼原空母寄港に怒り：佐世保で5万人決起→機動隊と衝突、学生50人逮捕▼成田新空港ボーリング調査：全学連が阻止へ▼米軍車輸送拒否問題で騒乱罪▼反戦労働者寄稿▼返還拒否の会生まれる：羽田闘争参加を理由とする奨学金打ち切りに抗議教育研究▼たん白質合成に成功▼電子計算機完成 大学運営▼入学式学長告示「学生との話し合いを」▼学長、府警に抗議：覆面パト侵入▼機動隊学内に導入：学生5人逮捕→登録医制粉碎ストの医学部に機動隊300人▼教養部廃止の動き：挙党一致の学生運動対策▼日大、千名の角材ヘルメット部隊／東京教育大：筑波移転に反対し本部封鎖▼機動隊導入も辞せず：東大総長声明▼東大ストで機動隊導入▼九大、米軍機墜落めぐり学内衝突▼神戸大寮闘争：本部事務封鎖へ▼日大に機動隊→全理事退陣▼東洋大に機動隊▼本紙学長会見：機動隊導入→大学の態度は不変／奨学金問題、学生部長の回答知らぬ▼

生協食堂値上げ：ライス 30 円に▼西部取り壊し始まる：体育館建設へ 学生▼5・25 事件、藤枝君に罰金 1 万円▼本紙ルポ「にっぽんの断層地帯」を見て、NHK がバンドユニオンを取材▼七大戦日程決まる▼ルポ：中大授業料闘争→闘いの主体はクラス・サークル連合を核として結集した様々な層の部隊▼阪大教養部自治会：学生部本館を占拠▼神戸大教養無期限スト：大衆団交を要求▼学園評論：エンブラ闘争総括→「暴力性」を貫くことで高揚を切り開いたことは大きく評価しなければ／政府が破防法攻撃を仕掛けてくれば、すぐにも反撃を▼東大・学園封鎖バリケードへ：学園闘争に戦術転換 文化▼映画評：2001 年宇宙の旅→宇宙基地がつくられる話▼特集：そぞろあるき→5 頁で構内・近辺写真特集 広告▼カネボウ懸賞、特賞は車▼京極東宝劇場：紙面の端に学生割引券▼日本航空海外短期留学「ジャールパック」欧州 22 日間 46 万円▼阪神百貨店「常にユニークでありたい」／住友金属「永遠の企業」▼毎日新聞「紙面がもっとも意欲的という評価を受けている」▼日本合成ゴム全面▼学園評論（社説）：学生新聞と学園新聞（1968 年 4 月 15 日号）

幹事交代にあたって方針を次のように位置付ける。第一には学生新聞という側面→学生の全状況、政治・文化・学問の領域に積極的に参加してゆく。第二には学園新聞という側面→一貫して学内唯一のマス・メディアとして機能してきた。今後もその機能を追求する。（中略）大学本来の目的である学問研究と、その場の保証としての大学機構を変革する主体を京大新聞自ら作りあげてゆかなければならない。



風景写真と企業広告 1968 年 4 月 29 日号

1969 年

新聞社▼学園評論：70 年を視座に総体的活動を／68 年度の批判的な総括→根底的な状況を十分把握できず、豊富なテーマの準備もできず▼京大闘争への意見・資料を募集 時事▼10・21 闘争、官憲未曾有の厳戒体制→都内各所でゲリラ闘争：1200 余名の逮捕者▼学園評論：大衆の危機意識とファシズム▼人文研の研究室に搜索：訪米阻止の事前弾圧 教育研究▼東南ア研の研究費、フォード財団が打ち切り：学園闘争により今後の研究が円滑に行われそうもないと判断された▼4 教官がレポート試験に糾弾声明▼催涙液の医学的実験進む→精神異常お

こす毒性▼大型電算センター、本学で完成 大学運営▼京大など振分け入試を拒否：東大入試中止受け▼立命大で本部封鎖：民青系は解除要求▼関学、機動隊導入して入試強行：全共闘、激しく抵抗▼京都府警、紛争解決に役立つ場合は大学の要請にかかわらず機動隊出動判断へ▼ドキュメント狂気の 3 日間：学生部封鎖の根源▼京大入試、試験場探しで難航▼学内へ機動隊乱入：東一条にバリケードで対抗▼大学当局、卒業式を中止▼大学当局、事態収拾を計る：教養闘争委、授業再開中止を要求▼岡大に機動隊乱入：激闘、警官死亡▼4・28 を前に予備弾圧：中大、早大、法大に機動隊▼新文部次官通達：警察の判断で学内出動へ▼文相「国立大学特別処置法」閣議で了承：紛争大学の予算カット▼大学立法に



抗し教養闘争委、バリケード構築へ▼学内に再び機動隊：全共闘の全学封鎖に▼大学法発効日、広島大に機動隊→全共闘は徹底抗戦▼阪大にも機動隊：全闘委と封鎖阻止派が衝突▼滋賀大・教育本館封鎖：全学部集会を要求▼中大・駒沢大に機動隊▼法学部試験レポートに→法共闘は白紙撤回要求▼工学部院入試強行へ：試験場も秘密▼京大闘争・収拾策動への反撃開始→当局機動隊導入を決意か▼慶大がロックアウト：機動隊乱入で 53 人不当逮捕▼70 周年寄付金 17 億円据え置き→紛争収まるまで延期▼大阪市大封鎖解除：塔屋上で徹底抗戦▼東大文、封鎖解除から授業再開へ▼早大で授業始まる：正門に機動隊▼文部省正式見解：高校生の政治活動を禁止する▼北大も封鎖全面解除：徹底抗戦で逮捕 30 人超▼阪大に機動隊導入：正常化の流れ▼文部省、入試強行を決意▼岡大、機動隊駐留で授業強行▼各大学で入試強行▼医学部授業再開：機動隊の制圧下で 学生▼寮闘委、団交決裂で学生部封鎖：民青系学生が妨害▼死守むなしく安田講堂強権的に解除：東大当局機動隊を導入▼学生部封鎖解除される→大学当局、五者と共謀：丸太、放水など暴力を行使▼各学部、順次無期限ストに突入▼学生生活委員長ハNST：バリケードの自主撤去を求めて▼全共闘、本部時計台を封鎖：民青行動隊と武装衝突▼受験とは何か：バリケードの中からの告発▼時計台封鎖、暴力的に解除される▼全共闘、入学式を実力で阻止す▼名大教養部スト実委、本部建物を封鎖▼同大全共闘、今出川学舎を封鎖▼阪大工学部がスト：全闘委、学生部を再封鎖▼月 2 万 4 千円の生活費：学生部、生活実態調査▼レポート試験闘争・白紙撤回勝ち取れず▼農学部、スト解除案を圧倒的否決：無期限スト継続▼探検部、ボックスを自主封鎖▼ルポ東大裁判：統一被告団結成▼全共闘・工学部院入試を粉砕▼時計台封鎖全面解除▼機動隊導入に抗議続出：増大する教官内部の分裂▼学園評論：巨大な闘いを準備せよ▼授業再開に反撃開始：全共闘総決起▼学園評論：市民社会末端にまでの波及力を▼府警、一斉に搜索▼工学部、スト継続を確認▼反逆する高校生：大学闘争を受け継ぎ高校生の闘争が全国に広がる▼11 月祭細々と▼工学部でスト解除決定：学生大会で民青系提案 文化▼独立プロ映画の現在：自主制作上映運動の登場▼収束期に入った独立プロの壁▼

投稿・酒さまざま：どぶろくは民衆の酒／朝鮮の家庭の中から生まれる▼書評：葬送の倫理 広告▼1418 号で 9 頁が求人広告で埋まるなど引き続き出稿多数

何度も機動隊が入構 1969 年 5 月 26 日号

